

SD1203 (遺構：図2144、遺物：図2143)

検出状況 東部中央南寄りのSD0381東側に位置し、SK06454を切る。V層上面にて検出し、平面形は明瞭であった。

形状 幅約0.9m～1.0mで、北西から南東方向にのびる。深さは約0.2mで、底面は平坦であり、壁面の傾斜は緩やかである。

埋土 3層に分層した。最下層は壁面崩落土と考えられるブロック土を含む土が壁面沿いに堆積し、その上部には中央が窪む堆積がみられることから、自然堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器24点が出土した。

V期の遺物が目立ち、わずかにVI期の遺物が含まれる。また、底面からわずかに浮いた位置でV期壺の底部片(7738)が正位で出土している。

出土遺物 7738はV期壺。器面の摩耗が著しいが、胴部下半全体に赤彩が施されている。胴部が緩やかに立ち上がり、その最大径は中央やや上に位置する。7739はV期高坏B3b類。坏底部から口縁部が外反し、端部を丸くおさめる。外面の稜は比較的明瞭である。

時期 出土遺物の時期から、V期に掘削され、VI期には埋没したと考えられる。

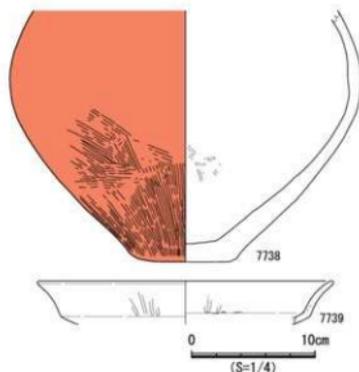


図2143 SD1203 遺物実測図

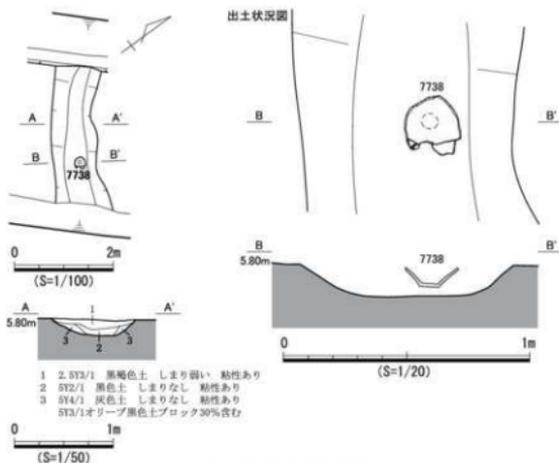


図2144 SD1203 遺構図

SD1213 (遺構: 図2145、遺物: 図2146)

検出状況 東部中央南寄りのSD0381西側に位置し、東側をSD1212に切られる。V層上面で検出したが平面形は不明瞭で、調査区北壁の土層を手掛かりに精査し検出した。

形状 南北側は調査区域外にのび、東側をSD1212に切られるため、全容や規模は不明である。確認した幅は北側で約2.3m、南側で約1.8mである。深さは約0.2mであり、底面は平坦で、壁面の傾斜は緩やかである。

埋土 2層に分層した。全体的にブロック土の混入が目立ち、層界の凹凸も認められることから人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器131点、石器類3点が出土した。出土土器はV期～VII期のものが多く、埋土上層で砥石が2点出土した。

出土遺物 7740はV期～VI期壺A1a類。口縁部が

大きく外反し、端部を下方に拡張する。端部には擬凹線が認められ、その上から円形刺突文を重ねる。7741はVII期甕D2b類。口縁部が屈曲し、上段が外反する。7742は叩石。長楕円礫を素材とし、稜線に沿って敲打痕が残る。また、部分的に煤が付着している。7743は砥石。大型の楕円礫の平坦面を砥面として利用している。

時期 出土遺物の時期から、V期～VII期と考えられる。

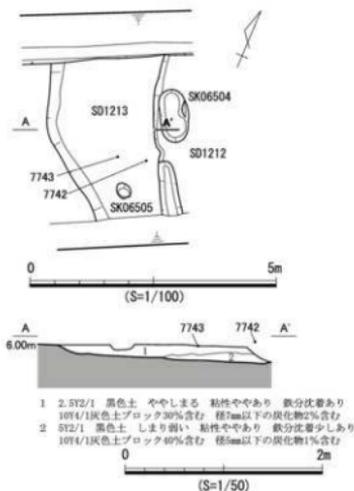


図2145 SD1213 遺構図

- 1 2.SY2/1 黒色土 ややしめる 粘性ややあり 鉄分沈着あり 10%以下/1灰色土ブロック40%含む 径5mm以下の炭化物2%含む
- 2 SY2/1 黒色土 しまり強い 粘性ややあり 鉄分沈着少しあり 10%以下/1灰色土ブロック40%含む 径5mm以下の炭化物1%含む

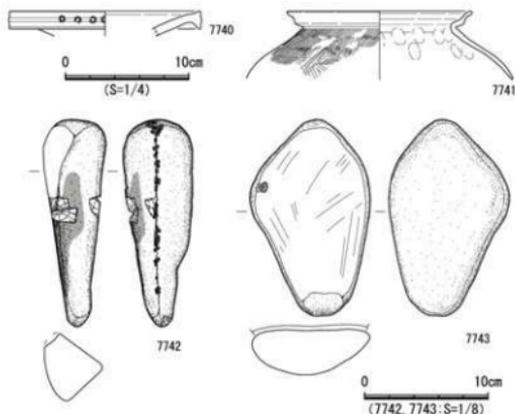


図2146 SD1213 遺物実測図

SD1215 (遺構: 図2147)

検出状況 東部中央南寄りのSD0381西側に位置し、東側をSD1213に、西側をSB555に切られ、西側でSB556を切る。V層上面で検出したが、平面形は不明瞭で、調査区北壁の土層を手掛かりに精査し検出した。

形状 南北側は調査区域外にのび、東西側は別遺構に切られるため、全容や規模は不明である。確認した幅は北端で約4.2m、南端で約2.5mであり、主軸は北西から南東方向であるが、北側は北東へ

向かって湾曲する。深さは約0.3mで、底面は全体的に丸みを帯び、やや凹凸がある。壁面の傾斜は緩やかで、東壁面には幅広い平坦面がある。

埋土 7層に分層した。1層は遺構全城を覆い、2～4層は5層を切るように堆積する。また埋土西側には炭化物の混入が目立った。本遺構は西側で炭化材がまとまって出土したSB556を切っていることから、それらの遺物が混入した可能性がある。

遺物出土状況 埋土中から土器382点、木製品3点が出土した。出土土器はVI期～VII期のものが多いが、いずれも細片であり図示していない。

時期 VI期～VII期のSB555に切られ、V期～VII期のSB556に切られること、出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。

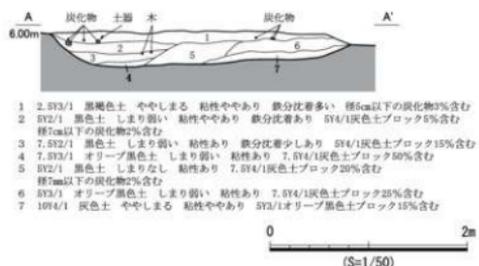
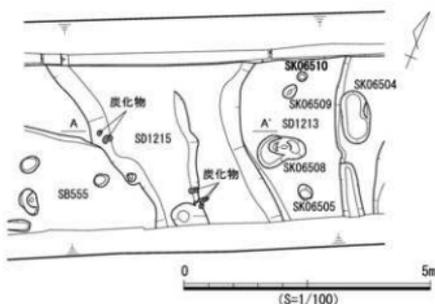


図 2147 SD1215 遺構図

SD1217 (遺構: 図 2148、遺物: 図 2149)

検出状況 東部中央南寄りに位置する。本遺構周辺は明確な遺構の平面形が把握できなかったものの、V層が表出していなかったため全体的に掘り下げ、SK06518埋土上面で本遺構を検出した。本遺構の

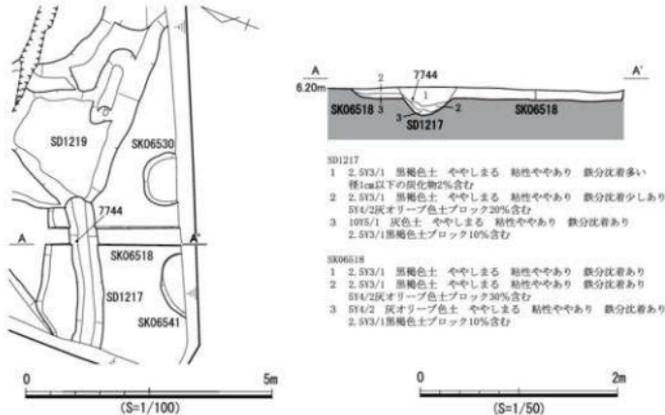


図 2148 SD1217 遺構図

西側は調査区域外にのびるが、未調査区を隔て約2.5m西側の調査区域では検出できなかった。なお、東側はSD1219に切られる。

形状 幅約0.6mで、およそ東西にのびる。深さは約0.3mで、底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土 3層に分層した。下層にブロック土が混入し、層界の凹凸も認められることから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器82点が出土した。Ⅶ期の遺物が多いものの、大半は小片である。

出土遺物 7744はⅦ期高坏D類。坏部が碗状を呈し、脚部は坏底部から円錐状に開く。

時期 Ⅶ期末～Ⅷ期初めのSD1219に切られること、Ⅶ期のSK06518を切ること、出土遺物の時期などから、Ⅶ期と考えられる。

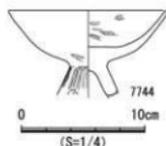


図 2149 SD1217 遺物実測図

SD1219 (遺構：図 2150～2152、遺物：図 2153・2154)

検出状況 東部中央南寄りに位置する。Ⅴ層上面にて検出したが平面形は不明瞭で、調査区北壁の土層を手掛かりに精査し検出した。なお、北側と東側は調査区域外にのび、西側でSD1217を切り、東側でSB555に切られる。

形状 北端幅約2.5m、東端幅約1.3mであり、L字状に屈曲する。深さは最深部で約0.3mであり、底面は凹凸が著しく、遺物がまとも出土した箇所が最も深い。なお、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土 3層に分層した。ブロック土の混入があり、出土遺物に縦位のものが認められるため、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器3,468点、石器類49点が出土した。埋土全体から多量に土器片が出土しており、特に屈曲部付近の埋土中層からの出土が顕著である。屈曲部の遺物の多くは横位で出土しているが、約1.6m離れた破片も接合していることから、土器が割れた直後にこの場にまとめて廃棄された可能性が高い。また、土器とともに亜円礫も幾つか出土した。溝の東側では土器とともに炭化材も出土した。屈曲部の遺物は大半が2層内で接合しているが、東側では2層と3層から出土した土器が接合している。なお、出土土器はⅦ期末からⅧ期初め頃にまとまり、Ⅴ期～Ⅵ期の土器片もわずかに出土した。

出土遺物 7745はⅧ期壺。口縁部が外反し、端部に平坦面を形成する。胴部にはハケ目が残るが、器面の磨耗、剥落が著しい。7746はⅥ期～Ⅶ期壺A1b類。口縁部が大きく外反し、端部を肥厚して顕著な平坦面を形成する。端部には羽状文が認められる。7747はⅦ期壺。胴部外面にハケ目がわずかに認められる。7748はⅧ期壺。平底の底部が突出し、底部には木葉痕のような線刻が認められる。7749はⅨ期壺。柳ヶ坪型壺で、口縁部の内外面に羽状文を施文する。胴部には直線文と羽状文が認められる。7750はⅥ期～Ⅶ期壺B2類。口縁部が短く外反し、端部を肥厚して平坦面を形成する。7751はⅥ期～Ⅶ期壺B類。脚部は低く、わずかに内湾する。底部内面には炭化物塊が付着する。7752、7753はⅥ期～Ⅶ期壺D類脚部。7752は器壁が薄く、7753は胴部内外面ともに煤が付着する。7754はⅦ期壺B3類。口縁部がくの字に屈折する。断続的なナデによって端部を整形するため、平坦な部分

や尖り気味の部分などが認められる。胴部にはハケ調整が認められる。7755～7758はⅦ期甕D2a類。口縁部下段が開き、上段が屈曲して外反する。7756は胴部に煤が付着し、肩部が強く張る。7757、7758は、端部に平坦面をもつ。7759、7760はⅦ期甕D2b類。口縁部が屈曲し、外方に開く。7759には口縁部に打ち欠きが認められる。7761はⅦ期甕D2b類。口縁部が屈曲し、上段が短く外反する。胴部には煤が付着する。7762はⅦ期甕D類。口縁部が屈曲し、大きく開く。7763はⅥ期～Ⅶ期鉢B類。底部に穿孔が認められ、胴部は外傾して立ち上がる。7764はⅤ期高坏B3b類。坏底部から口縁部が大きく外反する。屈曲部の段、稜はやや不明瞭である。7765はⅤ期～Ⅵ期高坏B1a類。口縁部が直線的に外傾し、短部に平坦面を形成する。脚部は円柱状に直立し、裾部が開く。7766はⅧ期～Ⅸ期高坏。小型型で脚部が円錐状に開く。7767はⅦ期器台C2類。坏部は緩やかな丸みを帯びる。7768

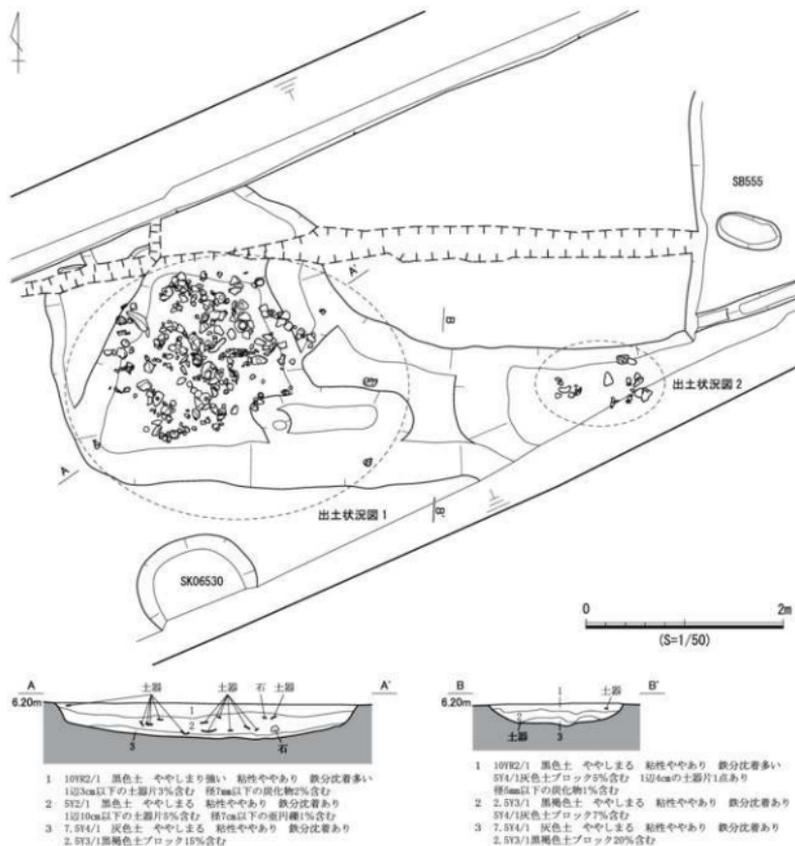


図 2150 SD1219 遺構図 (1)

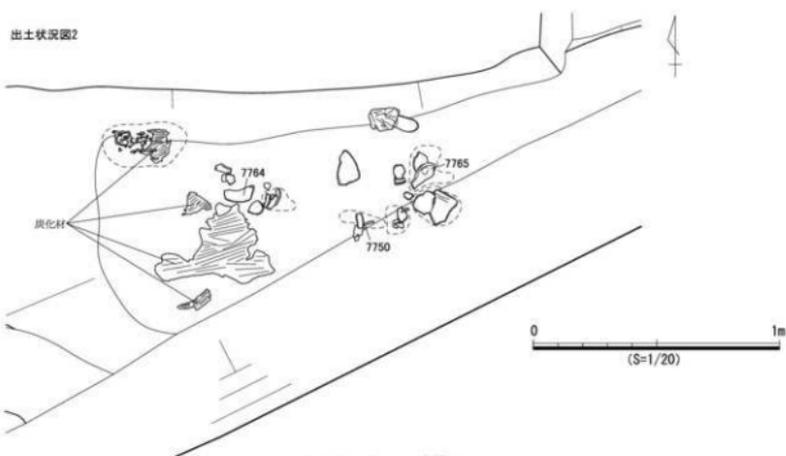
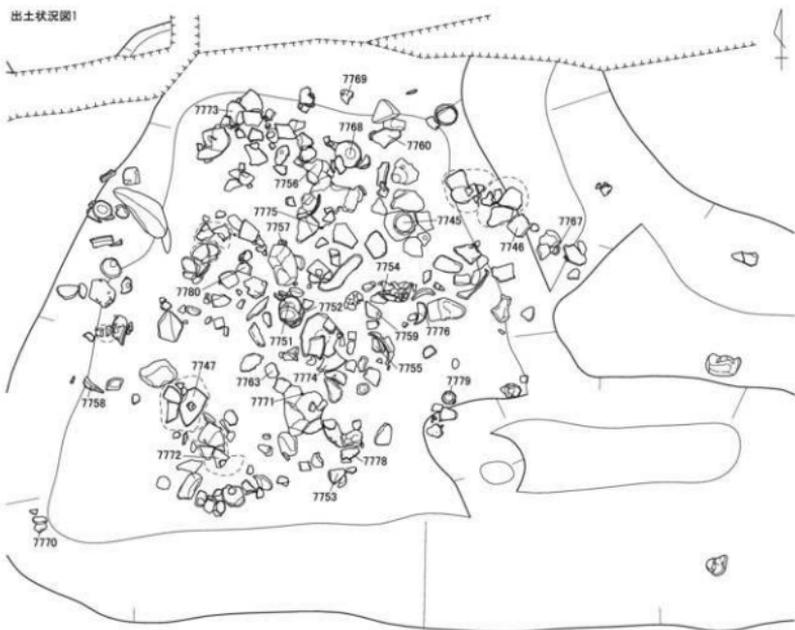
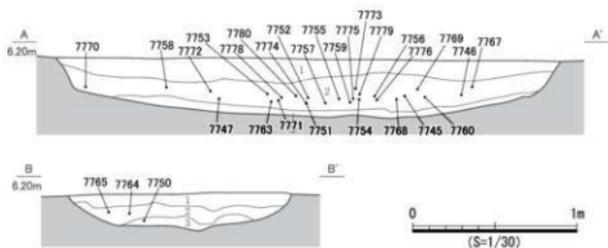


図 2151 SD1219 遺構図 (2)

はⅥ期～Ⅶ期高坏G1類。平坦な坏底部から口縁部が直線的に外傾する。内面の段、外面の稜ともに比較的明瞭で、端部を丸くおさめる。7769はⅥ期～Ⅶ期高坏C類。脚部が付根から円錐状に開く。7770はⅦ期高坏C類。坏底部は平坦で、脚部は付根から円錐状に開く。透孔を4方向に配置する。7771はⅦ期高坏D類。脚部が付根から円錐状に開き、透孔を3方向に配置する。7772はⅦ期高坏D1類。坏部が大きく開き、浅い皿状を呈する。坏底部は小さく、内面の段、外面の稜ともに比較的明瞭に残る。7774と形状が類似するため、Ⅷ期の可能性がある。7773はⅦ期高坏G2類。坏底部に平



遺物接合状況

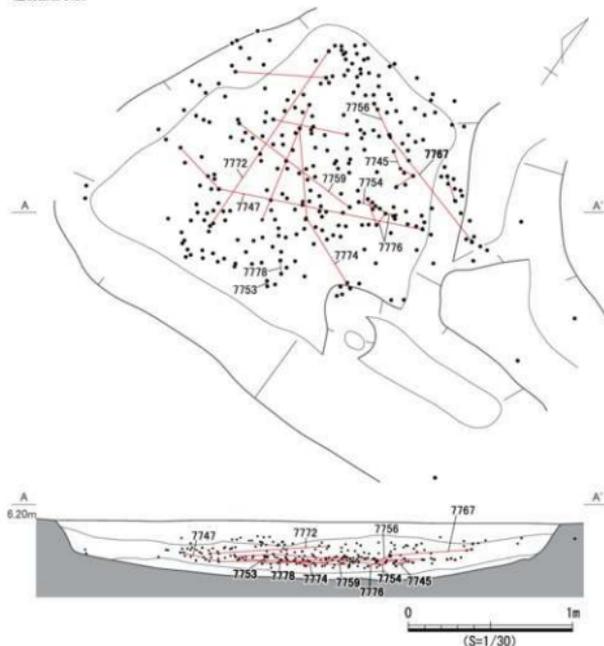


図 2152 SD1219 遺構図 (3)

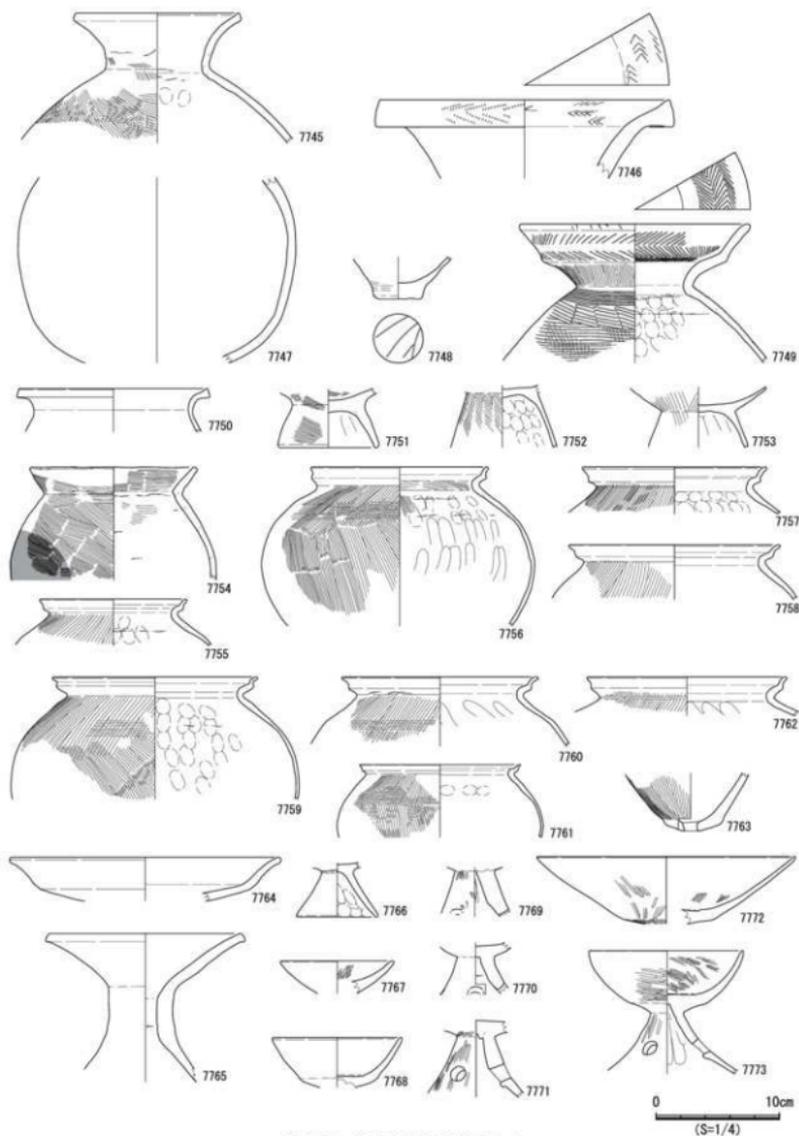


図 2153 SD1219 遺物実測図 (1)

坦面を持つものの、内面の段、外面の稜ともにやや不明瞭である。口縁端部は尖り気味で、坏部形状は碗状を呈する。脚部は付根から大きく外反し、透孔を3方向に配置する。7774はⅧ期高坏。坏部が浅い碗状を呈し、端部は尖り気味である。坏底部には平坦面が認められるものの矮小で、段はわずかに認められる。外面の稜は形骸化し、粘土を貼付した際の段差が認められるのみである。7775はⅦ期器台C類。透孔を3方向に配置する。7776はⅦ期器台C2類。口縁部が直線的に開き、端部には平坦面を形成する。脚部が付根から円錐状に開き、透孔は上下2段で3方向に配置する。7777、7778はⅦ期～Ⅷ期器台。脚部が付根から円錐状に開き、わずかに外反する。透孔は上下2段で3方向に配置する。7779はⅥ期～Ⅶ期手捏ね土器D類。胴部は球形を呈し、口縁部が短く外反する。矮小な底部を形成し、壺を模した小型品である。7780は砥石。凝灰岩製で、砥面は8面確認でき、砥面以外の表面には複数の敲打痕が認められる。

時期 Ⅶ期のSD1217を切ること、Ⅷ期に埋没したSB555に切られること、出土遺物の時期などから、Ⅶ期末～Ⅷ期初め頃と考えられる。

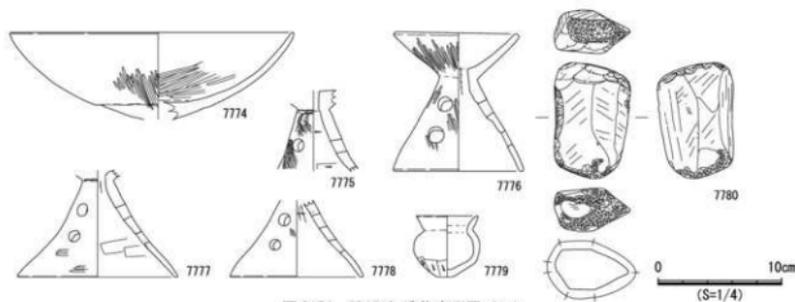


図 2154 SD1219 遺物実測図(2)

SD1222 (遺構: 図 2155、遺物: 図 2156)

検出状況 東部西側南寄りに位置し、南北側は調査区域外にのびる。周辺はⅣ層がほとんど遺存せずⅠb層除去後にⅤ層表出面で検出したが、平面形は不明瞭であった。なお、SD1223を切る。

形状 規模は不明であるが、南北に主軸をもつ溝と考えられる。深さは約0.3mであり、底面の東側が最も深くなる。底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は緩やかである。

埋土 6層に分層した。埋土全体にブロック土が混入していることから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器644点、石器類2点が出土した。土器の多くは細片が多い。

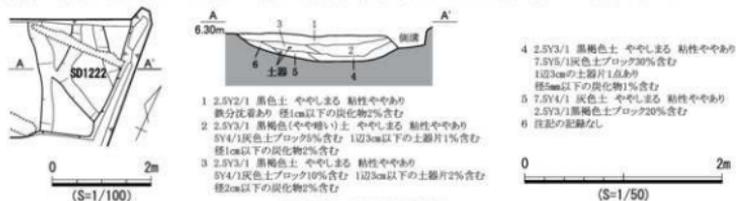


図 2155 SD1222 遺構図

出土遺物 7781は砥石。垂円礫の表面を砥面として利用しており、部分的に敲打痕が残る。

時期 出土遺物から時期を言及するのは困難であるが、VI期～VII期のSD1223を切ることから、それ以降と考えられる。

SD1223 (遺構：図2157、遺物：図2158)

検出状況 東部西側南寄りに位置し、南北側は調査区域外にのびる。南側はSD1222底面で検出し、平面形は北側が不明瞭で、南側は明瞭であった。

形状 幅約0.6mで、北西から南東方向にのびる。深さは約0.2mで、底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土 3層に分層した。ほぼ水平堆積であるが、ブロック土の混入が目立つ。

遺物出土状況 埋土中から土器312点、石器類2点が出土した。出土遺物はVI期～VII期のものが多く、砥石や粘土塊も出土した。

出土遺物 7782はVI期甕D1b類。口縁部下段が大きく外方に引き出され、短く明瞭に屈曲する。端部には平坦面が形成される。7783はVII期甕D2b類。口縁部の屈曲は弱く、大きく開く。7784はVI期～VII期高坏C3c類。口縁部が端部付近でわずかに内湾し、内面には多条沈線が認められる。7785はVII期高坏D2類。口縁部が直線的に外傾し、端部に平坦面を形成する。端部には沈線が認められる。7786はVII期高坏D類。坏底部には平坦面をもち、口縁部が浅く開く。脚部が円錐状に大きく開き、透孔を3方向に配置す

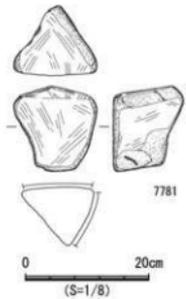


図2156 SD1222 遺物実測図

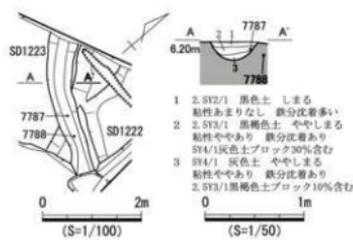


図2157 SD1223 遺構図

1. 2.5V2/1 黒色土 しまる 粘性あまりなし 鉄分沈着多い
 2. 2.5V3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 鉄分沈着あり
 3. 5V4/1 灰褐色土 ややしまる 粘性ややあり 鉄分沈着あり
- 5V4/1 灰褐色土ブロック30%含む
2.5V3/1 黒褐色土ブロック10%含む

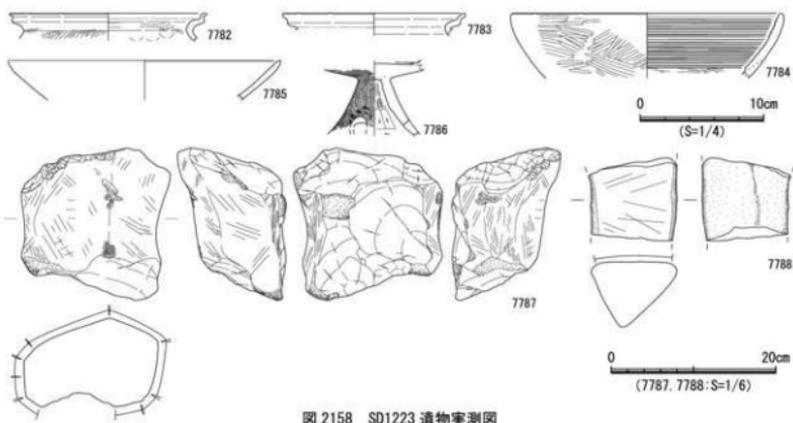


図2158 SD1223 遺物実測図

る。7787、7788は砥石。7787の上下は剥離による整形で、側面は砥面として利用されている。やや軟質の砂岩で、断面三角形を呈する溝状の窪みも確認できる。7788は断面三角形の垂円礫の一面を砥面として利用し、上下面は割れている。

時期 出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。

SD1238 (遺構：図2159、遺物：図2160)

検出状況 東部西側南寄りに位置する。SD1240などの遺構と重複し、平面形は不明瞭であった。溝底面にて、SK06608やSD1240などを検出した。ほぼ南北に軸をもつ溝である。

形状 幅約0.7m～0.9mの南北両方向にのびる溝である。深さは0.1m未満であり、底面は平坦で、壁面の傾斜は急である。

埋土 2層に分層した。大半の埋土が1層であり、鉄分沈着が顕著である。

遺物出土状況 埋土中から土器140点が出土した。埋土全域から散在して出土し、その多くはVI期～VII期に属する。

出土遺物 7789はVI期～VII期鉢F類。口縁部がわずかに内湾し、端部をナデによって丸くおさめる。外面には粗いハケ調整痕が残る。

時期 出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。

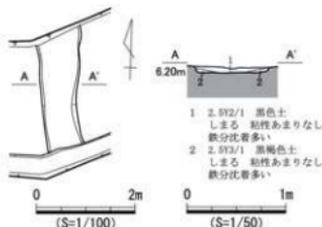


図2159 SD1238 遺構図

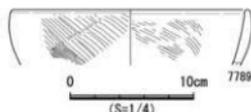


図2160 SD1238 遺物実測図

SD1245 (遺構：図2161、遺物：図2162)

検出状況 東部中央の遺構密集域に位置し、SK06623とSZ083を切る。

形状 北東から南西方向にのびる溝で、幅約0.6m、深さ約0.2mである。底面は平坦で、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土 2層に分層した。上層に炭、下層にブロック土が混入する。

遺物出土状況 埋土中から土器182点が出土した。出土遺物の多くはV期～VII期に属する。

出土遺物 7790はV期～VI期壺A類。胴部上半に直線文を施し、その間に刺突を加える。

時期 VI期～VII期のSK06623に切られることと出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。

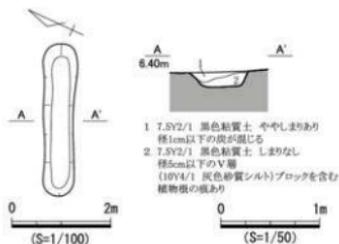


図2161 SD1245 遺構図

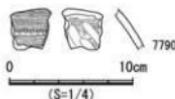


図2162 SD1245 遺物実測図

SD1246 (遺構：図2163、遺物：図2164)

検出状況 東部中央の遺構密集域に位置し、SD1252に切られ、SD1248～SD1250、SD1253を切る。西端は遺構の重複が著しく、平面形は不明瞭であった。

形状 東西方向にのびる溝で、幅約0.2m、深さ約0.2mである。東側は調査区域外へのび、西側はSD0381壁面にて収束している。底面はほぼ平坦であり、壁面の傾斜は急である。

埋土 4層に分層した。中央が窪む堆積であり、いずれの層も黒色土中に灰色シルトが混入する。また、炭化物の混入が目立つ。

遺物出土状況 埋土中から土器56点が出土した。いずれもV期～VI期の土器片である。

出土遺物 7791はV期壺A類。口縁部が大きく外反し、内面には扇形文、外面にはハゲが認められる。端部付近は器面の剥落が著しく、全容は不明である。7792はV期～VI期壺A類。頸部がやや直立して口縁部が大きく外反する。7793はV期甕A2a類。口縁部がナデとともに強く屈曲し、明瞭な受口状を呈する。内面にはナデによって顕著な凹面を形成し、外面に刺突を加え、端部には内傾する平坦面を形成する。7794はV期～VI期甕A2b類。口縁部が強く屈曲して端部がほぼ直立し、平坦面を形成する。下端には刺突を加え、頸部直下の胴部には直線文、刺突文が認められる。7795はVI期～VII期鉢B3類。口縁部が内湾して直立し、端部には顕著な平坦面を形成する。

時期 V期～VI期のSD1253を切り、同時期のSD1248に切られること、出土遺物の時期から、V期～VI期と考えられる。

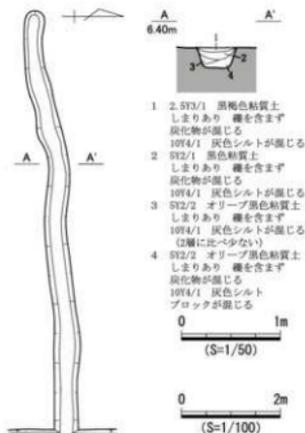


図2163 SD1246 遺構図

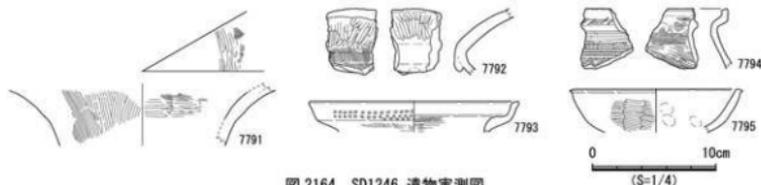


図2164 SD1246 遺物実測図

SD1248 (遺構：図2166、遺物：図2165)

検出状況 東部中央の遺構密集域に位置し、SD1253を切り、SD1246、SD1249、SD1252に切られる。南端は調査区域内で収束する。

形状 南北方向にのびる溝で、幅約0.4mであるが南側はやや広くなる。深さは北側が約0.1m、南側が0.1m未満と北側が深く、底面は西側に傾斜し、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土 単層であり、ブロック土や炭化物を含む。

遺物出土状況 埋土中から土器27点が出土した。いずれもV期～VI期の土器片である。

出土遺物 7796はV期～VI期変B2類。口縁部が短く屈折し、端部に平坦面を形成し、強いナデ調整の痕跡として沈線状の窪みが認められる。7797はVI期～VII期変B4類。口縁部が長く外反し、端部を丸くおさめる。

時期 V期～VI期のSD1253を切り、同時期のSD1246に切られること、出土遺物の時期から、V期～VI期と考えられる。

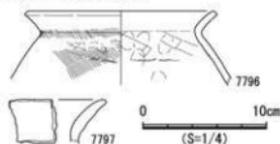


図 2165 SD1248 遺物実測図

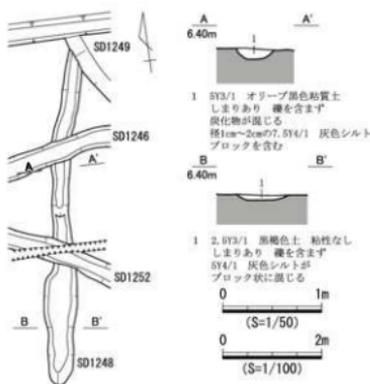


図 2166 SD1248 遺構図

SD1249 (遺構：図 2167)

検出状況 東部中央の遺構密集域に位置し、SD1248を切り、SD1246、SD1250に切られる。SD1250との埋土の識別は比較的容易であった。

形状 北西から南東方向にのびる溝で、幅約1.9m～2.5m、深さ約0.3mである。底面はわずかに凹凸があり、壁面の傾斜は緩やかである。

埋土 6層に分層した。西壁沿いは周辺からの流入が認められ、他は水平堆積であることから、自然堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器4点が出土したが、いずれも細片であり図示していない。

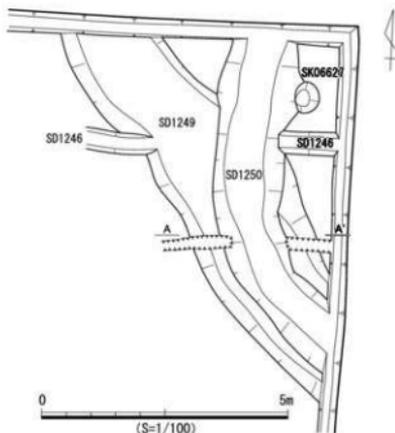
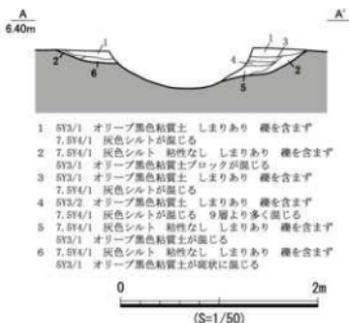


図 2167 SD1249 遺構図



- 1 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土 しまりあり 礫を含まず
7.5Y4/1 灰色シルトが混じる
- 2 7.5Y4/1 灰色シルト 粘性なし しまりあり 礫を含まず
- 3 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土ブロックが混じる
7.5Y4/1 灰色シルトが混じる
- 4 5Y3/2 オリーブ黒色粘質土 しまりあり 礫を含まず
7.5Y4/1 灰色シルトが混じる 9層より多く混じる
- 5 7.5Y4/1 灰色シルト 粘性なし しまりあり 礫を含まず
5Y3/1 オリーブ黒色粘質土が混じる
- 6 7.5Y4/1 灰色シルト 粘性なし しまりあり 礫を含まず
5Y3/1 オリーブ黒色粘質土が塊状に混じる

時期 出土遺物から判断できないが、V期～VI期のSD1246とSD1250に切られているため、それ以前と考えられる。

SD1250 (遺構：図2168・2169、遺物：図2170)

検出状況 東部東側南寄りに位置する。北西から南東方向にのびる溝であり、北端は06_15・16地点の北壁から北側に、南端は09_18地点の南壁から南側にのびる。06_15・16地点でSD1246に切られ、

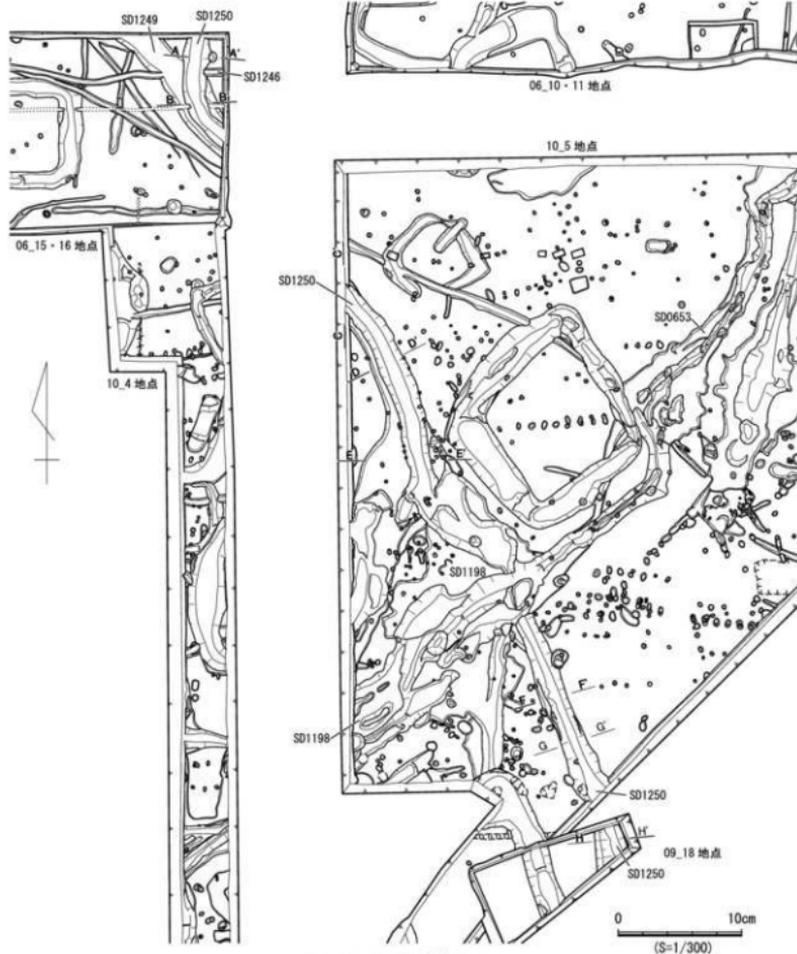


図 2168 SD1250 遺構図 (1)

SD1249を切る。また、10_5地点でSD1198に切られるが、溝の幅や埋土、断面形態などからSD1198以北と以南では同一溝と認識した。なお、平面形は明瞭であった。

形状 長さ55m以上、幅約2.0mの溝であり、06_15・16地点では北からのびる溝が南東方向に屈曲し、10_5地点ではSD1198付近までは緩やかに蛇行するが、それ以南では直線的にのびる。なお、10_5地点におけるSD1198以北では溝の西壁面に平坦面があり、それが調査区中央付近では西側に大きく張り出す。調査中にはいずれもSD1250の一部と把握したが、06_15・16地点の様相をみると、この平坦面はSD1249の連続部分の可能性もある。深さは北端で約0.1mであるが他は約0.3mであり、底面の標高は北端で約5.7m、南端で約5.4mであり、約0.3mの差がある。溝の底面はおよそ丸みを帯びており、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土 北端で3層、その他ではおよそ7～10層に分層した。北端以外では壁面沿いの細かい分層が可能であり、ブロック土の混入が認められることから壁面崩落土の可能性がある。また、底面には細



図 2169 SD1250 横断図 (2)

砂や粗砂が堆積しており、掘削当初は通水機能を有していたと考えられる。その上部には黒色土やオリブ黒色土が堆積し、細砂が筋状に堆積していることから緩やかな流れがあったと考えられるが、最終的には止水もしくは滞水状態の細長い窪地になったと考えられる。

遺物出土状況 10_5地点南側で土器27点、北側で土器536点、石器類1点、06_15・16地点で土器32点が出土し、09_18地点では出土しなかった。土器は埋土中から散在して出土し、その多くはV期に属し、わずかにVI期～VII期の土器が含まれる。

出土遺物 7798はV期鉢A2類。胴部最大径がやや突出気味である。7799はV期高坏B2a類。浅い皿状の坏底部から口縁部が強く屈曲し、外反する。坏底部からの立ち上がりは、明瞭な稜をもって直立気味である。脚部は円柱状に長く直立し、裾部は大きく開く。透孔は4方向に配置する。7800はVI期～VII期壺H1a類。口縁部が外傾し、長く立ち上がる。7801はV期器台A1b類。脚部は付根から外反し、脚部径が大きい。7802は打製石鏃。有茎鏃であり、側辺は直線的に成形されている。

時期 出土遺物の時期とV期～VII期のSD1198に切られることから、掘削時期はV期以前と考えられる。

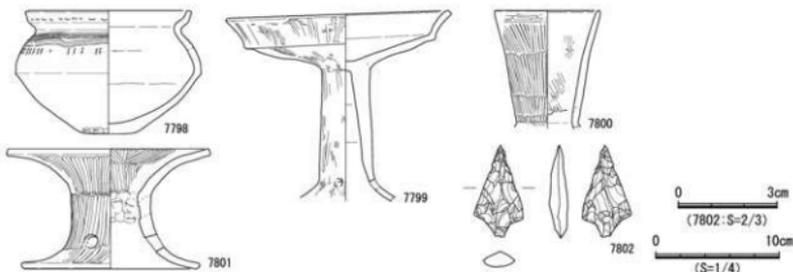


図 2170 SD1250 遺物実測図

SD1252 (遺構：図 2171、遺物：図 2172)

検出状況 東部中央から東側南寄りに位置する。北西から南東方向にのびる溝であり、北端は06_15・16地点の北壁から北西側にのび、06_14地点のSD495(『荒尾南遺跡B地区I』にて報告済み)に連結する可能性がある。南端は10_5地点内で収束している。06_15・16地点にてSD1248とSD1253を切るが、平面形は明瞭であった。

形状 長さ40m以上、幅約0.4m～0.7mの溝であり、ほぼ直線的にのびている。深さは約0.2mであり、底面は西側が平坦、東側がやや丸みを帯びており、壁面の傾斜は比較的急である。

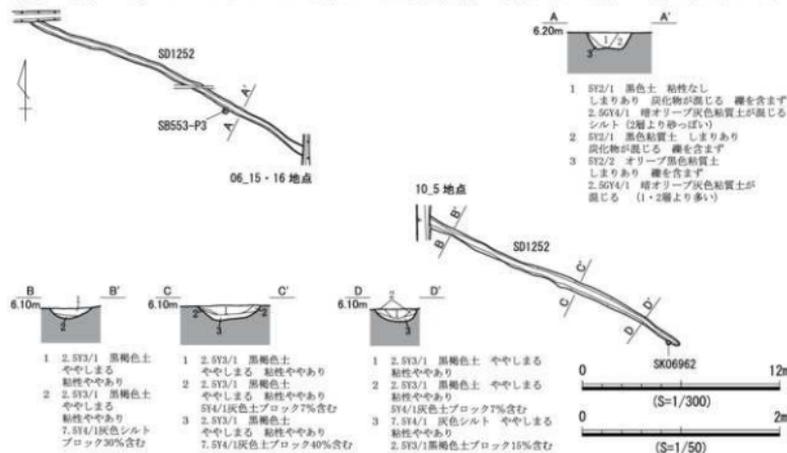
埋土 2層～3層に分層した。壁面から底面にかけてブロック土の混入が目立ち、上層は自然堆積と考えられる黒色土～黒褐色土が認められる。

遺物出土状況 06_15・16地点の埋土中から土器420点、10_5地点の埋土中から土器118点が、いずれも散在して出土した。土器はVI期～VII期のものが多く、表面の摩滅が進行している。

出土遺物 7803、7804はVI期～VII期甕A4類。7803は口縁部の屈曲が弱く、端部が短く屈曲する。外傾する平坦面には刺突を加え、胴部には直線文が認められる。7804は口縁部の屈曲が弱く、端部がわずかに内湾する。端部には平坦面を形成して刺突を加える。頸部以下には直線文、刺突文を施文する。

7805はⅥ期～Ⅶ期高坏Ⅱ類。口縁部が大きく内湾し、端部がわずかに外反する。

時期 Ⅴ期～Ⅵ期のSD1248とSD1253を切ることで出土遺物の時期から、Ⅵ期～Ⅶ期と考えられる。



SD1253 (遺構：図2173、遺物：図2174)

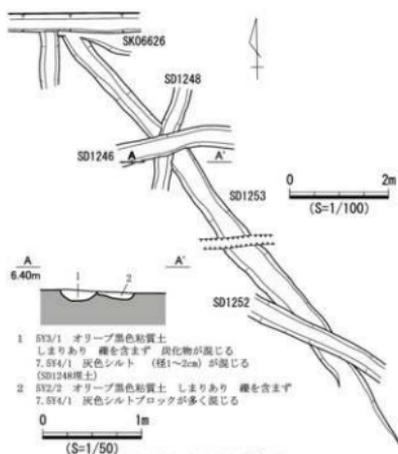
検出状況 東部中央の遺構密集域に位置し、北側は調査区域外へのび、南側は調査区内で消滅している。SD1246、SD1248、SD1252に切れ、本遺構周辺の溝の新旧関係では最も古い。

形状 北西から南東に直線的にのびる溝で、幅約0.3m～0.6m、深さは0.1m未満である。底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は東側が急、西側が緩やかである。

埋土 単層であり、ブロック土を多く含む。

遺物出土状況 埋土中から土器2点が出土した。

出土遺物 7806はⅤ期～Ⅵ期鉢A類。口縁部を欠損し、屈曲部直下から直線文、刺突文を



施文する。肩部が強く張り出し、胴部下半には煤が付着する。

時期 V期～VI期のSD1246、SD1248に切られるが、出土遺物の時期からV期～VI期と考えられる。

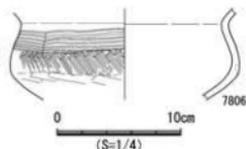


図 2174 SD1253 遺物実測図

SD1254 (遺構：図 2176、遺物：図 2175)

検出状況 東部中央の遺構密集域に位置し、北側は調査区域外にのびる。北側でSB544を切り、中央から南側は遺構の重複が著しく、平面形は不明瞭であった。

形状 南北方向にのびる溝で、幅約0.5m、深さ約0.2mである。底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は急である。

埋土 3層に分層した。埋土全体にブロック土の混入が目立ち、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器35点が出土した。出土遺物の多くはVII期に属する。

出土遺物 7807はVII期壺H2b類。口縁部が長く立ち上がって内湾し、端部直下には多条沈線を施文する。

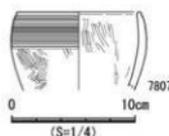


図 2175 SD1254 遺物実測図

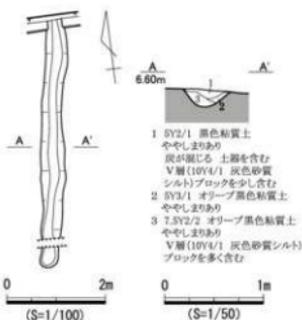


図 2176 SD1254 遺構図

SD1260 (遺構：図 2177、遺物：図 2178)

検出状況 東部中央の遺構密集域に位置する。SD1258、SD1259、SZ201などを切り、東側はSD0381の埋土中にて取束している。

形状 東西にのびる溝で、幅約0.5m～0.7m、深さ約0.1mである。底面は平坦でSD0381の壁面傾斜に沿って下降し、その埋土中で取束しているため、SD0381と同時期に存在した可能性が高い。

埋土 5層に分層した。ブロック土の混入が多く、層界の凹凸も認められるため、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器18点が出土した。そのうち、溝中央付近の底面直上にて甕の口縁部片が横位で出土した。出土土器はV期のものが多い。

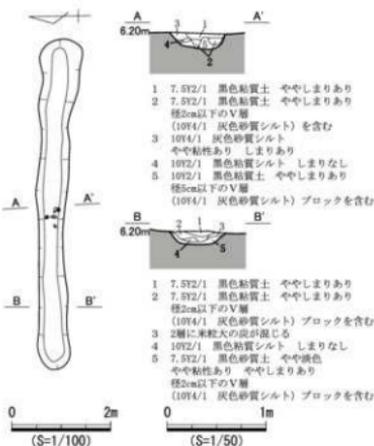


図 2177 SD1260 遺構図

出土遺物 7808はV期甕A類。外面はハケ調整、内面にはナデを施し、外面には煤と炭化物が付着する。7809はV期甕A1類。口縁部が外反し、端部がナデとともに強く屈曲して内傾するが、先端部はわずかに外反気味である。胴部外面にはハケ、内面にはケズリが認められ、胴部及び口縁部外面には強く煤が付着する。

時期 IV期のSZ201を切ることで出土遺物の時期から、V期と考えられる。

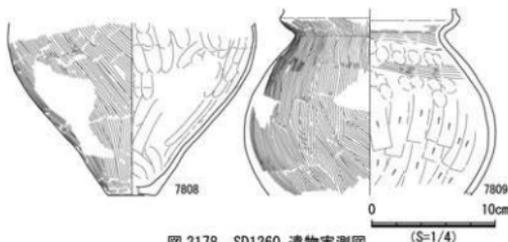


図 2178 SD1260 遺物実測図 (S=1/4)

SD1264 (遺構：図 2179、遺物：図 2180)

検出状況 東部中央の遺構密集域に位置する。SZ201を切り、東側はSD0381の埋土中にて収束している。

形状 東西にのびる溝で、幅約0.4m～0.6m、深さは0.1m未満と浅い。底面はやや丸みを帯び、SD0381の壁面傾斜に沿って下降し、その埋土中で収束しているため、SD0381と同時期に存在した可能性が高い。

埋土 1層～2層に分層した。東側はブロック土の混入が目立つ。

遺物出土状況 埋土中から土器8点が出土した。そのうち西側の底面付近で高杯脚部1点と、中央付近で甕の口縁部と高杯脚部が出土した。出土土器はV期～VII期のものが多い。

出土遺物 7810はVI期～VII期壺H1a類。口縁部が直線的にやや外傾し、長く立ち上がる。

7811はV期～VI期甕B2類。

胴部上方に直線文と刺突文、口縁部外面に刺突文を施文する。7812はV期高杯B類。脚部が付根から円錐状にわずかに開き、裾部が大きく開く。透孔は3方向に配置する。

時期 出土遺物の時期から、V期～VII期と考えられる。

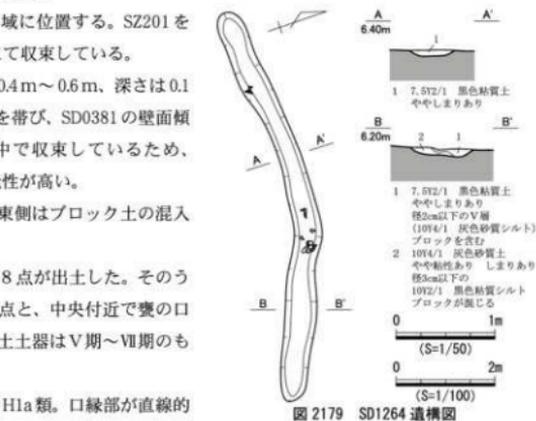


図 2179 SD1264 遺構図

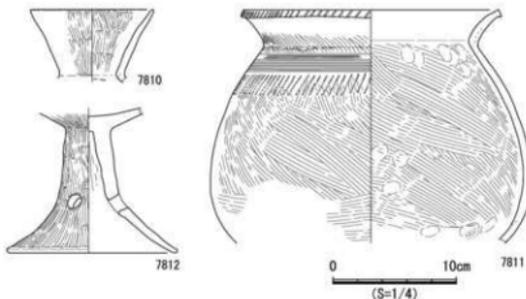


図 2180 SD1264 遺物実測図

SD1266 (遺構：図2181、遺物：図2182)

検出状況 東部中央の遺構密集域に位置する。他遺構との重複はなく、平面形は明瞭であった。

形状 東西方向にのび、SD1268を避けるように途中で屈曲している。幅約0.2m～0.3m、深さ約0.05m～0.2mであり、断面形は東側が浅い皿状を呈し、西側がやや深い逆台形を呈する。なお、東西端は収束している。

埋土 単層であり、黒色土中にオリブ灰色シルトが混在する。

遺物出土状況 埋土中から土器13点が出土した。土器はVI期のものが多い。

出土遺物 7813はVI期甕D類。脚部がハの字に開き、端部の折り返しは認められない。

時期 出土遺物の時期から、VI期と考えられる。

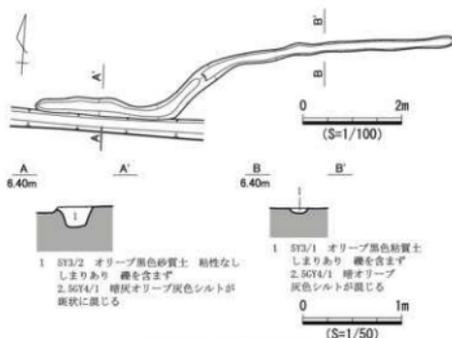


図 2181 SD1266 遺構図

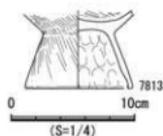


図 2182 SD1266 遺物実測図

SD1268 (遺構：図2183)

検出状況 東部中央の遺構密集域に位置する。東側は調査区域外にのび、西側はSD1266の屈曲部付近で収束している。SK06672に切られ、平面形はやや不明瞭であった。

形状 東西にのびる溝であり、幅約0.4m、深さ0.1m未満である。底面は平坦であり、壁面の傾斜は緩やかである。

埋土 単層であり、オリブ黒色土をわずかに含む。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 不明であるが、SD1266との関連性からVI期と考えられる。

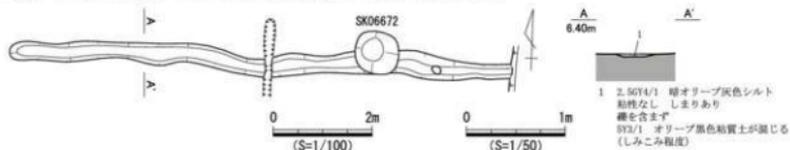


図 2183 SD1268 遺構図

SD1272 (遺構：図2185、遺物：図2184)

検出状況 東部東側南寄りに位置し、北端をSD1252に切られ、南端は調査区域内で収束している。平面形は明瞭であった。

形状 南北にのびる溝で、幅約0.3m、深さ約0.1mである。底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は緩やかである。

埋土 単層であり、粘性がある。

遺物出土状況 埋土中から土器30点が出土した。土器はⅥ期～Ⅶ期に属し、南端からⅥ期高坏(7814)が出土した。

出土遺物 7814はⅥ期高坏B類。付根から脚部は柱状に直立し、裾部は外反する。透孔が3方向に認められる。7815はⅦ期高坏C3類。口縁部が肥厚し、そこに多条沈線を施す。

時期 Ⅵ期～Ⅶ期のSD1252に切られるが、出土遺物の時期からⅥ期～Ⅶ期と考えられる。

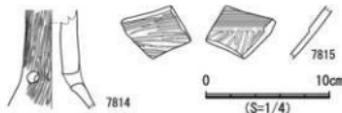


図 2184 SD1272 遺物実測図

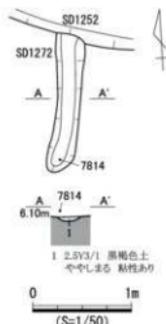


図 2185 SD1272 遺構図

SD1289 (遺構：図2186、遺物：図2187)

検出状況 東部中央北寄りに位置し、大半は調査区外にのびている。検出時の埋土は茶褐色を呈し、方形周溝墓の周溝埋土に類似していた。なお、平面形は明瞭であり、中央付近でSZ072を切る。

形状 南北方向にのびる溝であるが、規模は不明である。深さは約0.2mで、底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は急である。

埋土 3層に分層した。ほぼ水平堆積であり、埋土中に崩落土のようなブロック状の堆積は認められず、最下層は土が攪拌されているような状態であった。

遺物出土状況 埋土中から土器30点が出土した。土器の大半は埋土上層から散在して出土し、小片が多く、その時期はⅤ期～Ⅵ期に属する。

出土遺物 7816はⅤ期～Ⅵ期甕A類。頸部直下に直線文を2帯施文し、その間に刺突文を加える。文様帯以下には煤が付着する。7817はⅤ期～Ⅵ期甕B2類。口縁部が外反し、端部に平坦面を形成する。端部下端には刺突を加え、頸部以下には直線文が認められる。

時期 出土遺物の時期から、Ⅴ期～Ⅵ期と考えられる。

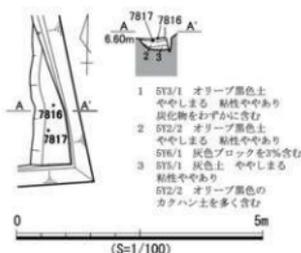


図 2186 SD1289 遺構図

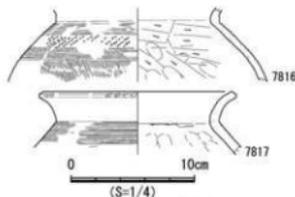


図 2187 SD1289 遺物実測図

4 土坑

東部域における土坑は、竪穴住居跡などの建物跡を検出した南西側を中心に分布する。そのうち、本節では遺跡の性格を検討する上で重要な遺構や、まとまりのある遺物や特徴的な遺物が出土した遺構などを中心に報告する。なお、大型の方形土坑は竪穴住居跡の可能性もあるが、底面で小穴や壁溝を検出できなかったため、本書では土坑として取り扱った。

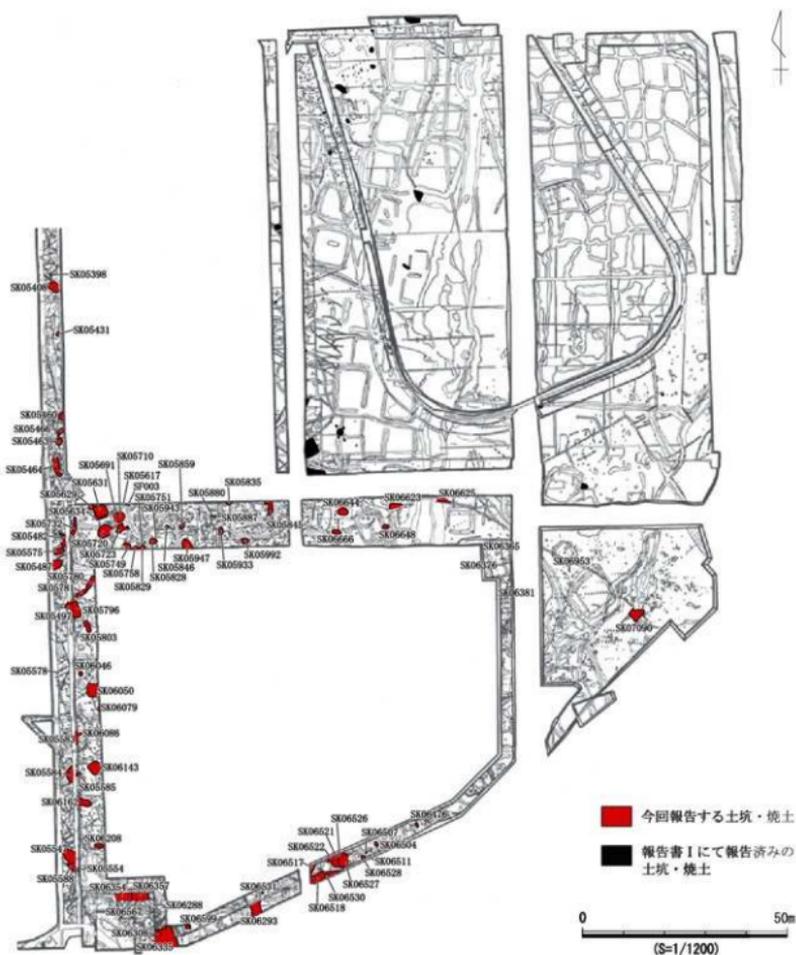


図 218 東部域の弥生時代後期から古墳時代前期の主な土坑・焼土分布図

SK05398 (遺構：図2189、遺物：図2190)

検出状況 東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB456とSB457を切る。平面形はやや不明瞭であった。

形状 長軸長約0.7mの楕円形を呈し、深さは約0.2mである。底面は平坦であり、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土 2層に分層した。中央が緩やかに窪む堆積であるが、上下層ともブロック土が混入することから人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器89点が出土した。土器は小片が多く、時期が判別できる破片はVII期のものであった。

出土遺物 7818はVII期高坏D1類。浅い皿状の坏部が直線的に開き、口縁部はやや外反し、端部を丸く収める。

時期 出土遺物の時期と、VI期～VII期のSB456、SB457を切ることから、VII期と考えられる。

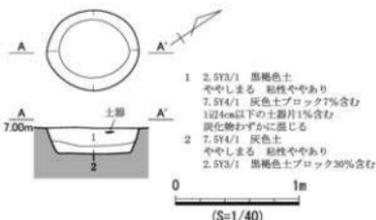


図2189 SK05398 遺構図

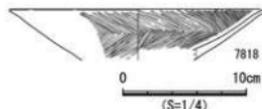


図2190 SK05398 遺物実測図

SK05408 (遺構：図2191)

検出状況 東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB459の床面で検出した。平面形は西側が不明瞭であった。

形状 長軸長約2.6mの不整形を呈し、深さは0.1m未満である。底面はほぼ平坦で、壁面の傾斜は急である。

埋土 単層である。炭化物をわずかに含むが、その成因は不明である。

遺物出土状況 埋土中から土器161点が出土したが、いずれも細片であり図示していない。

時期 VI期～VII期のSB459より先行することから、それ以前と考えられる。

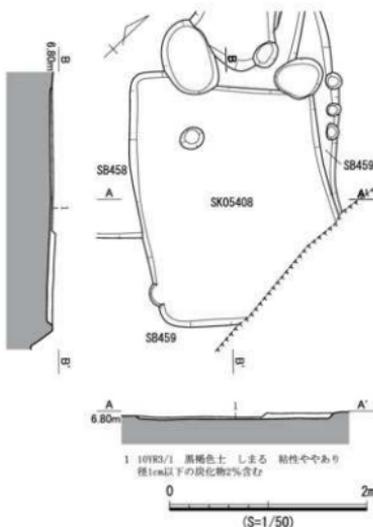


図2191 SK05408 遺構図

SK05431 (遺構：図2192、遺物：図2193)

検出状況 東部西側中央に位置し、SD1076底面で検出した。平面形は明瞭であった。

形状 長軸長約1.1mの不整楕円形を呈し、深さは0.1m未満である。底面はほぼ平坦であり、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土 単層である。ブロック土を多く含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器13点が出土したが、細片が多い。

出土遺物 7819はⅦ期壺A5類。口縁部が短く外反して立ち上がり、外面は直立する。端部にはクシによる波状文を施文する。

時期 古代以降のSD1076に先行し、出土遺物の時期からⅦ期以降と考えられる。

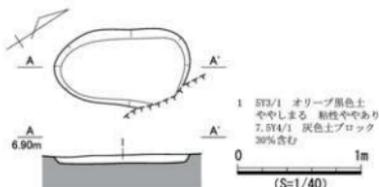


図2192 SK05431 遺構図

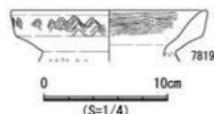


図2193 SK05431 遺物実測図

SK05460 (遺構：図2194、遺物：図2195)

検出状況 東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、北東側は調査区域外にのびる。SB462床面で検出し、平面形は明瞭であった。

形状 北東から南西に主軸をもち、残存長軸長約1.5mの楕円形状を呈し、深さは約0.3mである。底面は丸く、壁面の傾斜は緩やかである。

埋土 4層に分層した。西壁面から底面にかけてブロック土が混入する壁面崩落土が堆積し、上層はほぼ水平堆積である。

遺物出土状況 埋土中から土器215点が出土した。土坑の北端において台付甕の脚部が外面を上にして出土した。出土土器はⅤ期～Ⅶ期のものが多い。

出土遺物 7820はⅤ～Ⅶ期壺A3類。端部には細長い棒状浮文を3帯貼り付け、平坦部には縄文を施文する。口縁部内面にもわずかに縄文が認められる。7821はⅥ～Ⅶ期甕脚部。器壁が厚く、やや内湾する。7822はⅦ期高

坏C4b類。大きく開いた口縁部は端部付近で内湾する。端部を肥厚し、内面にやや乱雑な多条沈線を施す。

時期 出土遺物の時期とⅦ期のSB462より先行することから、Ⅴ期～Ⅶ期と考えられる。

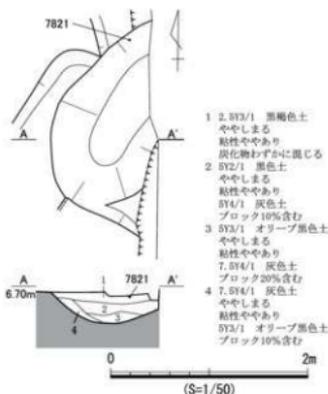


図2194 SK05460 遺構図

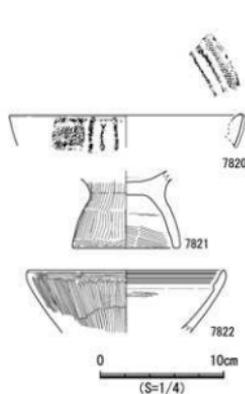


図2195 SK05460 遺物実測図

SK05463 (遺構：図2196、遺物：図2197)

検出状況 東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB465とSD1088を切る。平面形は明瞭であった。

形状 北東から南西に主軸をもち、長軸長約2.0mの楕円形状を呈し、深さは約0.4mである。底面はやや凹凸があり、壁面の傾斜は西側から南側にかけて垂直に近く、東側から北側にかけては急である。

埋土 4層に分層した。ほぼ水平堆積であり、1～3層は炭化物の混入が、3～4層はブロック土の混入が目立つ。土器は各層から出土しているものの、2層中からの出土が最も多く、土器とともに垂円礫も出土している。土器は横位や縦位で出土しており、ブロック土の混入も目立つことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器1,345点が出土した。出土土器はⅦ期のものが多く、Ⅷ期のものも含まれる。2層から出土した高坏の割れ面には煤が付着していることから、土器は二次的に被熱してから廃棄されたと考えられる。

出土遺物 7823はⅦ期甕B3類。口縁部が短く外反する。端部はナデによって平坦面が形成され、押圧によって粘土が外方にはみ出す。胴部中程に最大径を有し、最大径付近の内面には輪積痕が観察できる。胴部から口縁部にかけての器面全体に煤が付着する。7824

はⅦ期甕。脚部がわずかに内湾する。7825はⅦ期高坏D5類。端部の平坦面及び内面に多条沈線を施す。内面の多条沈線間にヘラによる連弧文を施すが、小振りな雑である。7826はⅦ期高坏C4類。脚部が付根から円錐状に開き、端部がわずかに内湾する。透孔は単孔で4方向に配置される。丁寧にミガキが施され、脚部内外面に煤が付着する。7827はⅧ期高坏。坏底部の平坦

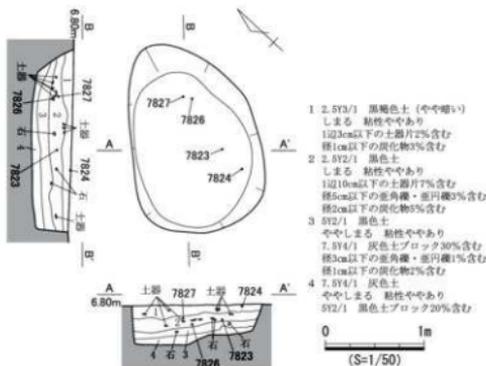


図2196 SK05463 遺構図

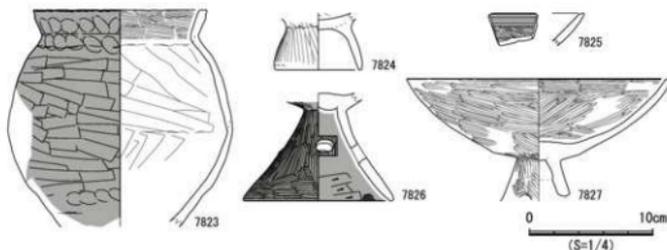


図2197 SK05463 遺物実測図

面はわずかに残る程度で、坏底部の段は認められない。端部にはわずかに平坦面を形成し、沈線を施文する。脚部は円錐状に開き、単孔の透孔が3方向に配置される。内外面ともに丁寧なミガキが認められる。

時期 出土遺物の時期と、VI期～VII期のSB465とSD1088を切ることから、VII期～VIII期と考えられる。

SK05464 (遺構：図2199、遺物：図2198)

検出状況 東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB465、SB467、SB468、SD1090などの複数の遺構に切られ、SB466を切る。遺構の重複が著しく、平面形は不明瞭であった。

形状 周辺を複数の遺構に切られているため不明である。深さは約0.1mであり、残存している壁面の傾斜は急である。

埋土 2層に分層した。いずれもブロック土が混入することから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器980点が出土した。出土遺物の多くはVII期のものである。

出土遺物 7828はVII期高坏G3b類。坏部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は内湾する。口縁端部は丸く仕上げられ、その外面直下には多条沈線を施文する。坏底部は小さく、段が認められる。

時期 出土遺物の時期と、VII期のSB466を切りVII期～VIII期のSK05463に切られることから、VII期と考えられる。



図2198 SK05464 遺物実測図

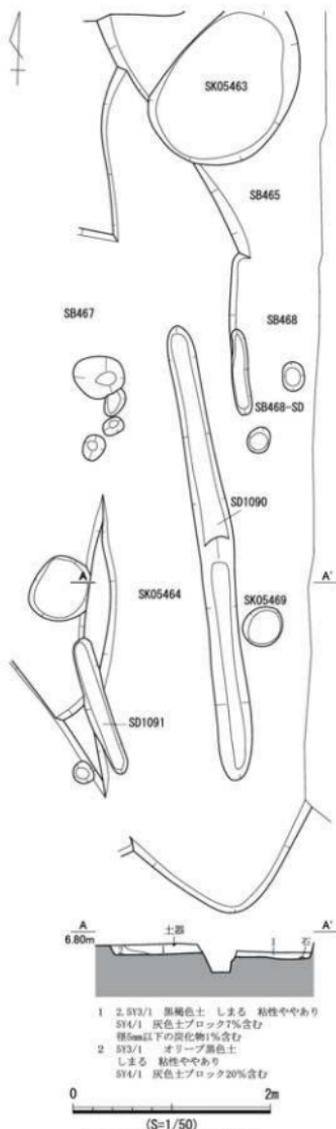


図2199 SK05464 遺構図

SK05466 (遺構：図2200、遺物：図2201)

検出状況 東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB462とSB464床面で検出し、平面形は明瞭であった。

形状 北東から南西に主軸をもち、長軸長約1.8mの不整楕円形を呈し、深さは約0.3mである。底面は平坦で東側が一段深く、壁面の傾斜は急である。

埋土 3層に分層した。2層中から土器が多く出土し、1層と2層の層界の凹凸が顕著であることから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器1,478点、石器類56点が出土した。出土土器片の大きさは、埋土1層のものが小さく、2層のものが大きい傾向にある。底面付近の土器は横位のものが多く、土坑の中央付近に楕円形状に広がっており、土器とともに垂円礫が出土した。出土土器はVI期のものが多く、壺や甕類に比べて高坏の割合が高い。

出土遺物 7829はV期壺A5類。口縁端部の上下への拡張は認められない。内面には縄文を施す。7830はV～VII期壺K類。胴部に結節縄文を施す。7831はVI期壺B1類。口縁部が短く外反し、端部には外傾する顕著な平坦面をもつ。7832はVI期壺B3類。口縁部が短く立ち上がり、端部は強く外反する。7833は鉢底部で、胎土からV～VII期のものと考えられる。小さく平坦な底部から胴部は大きく外方に開いて立ち上がる。外面にはケズリ調整が認められる。底面には径5mmほどの穿孔が多数形成されている。焼成前に内面から開けられたと考えられるが、中には貫通していない孔もある。現状で17箇所認められる孔のうち13箇所は貫通、4箇所は内面から外面に達する前に孔が止まっている。7834はVI期甕A4類。口縁部がゆるやかに外反し、端部は平坦である。内面はわずかに内湾する。7835はVI期甕B1類。口縁部が短く外反し、端部を丸くおさめる。7836はVI期～VII期甕。脚台部がやや内湾しながら開く。7837、7838はVI期鉢B2類で、同一個体の可能性がある。底部には穿孔が認め

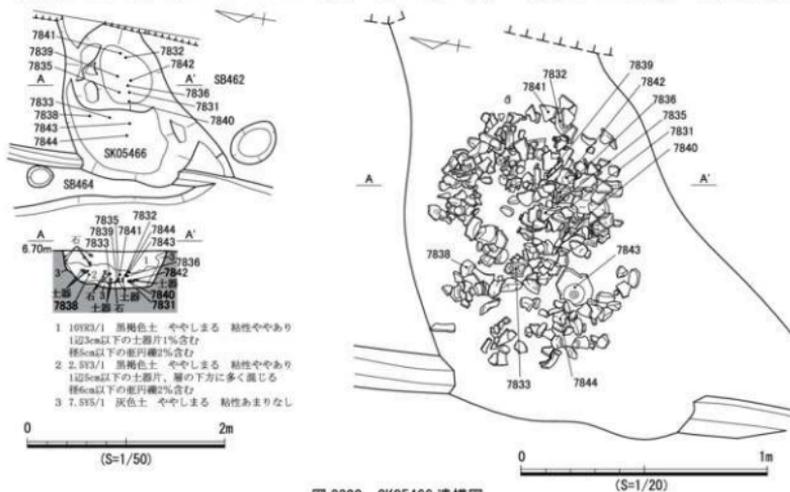


図2200 SK05466 遺構図

られ、口縁部は大きく開いて直線的に立ち上がる。端部には平坦面が形成され、指頭圧痕によって粘土が外方にはみ出す。7839～7841はいずれもⅥ期高坏C3b類。7839、7841は口縁部が坏底部から大きく開く。端部に明瞭な内傾面を形成し、多条沈線を施文する。7840は端部を肥厚し、内面に多条沈線を施文する。7842はⅥ期高坏C類。付根から脚部が短く直立するが、透孔付近を境に極端に開く。透孔は3方向に配置され、端部はわずかに内湾する。一部に煤が付着する。7843はⅥ期高坏C3類。小さい坏底部から口縁部が大きく開く。7844はⅦ期高坏C類。付根から脚部が円錐状に開き、透孔から下方でさらに開く。

時期 出土遺物の時期と、Ⅶ期のSB462、SB464より先行することから、Ⅴ期～Ⅵ期と考えられる。

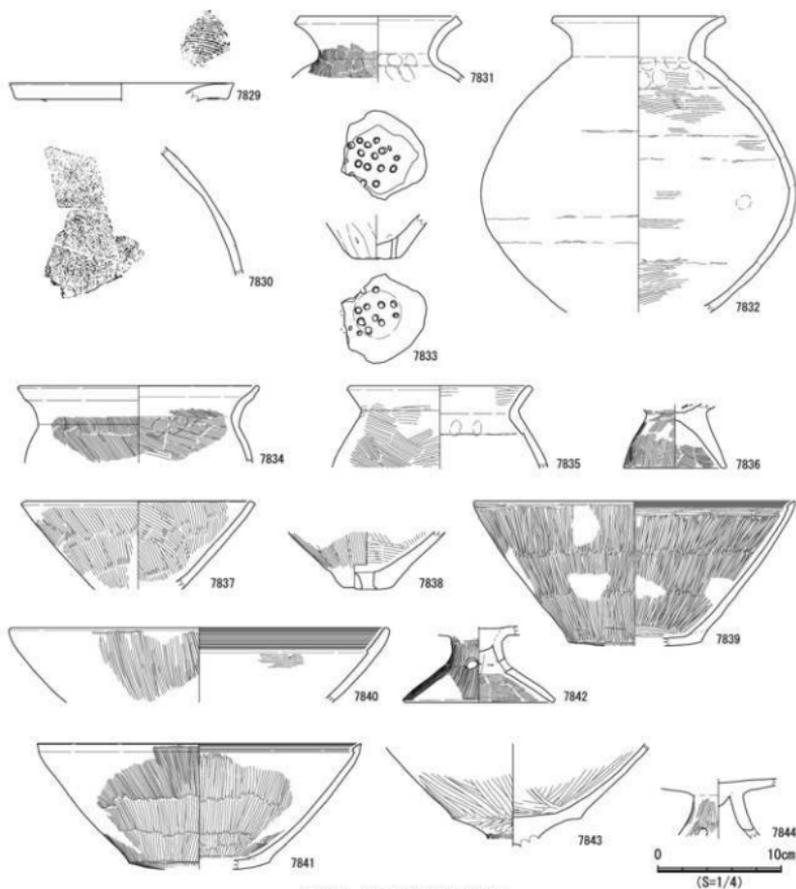


図 2201 SK05466 遺物実測図

SK05482 (遺構：図 2202、遺物：図 2203)

検出状況 東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。西側をSB479に、北側をSD1092に切られ、東側は攪乱により失われている。平面形は北側は明瞭であったが、南側はやや不明瞭であった。

形状 長軸長約3.2m、短軸長約2.1mの不整形を呈する。深さは約0.1mで、底面は平坦であり、壁面の傾斜はやや急である。

埋土 2層に分層した。上下層の層界に凹凸があり、ブロック土が混入することから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器299点が出土した。出土土器はⅥ期～Ⅶ期が多く、図示したⅤ期の壺は混入の可能性はある。

出土遺物 7845はⅤ期壺A類。頸部は直立気味に立ち上がり、口縁部が外反する。胴部には、頸部直下から文様が認められる。直線文を3帯配し、その間に振り幅の小さい波状文を2帯配する。7846は胎土・調整からⅦ期壺胴部と考えられ、2条1組の線刻が認められる。7847はⅥ期～Ⅶ期甕A2b類。頸部が直立気味で、口縁部がヨコナデによって屈曲する。

時期 Ⅶ期～Ⅸ期のSB479、Ⅵ期～Ⅶ期のSD1092に切られるが、出土遺物の時期からⅥ期～Ⅶ期と考えられる。

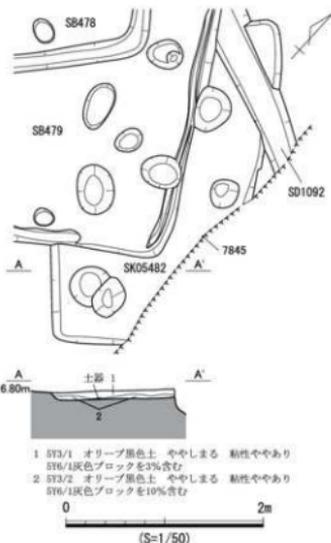


図 2202 SK05482 遺構図

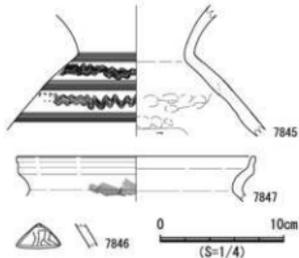


図 2203 SK05482 遺物実測図

SK05487 (遺構：図 2204、遺物：図 2205)

検出状況 東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、東側でSB483を切る。平面形は比較的明瞭であり、検出面で細かい土器片が多数出土していた。

形状 短軸長約2.0mの不整形円形を呈する。深さは約0.4mで、底面はほぼ平坦であり、壁面の傾斜は緩やかである。

埋土 3層に分層でき、ほぼ水平堆積である。ブロック土が混入し、上層から下層まで土器が散在して出土したことから人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器2,991点が出土した。土器は散在して出土し、埋土上層出土の破片は細かいが、下層出土の破片は大きなものが目立った。底面では残りの良いS字甕が横位で出土し、口縁部付近には大きな礫があった。土器はⅦ期～Ⅷ期のものが多く、Ⅴ期～Ⅵ期のものもわずかに出土した。

出土遺物 7848はⅦ期～Ⅷ期壺A5類。口縁部が短く外反して立ち上がり、端部を下方に拡張する。端部には大振りの羽状文が認められる。7849はⅦ期～Ⅷ期壺。柳ヶ坪型壺口縁部で、内外面ともに羽状文が認められ、頸部と胴部の境に1条の突帯を貼り付けている。7850はⅥ期～Ⅶ期甕。脚部がやや内湾し、器壁は厚い。7851はⅦ期甕B2類。頸部がやや直立気味で、口縁端部が強く外反する。端部には平坦面が認められる。7852～7857はⅧ期甕。7852は脚部を欠損する以外はほぼ完存する。口縁部を大きく外方に拡張する。口縁部内面の平坦面はわずかに残るのみで、端部が肥厚気味となる。胴部の器壁は非常に薄く、肩が強く張り出す形状である。最大径は上方3分の1程に位置し、それ以下には煤が付着する。7852以外

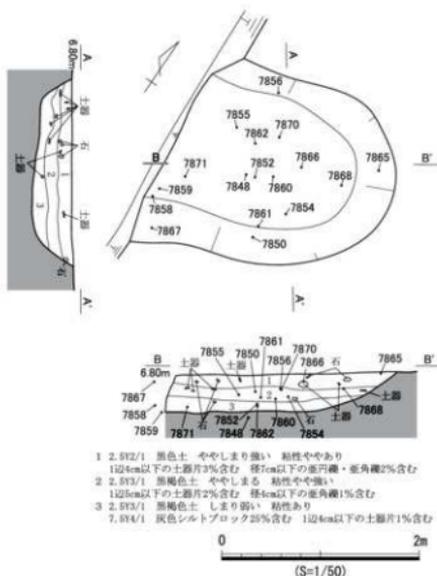


図 2204 SK05487 遺構図

口縁部が大きく外方に引き出され、端部が肥厚気味となる。外面に煤が付着するものが多い。7858、7859はⅧ期～Ⅸ期甕。7859は脚部がハの字状に開く。7858も脚部が直線的に開き、折り返しが認められる裾部には平坦面を形成する。胴部の器壁は非常に薄く、煤が付着する。7860はⅦ期～Ⅷ期器台C3類。受部が浅い皿状となり、端部は外反する。7861はⅤ期高坏。脚柱部は中空で円柱状に直立し、脚裾部との境で屈曲する。7862はⅦ期高坏D4類。口縁部が浅く開き、端部には内傾面をもつ。端部及び口縁部内面には多条沈線を施文する。多条沈線間には山形文を3帯加える。7863はⅦ期高坏H1類。口縁部が碗状に内湾して立ち上がり、内外面ともに丁寧なミガキ調整が認められる。端部を丸くおさめる。7864はⅦ期高坏C4d類。多条沈線の間にクシによる羽状文と山形文を加える。7865はⅧ期高坏。坏底部が小さく、内面の段、外面の稜がともに不明瞭となる。7866はⅦ期高坏。器壁の厚い脚部が円錐状に開き、2孔1対の透孔を2方向に配置する。7867はⅧ期～Ⅸ期高坏。口縁部が浅く内湾し、内外面ともに丁寧にミガキ調整を施す。7868はⅦ期器台C類。脚部は円錐状に開き、透孔以下はやや内湾する。7869はⅧ期器台。脚部が外反して開き、透孔は付根直下で3方向に配置する。7870は刃器。円礫の一侧縁に粗い剥離を施し、刃部を形成している。7871は砥石。やや凹凸のある亜円礫の平坦面を砥面として利用し、裏面には砥面再生のためと考えられる剥離や敲打痕が認められる。

時期 Ⅶ期～Ⅷ期のSB483を切るが、出土遺物の時期からⅦ期～Ⅷ期と考えられる。

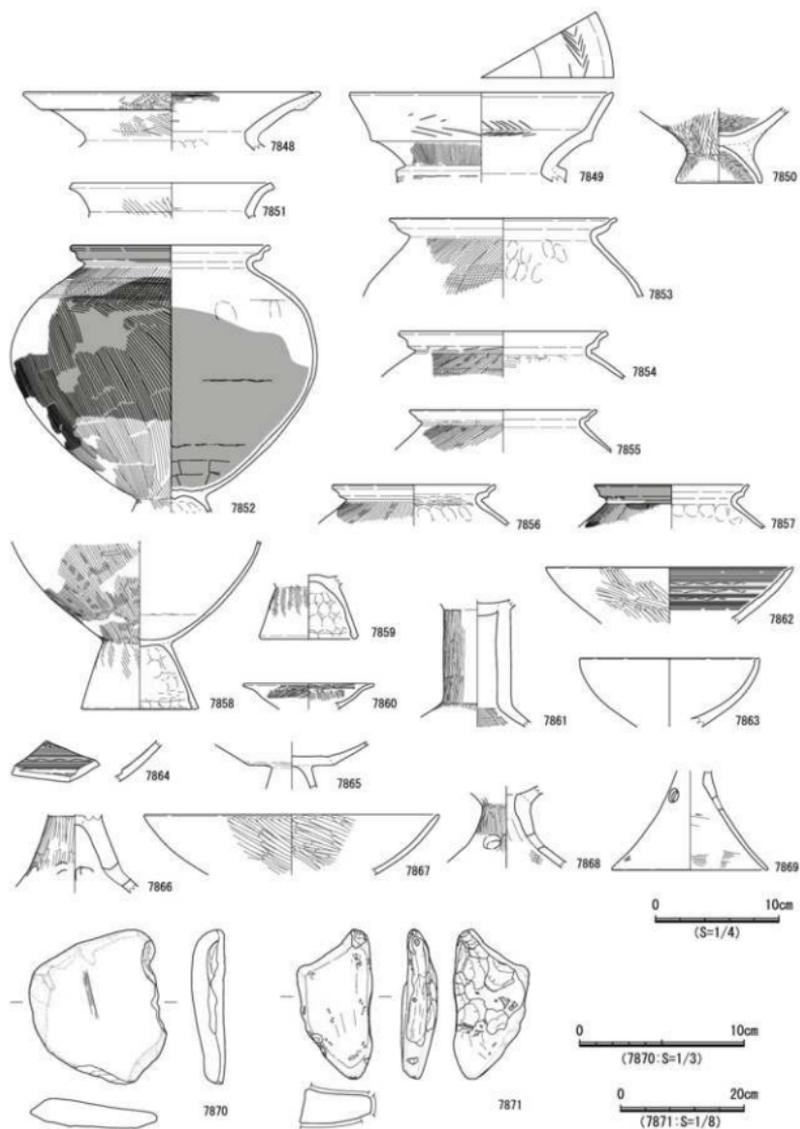


図 2205 SK05487 遺物実測図

SK05547 (遺構：図 2207、遺物：図 2206)

検出状況 東部西側南寄りに位置する。SB512床面に検出し、北側をSB509に、中央をSK05587に、南側をSK05588に切られている。検出埋土は黒色土であるが、本遺構周辺は竪穴住居跡や方形周溝墓の重複が著しく、平面形は不明瞭であった。

形状 西辺のみしか検出できていないため、平面形は不明である。深さは約0.2mで、底面はやや凹凸があり、残存している壁面の傾斜は緩やかである。

埋土 2層に分層し、いずれも長さ2cm以下の小礫を含む。埋土の残存範囲が狭いものの、遺構の重複が著しいことから人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器203点が出土した。出土土器はV期～VII期のものが多く、I期、IV期、のものがわずかに混入する。

出土遺物 7872はV期～VI期壺F1類。口縁部が極めて短く外反し端部を尖らせる。胴部形状は球形で、底部は平底となり、器面に文様は認められない。7873はVII期壺H2b類。口縁部が内湾して長く立ち上がり、端部は尖り気味となる。器面の磨滅が著しく、文様の全容は不明であるが、多条沈線間に二枚貝による刺突文、山形文、羽状文などを加える。

時期 VI期～VII期のSB509とVII期のSK05588切られるが、出土遺物の時期からV期～VII期と考えられる。

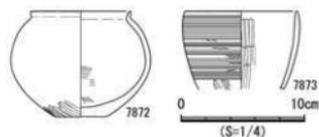


図 2206 SK05547 遺物実測図

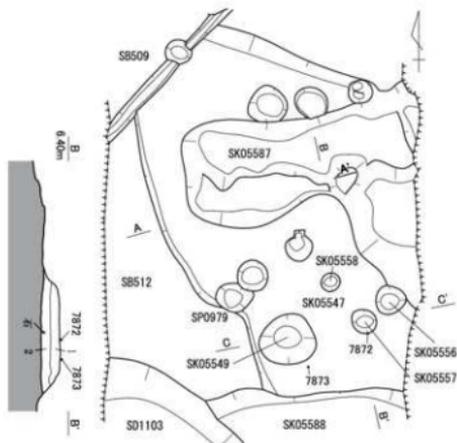
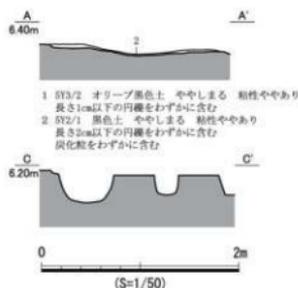


図 2207 SK05547 遺構図



SK05554 (遺構：図 2208、遺物：図 2209)

検出状況 東部西側南寄りに位置し、西側は攪乱により失われている。SZ190の周溝埋土上面で検出し、平面形は明瞭であった。

形状 部分的な検出であるため不明である。深さは約0.2mで、底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は緩

やかである。

埋土 2層に分層した。上層は炭化物を含み、下層にはブロック土が混入する。遺物の残存状態が良好で、粘土塊も出土していることから人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器113点が出土した。遺物の多くは検出面で出土し、それとともに人頭大の粘土塊も出土した。粘土塊は直方体に近い形状であり、2種類以上の粘土が混ざり合っていた。また、粘土塊の表面を洗浄したが、網目などの痕跡は確認できなかった。出土土器はV期～VII期のものが多い。

出土遺物 7874はVI期壺H3類。口縁部が外傾して直線的に立ち上がり、端部にはわずかに平坦面をもつ。胴部形状は偏平で、最大径は胴部中央からやや下がった位置にある。底部は平底で、外面には丁寧なミガキを施す。胴部下半から底部にかけて煤が付着する。7875はV期甕A類。胴部上半に直線

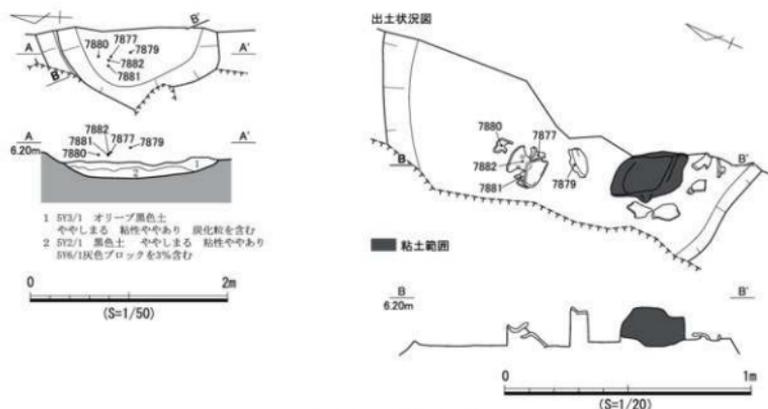


図 2208 SK05554 遺構図

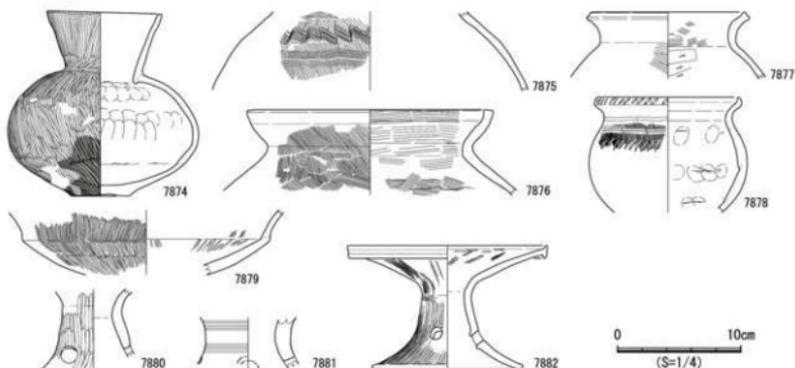


図 2209 SK05554 遺物実測図

文及び波状文が認められる。7876はⅥ期甕A3類。口縁部が外反し、ヨコナデとともに屈曲して受口状となる。端部には顕著な平坦面を形成し、加飾は認められない。7877はⅥ期～Ⅶ期甕B2類。頭部にはわずかに直立する部位が認められ、口縁部が外反する。内面にはヨコナデ痕が明瞭に残り、端部を平坦に仕上げる。7878はⅤ期～Ⅵ期鉢A3a類。口縁部の屈曲は弱く、内面はナデによってわずかに内湾して受口状になる。端部には外面に平坦面を形成し、下端には刺突を加える。頭部直下に直線文及び刺突文を施文する。7879はⅤ期高坏B類。坏底部から口縁部が外反する。内面の段、外面の稜ともに明瞭で、内面の段は沈線状の凹みを形成する。7880はⅤ期器台A1a類。中空の脚部が柱状に立ち、透孔を境に裾部が外反する。7881はⅤ期器台A1b類。脚部に直線文帯が2帯認められる。7882はⅥ期器台B1a類。受部が直線的に開き、端部を上下に拡張する。脚部は円錐状にわずかに開き、透孔付近を境に大きく外反する。透孔は3方向に配置される。

時期 出土遺物の時期から、Ⅴ期～Ⅵ期と考えられる。

SK05575 (遺構：図2210、遺物：図2211)

検出状況 東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB482床面で平面形を確認したが、多数の遺物が検出面より浮いた状態で出土したことから、SB482に伴う遺構としては規模が大きすぎることから、SB482埋没後に掘削された土坑と判断した。

形状 東西に長く、長軸長約2.6mの不整楕円形を呈する。深さは約0.2mで、底面はやや凹凸がある。壁面の傾斜は西側が緩やかで、他は急である。

埋土 3層に分層した。下層はブロック土の混入が多く、1層中から多量の土器が出土したことから人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器930点が出土した。土坑南東側では甕や高坏などが多数出土し、土器とともに礫も出土した。土器の時期はⅥ期末からⅦ期前半にまとまりがあり、わずかに出土したⅤ期の土器は混入と考えられる。

出土遺物 7883はⅦ期壺A2類。口縁部が強く外反し、わずかに端部を上方と下方に拡張する。端部には擬凹線が認められるものの、口縁部内面及び胴部の文様は認められない。7884はⅦ期壺G3b類。口縁部が短く内湾して立ち上がり、口縁部径は頸部径よりやや大きくなる。端部はわずかに内傾し、平坦面を形成する。端部外面には多条沈線が認められる。7885、7886はⅦ期壺。7885は頸部に直立部位が認められ、口縁部は強く外反すると考えられる。頸部の直立部位には粗いハケ目が残る。7886は胴部にV字状に籠目が残る。7887はⅦ期壺底部で、7883と同一個体の可能性がある。

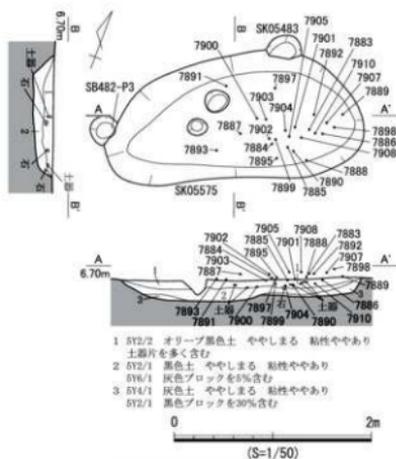


図2210 SK05575 遺構図

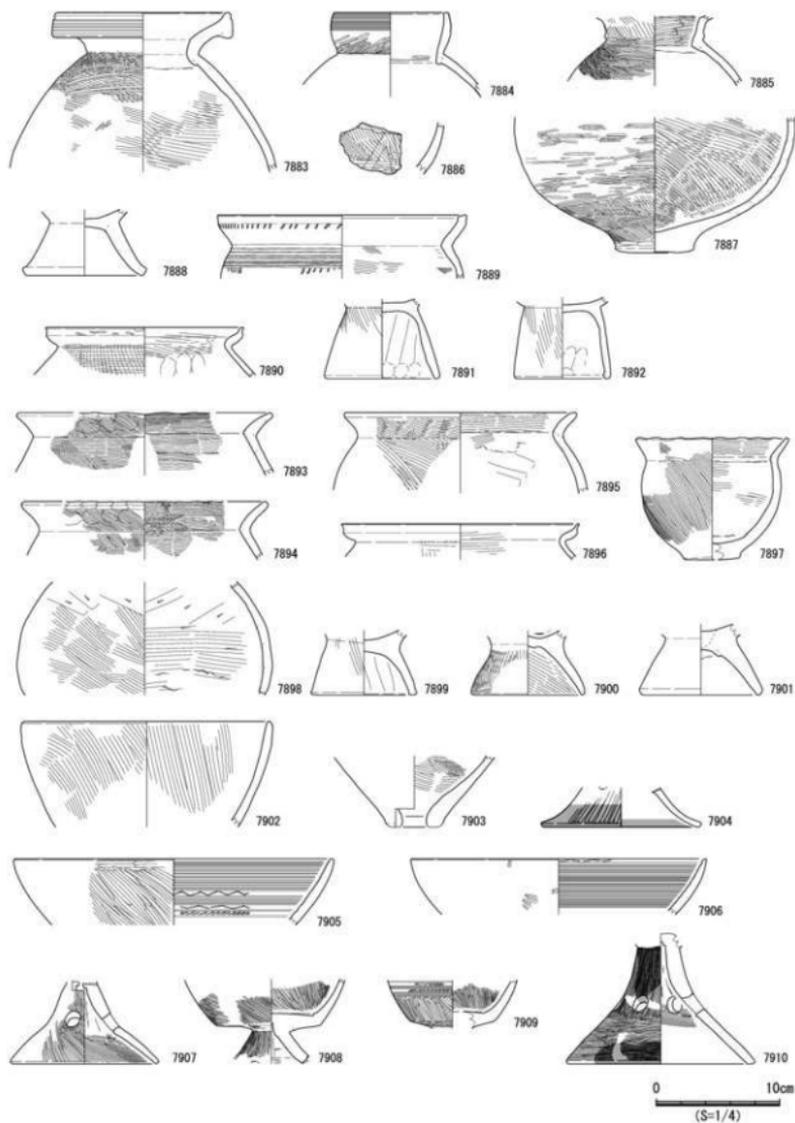


図 2211 SK05575 遺物実測図

底部は平底でやや突出気味となり、器面調整はハケによる調整の上からミガキを施す。7888はV期甕脚部。ハの字状に開き、端部は強く外反する。7889はVI期～VII期鉢A2類。口縁部の形状や口縁部径から判断すると甕A3類と類似するが、胴部の形状から鉢と考えられる。頸部はくの字状に屈曲し、口縁部は内湾する。直立する端部には明瞭な平坦面をもち、外面には刺突を加える。胴部の文様も甕A3類と共通し、頸部直下には直線文、その下部に刺突を加える。7890はVI期甕D1b類。口縁部外面に刺突が認められる。7891、7892は甕D類脚部。7891はVI期のもので、器壁がやや厚く、脚裾部の折り返しが認められない。7892はVI期～VII期のもので、7891より器壁は薄く、脚裾部に折り返しが認められる。7893～7895はVII期甕B3類。いずれも口縁部が短く立ち上がり、ハケ目及びヨコナデ痕が残る。端部には断続的に強いヨコナデ痕が認められ、凹凸を形成する。7896はVII期甕D2b類。7897はVII期甕E4類。口縁部が短く外反し、端部を丸くおさめる。口縁部内面にはハケ目、外面にはナデ痕が残る。器形は球形に近く、底部は平底となる。7898はVII期甕胴部。7899～7901はVII期甕脚部。7899、7901は器壁が厚く、やや内湾する。7900は器壁がやや薄い作りとなる。7902、7903はVII期鉢。7902はB1類で、内外面ともに粗いハケ目が残る、端部を丸くおさめる。7903はB類の底部で、大きな穿孔が認められる。7904はV期高坏B類。透孔以下で脚裾部が強く外反する。7905、7906はVII期高坏C4d類。ともに外面には丁寧なミガキ、内面には多条沈線による加飾がみられる。7905は多条沈線間にクシによる山形文、ヘラによる山形文、クシによる刺突文を配する。7906は端部に山形文を1帯配する。7907はVII期高坏C類。脚部が円錐状に開き、透孔以下で内湾する。7908はVII期高坏G3類。坏底部から口縁部が外傾して立ち上がる。脚部は付根から円錐状に強く開き、低脚気味となる。7909はVII期高坏G3b類。口縁部が外傾して立ち上がり、外面に多条沈線及び刺突文が認められる。7910はVII期～VIII期高坏。脚部が円錐状に開き、裾部はわずかに内湾する。2孔1対の透孔を2方向に配置し丁寧なミガキが認められる。

時期 出土遺物の時期から、VI期末～VII期前半と考えられる。

SK05578 (遺構：図2212、遺物：図2213)

検出状況 東部西側中央にあり、東端をSH203と同一面で検出したが、大半は攪乱により失われている。

形状 長軸長約0.3mの楕円形を呈する。深さは約0.4mであり、底面は西側が柱穴状に窪み、壁面の傾斜は急である。

埋土 2層に分層した。下層はブロック土を多く含み、人為堆積と考えられる。SH203の柱筋上に位置することから、SH203構築に伴う遺構の可能性もある。

遺物出土状況 埋土中から土器3点が出土した。舟形土製品(7911)

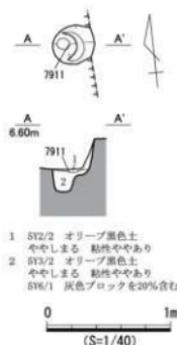


図2212 SK05578 遺構図

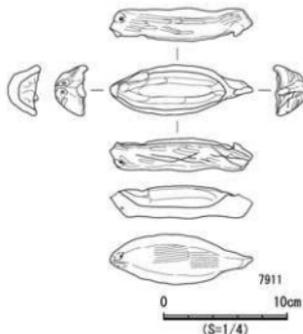


図2213 SK05578 遺物実測図

は1層と2層の層界付近から出土した。

出土遺物 7911はⅦ期～Ⅹ期の土製品。全形を俯瞰すると船状の形状を呈する。底にあたる部分の一方をつまみ、そこに穿孔を施す。もう一方は端部を拡張し、さらに上部に引き伸ばしている。その先の部分は欠損しているために、どのような形状であったかは不明である。内面にはナデによる調整を施し、外面は部分的にナデ、ミガキによる調整痕が認められる。

時期 SH023はⅦ期以降であり、本遺構の出土遺物の時期からもⅦ期以降と考えられる。

SK05583 (遺構：図2214)

検出状況 東部西側中央にあり、SZ182の方台部中央付近に位置する。検出時の埋土は褐色を呈し、弥生時代中期の方形周溝墓の周溝埋土に類似していた。基盤層であるV層と埋土の違いは明瞭であったが、遺構の輪郭は漸移的であり、攪乱壁面で本遺構の掘形を確認してから平面形を確定した。

形状 長軸長約3.1mの不整楕円形を呈する。深さは約1.0mで、遺構周縁部には緩やかな傾斜の平坦面があり、中央が深い。底面は丸みを帯びている。

埋土 11層に分層した。土坑下半では南北方向からの堆積が認められ、全体的にブロック土の混入は少ないが、その成因は不明である。

遺物出土状況 埋土中から土器131点が出土した。しかし、いずれも細片であり図示していない。

時期 出土遺物や遺構の重複関係から時期を推定するのは困難であり、不明である。

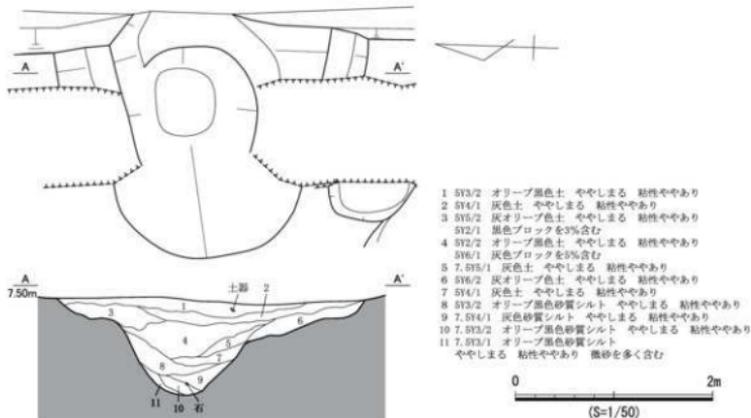


図2214 SK05583 遺構図

SK05584 (遺構：図2216、遺物：図2215)

検出状況 東部西側南寄りに位置し、SZ185の周溝埋土上面で検出した。周溝埋土と本遺構埋土の識別は容易であったが、平面形は漸移的であった。

形状 東側を攪乱により失っているが、全体形は隅丸形状を呈すると考えられる。深さは約0.1mで底面は平坦であり、壁面の傾斜は緩やかである。

埋土 炭化物を含む黒色土の単層であり、ブロック土の混入は認められなかった。底面は平坦であり、遺構の立ち上がりは緩やかである。

遺物出土状況 埋土中から土器149点が出土した。埋土を少し掘り下げるとⅤ期高坏B類(7912)が横位で出土した。比較的残存状態が良く、口縁部を西に向けている。また、その北側から長楕円礫が出土した。出土土器はⅤ期～Ⅵ期のものが多く、わずかにⅠ期、Ⅱ期、Ⅶ期の土器片も混入する。

出土遺物 7912はⅥ期高坏B2b類。坏底部から口縁部が強く外反する。口縁部の立ち上がりはわずかに直立部位を残すものの、端部にかけて強く外反する。口縁部外面には波状文を施文し、端部を丸くおさめる。脚部は付根からわずかに開く円錐状を呈し、裾部で強く外反する。透孔は裾部が外反する部位の直上に位置し、4方向に配置される。脚部部の端部にはナデによって平坦面を形成するが、上方に向けてつまみあげるように拡張する。

時期 出土遺物の時期から、Ⅴ期～Ⅵ期と考えられる。

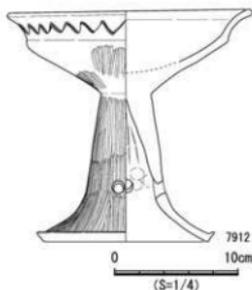


図 2215 SK05584 遺物実測図

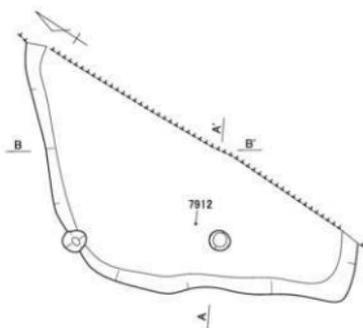
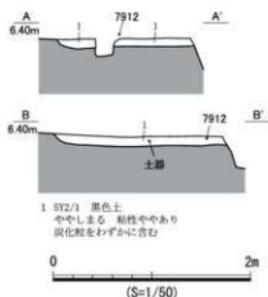


図 2216 SK05584 遺構図



SK05585 (遺構：図 2217、遺物：図 2218)

検出状況 東部西側中央にあり、東側を平成18年度に、西側を平成23年度に調査した。平成23年度調査では上方にSB501を検出し、その床面で遺構を確認した。

形状 短軸長約0.8mの不整楕円形を呈する。深さは東側で約0.2mで、底面はやや凹凸があり、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土 東側では6層に分層した。ブロック土が多く混入し、土器もまとめて出土していることから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器233点が散在して出土した。土器はⅦ期のものが多い。

出土遺物 7913はⅦ期甕D2b類。口縁部が屈曲しながら大きく開く。7914はⅦ期高坏C類。平坦な坏底部から口縁部は明瞭な段をもって立ち上がり、脚部は円錐状に開く。7915はⅦ期器台B類。受部が大きく開き、脚部は円錐状に開く。

時期 出土遺物の時期から、Ⅶ期と考えられる。

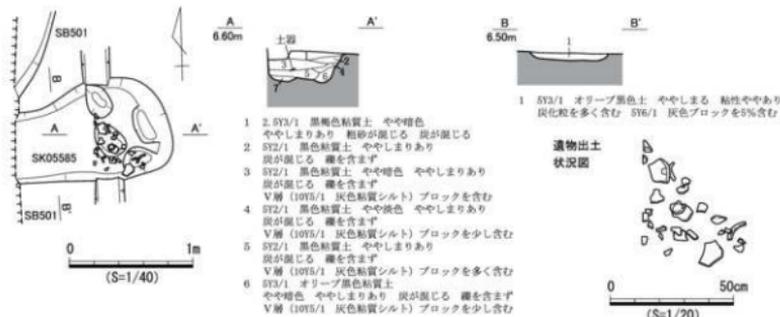


図 2217 SK05585 遺構図



図 2218 SK05585 遺物実測図

SK05588 (遺構：図 2219、遺物：図 2220)

検出状況 東部西側南寄りに位置し、南側をSD1047に切られる。平面形は明瞭であった。

形状 遺構の北辺のみしか検出できていないため、平面形は不明である。深さは約0.2mで、底面は平坦であり、壁面の傾斜は緩やかである。

埋土 4層に分層したが、1・2層は近代以降の掘り込みである。埋土はほぼ水平堆積であり、上下層ともにブロック土の混入が多く、人為堆積と考えられる。なお、北辺沿いにて炭化物が出土した。

遺物出土状況 埋土中から土器209点が出土した。底面直上にてⅦ期高坏G類(7916)が坏部内面を下にして出土したが、それ以外の土器は細片が多い。

出土遺物 7916はⅦ期高坏G3a類。坏底部には平坦面を形成するが、中央部がやや盛り上がる。外周部がやや凹み、そこから口縁部が内湾して立ち上がる。端部付近をわずかに内湾させ、やや内傾す

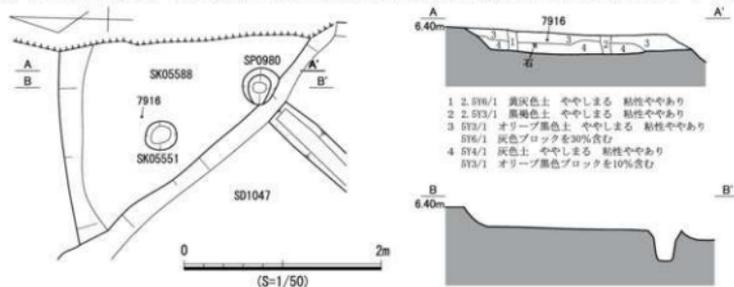


図 2219 SK05588 遺構図

る。端部を丸くおさめ、内外面ともに丁寧なミガキ調整を施す。

時期 底面直上の出土遺物の時期から、Ⅶ期と考えられる。

SK05616 (遺構：図 2221、遺物：図 2222)

検出状況 東部西側中央の遺構密集域に位置する。北側は調査区域外にあり、西側でSK05620を切る。平面形は明瞭であった。

形状 半分以上が調査区域外にあるため、形状は不明である。深さは約0.2mで、底面は南側がやや凹み、壁面の傾斜は垂直気味である。

埋土 土器内埋土を含み3層に分層し、土器は1層中に位置する。土器下の3層にはブロック土と炭の混入が目立つ。

遺物出土状況 埋土中から土器101点が出土した。土坑中央付近にて、底面よりやや上位でⅦ期甕B類(7917)が口縁部を南に向け、横位で出土した。

出土遺物 7917はⅦ期甕B3類。口縁部が短く屈折し、端部は断続的なナデによって平坦面を形成する。口縁部内外面及び胴部外面にはハケ調整を施し、内面には全面にケズリが認められる。胴部最大径は胴部下方に位置して下膨れ状を呈し、胴部下半には煤が付着する。

時期 出土遺物の時期から、Ⅶ期と考えられる。



図 2221 SK05616 遺構図

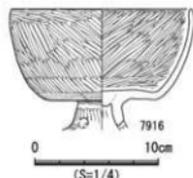


図 2220 SK05588 遺物実測図

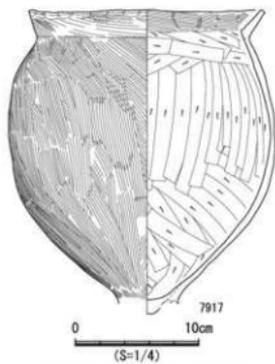


図 2222 SK05616 遺物実測図

- 2.5V2/1 黒色粘質土 炭が混じる 礫を含まず
- 2.5V3/1 黒褐色粘質土 礫を含まず (土器内部)
- 2.5V3/1 黒褐色粘質土 炭が混じる 礫を含まず
V層 (10V3/1 灰色粘質シルト) ブロックを多く含む

SK05629 (遺構：図 2223、遺物：図 2224)

検出状況 東部西側中央の遺構密集域に位置する。北側は調査区域外にあり、東側をSK05631に、西側をSK05606とSK05609に切られる。

形状 幅約1.0mの不整形円形を呈する。深さは約0.3mで、底面はやや凹凸があり、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土 6層に分層した。全体的に炭が混じる。層界に凹凸があり、ブロック土が混入することから、

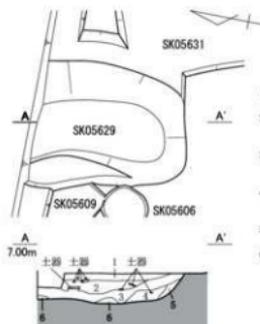


図 2223 SK05629 遺構図

- 2.5V2/1 黒色粘質土 ややしまりあり 炭が混じる 径3cm以下の円礫を少し含む
- 2.5V3/1 黒褐色粘質土 ややしまりあり 炭が混じる 礫を含まず ややしまりあり 炭が混じる 礫を含まず V層 (5V4/1 灰色粘質シルト) ブロックを含む
- 2.5V3/1 黒褐色粘質土 やや暗色 ややしまりあり 炭が混じる 礫を含まず V層 (5V4/1 灰色粘質シルト) ブロックを多く含む
- 5V4/1 灰色粘質土 ややしまりあり 炭が混じる 礫を含まず 黒土ブロックを多く含む
- 2.5V4/1 灰色粘質土 ややしまりあり 炭が少し混じる 礫を含まず
- 5V4/1 灰色粘質シルト やや黄色 V層 (5V4/1 灰色粘質シルト)

人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器666点が散在して出土した。土器はⅥ期～Ⅶ期のものが多い。

出土遺物 7918はⅥ～Ⅶ期手摺形土器。覆部の小破片である。強いナデによって端部には明瞭な平坦面を形成する。胴部との接合部から2～3cm上部に突帯を貼り付ける。突帯の断面が三角形を呈し、上下両面に刺突文を加える。器面には斜格子文が認められるが、突帯から下方は細かく、上方は大振りに施文される。

時期 Ⅶ期～Ⅸ期のSK05631に切られることと、出土遺物の時期から、Ⅵ期～Ⅶ期と考えられる。

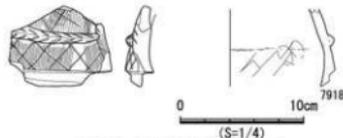


図 2224 SK05629 遺物実測図

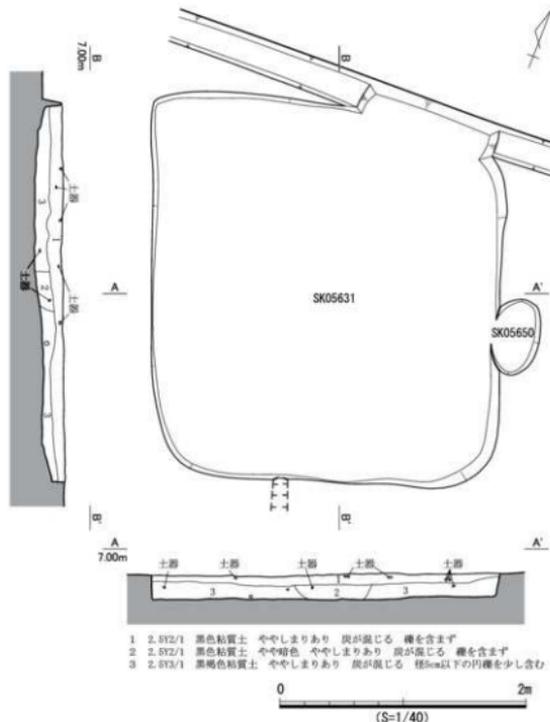
SK05631 (遺構：図 2225、遺物：図 2226)

検出状況 東部西側中央の遺構密集域に位置し、南側でSK05634を切り、東側でSK05650に切られる。Ⅴ層上面において検出し、平面形は比較的明瞭であった。検出時には竪穴住居跡を想定したが、柱穴や壁溝を確認できなかったため、竪穴状の土坑として報告する。

形状 長軸長約3.1m、短軸長約2.8mの隅丸方形を呈する。深さは約0.2mで、底面は北側がやや低く、壁面の傾斜はほぼ垂直である。
埋土 3層に分層した。基本的に水平堆積であるが、埋土下層中央には、何らかの掘削が行われた痕跡が確認できる。

遺物出土状況 埋土中から土器4,456点、石器類2点が出土した。土器の出土量は多いが、いずれも散在して出土した。出土土器の時期はⅥ期～Ⅸ期であり、Ⅶ期～Ⅸ期のものが多い。

出土遺物 7919はⅦ期壺G2b類。口縁部が屈折し、外傾して立ち上がる。外面には多条沈線を施文し、そ



- 1 2.5Y2/1 黒色粘質土 ややしまりあり 炭が混じる 礫を含まず
- 2 2.5Y2/1 黒色粘質土 やや暗色 ややしまりあり 炭が混じる 礫を含まず
- 3 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 ややしまりあり 炭が混じる 径5mm以下の円礫を少し含む

図 2225 SK05631 遺構図

の間にクシによる山形文を2帯加える。7920はⅦ期～Ⅷ期壺。頸部が直立気味に立ち上がり、口縁部は反外して端部を丸くおさめる。7921はⅦ期甕B3類。口縁部がくの字に屈折して直線的に外傾し、口縁部接合時の粘土が頸部内面にはみ出す。端部には強いナデによって平坦面を形成する。外面にはハケ目が残る。7922はⅦ期甕D2a類。口縁部が強く屈曲し、上段が垂直気味に立ち上がる。7923はⅦ期甕D類。口縁部が弱く屈曲し、端部をわずかに肥厚する。7924、7925はⅧ期～Ⅸ期甕。7924は口縁部が直線的に外傾する。端部にはわずかに平坦面を形成する。7925は胴部の器壁が薄く、外面には粗いハケ目が残る。脚部はハの字に強く開き、裾端部を長く折り返す。7926はⅦ期～Ⅷ期高坏。坏底部が小さく、口縁部が外傾して直線的に開く。内面の段、外面の稜ともに比較的明瞭である。脚部は付根から円錐状に開き、2孔1対の透孔を2方向に配置する。7927はⅧ期高坏。坏底部が小さく、口縁部が外傾して直線的に開く。端部付近はやや内湾し、端部を丸くおさめる。内面の段、外面の稜ともに比較的明瞭である。7928は刃器。縦長剣片の一侧縁に細かい連続した刺彫が施されている。

時期 出土遺物の時期から、Ⅶ期～Ⅸ期と考えられる。

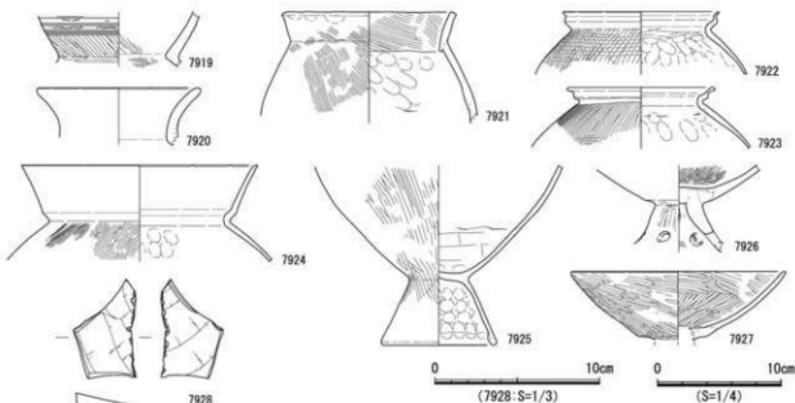


図 2226 SK05631 遺物実測図

SK05634 (遺構：図 2228、遺物：図 2227)

検出状況 東部西側中央の遺構密集域に位置する。中央をSK05631に、西側をSK05648に、東側をSK05658に切られ、土坑の周縁のみ埋土が残存していた。なお、本遺構とSK05631との底面の標高は同じである。

形状 短軸幅約2.6mの隅丸方形を呈する。深さは約0.2mであり、壁面の傾斜は急である。

埋土 3層に分層した。大半をSK05631に切られているため定かではないが、ブロック土が混入していることから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器323点、石器類1点が出土した。土器はいずれも細片であり、図示していない。

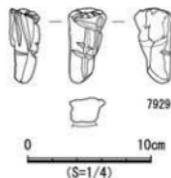


図 2227 SK05634 遺物実測図

出土遺物 7929は砥石。いわゆる筋砥石で、上端の平坦面と表面に縦や横方向の溝状の窪みが複数認められる。

時期 VII期～IX期のSK05631に切られることから、それ以前と考えられる。

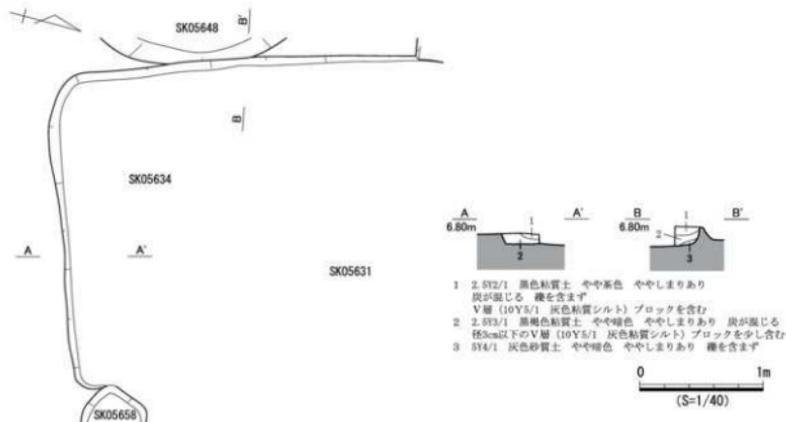


図 2228 SK05634 遺構図

SK05691 (遺構：図 2229、遺物：図 2230)

検出状況 東部西側中央の遺構密集域に位置する。V層上面における検出で、平面形は比較的明瞭であった。しかし、底面を誤認した可能性が高く、図示した埋土1層のみが本遺構に伴う埋土と考えられる。

形状 直径約0.7mの円形を呈し、底面は平坦だが、中央部がやや窪む。深さは約0.1mで、壁面の傾斜は急である。

埋土 単層であり、炭混じりの黒褐色土である(2・3層はSK05710埋土)。

遺物出土状況 埋土中から土器159点が出土した(埋土2・3層出土遺物含む)。土器はVI期～IX期のものが出土し、そのうち確実に1層出土遺物のみ図示した。

出土遺物 7930はIX期甕。頸部には沈線が1条認められ、口縁部が屈曲して外方に開く。外面には煤が付着する。

時期 出土遺物の時期から、IX期と考えられる。

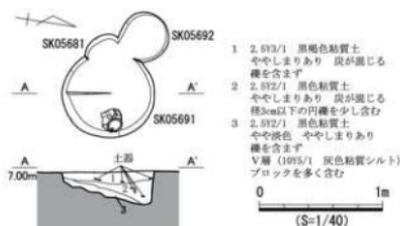


図 2229 SK05691 遺構図

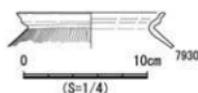


図 2230 SK05691 遺物実測図

SK05710 (遺構：図 2231、遺物：図 2232)

検出状況 東部西側中央の遺構密集域に位置する。SB531等を完掘後に検出したが、遺構の重複が著しく平面形は不明瞭であった。

形状 平面形は不定形で、中央西寄りに不整楕円形状の落ち込みを有する。落ち込みの最深部は深さ約0.4mであり、底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は緩やかである。

埋土 10層に分層した。埋土全体に炭化物とブロック土の混入が認められ、土器の小片が多量に出土していることから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器783点が出土した。土器は小片が多く、埋土中から散在して出土したが、埋土上層ではⅧ期甕D類(7933)が残りの良い状態で出土した。

出土遺物 7931はⅦ期甕A1類。口縁部が外反して屈曲し、端部が内傾して平坦面を形成する。7932はⅥ期～Ⅶ期甕B2類。口縁部がくの字に屈折して直線的に外傾し、端部を丸くおさめる。7933はⅧ期甕D類。口縁部の屈曲は形骸化し、端部がやや肥厚してわずかな平坦面を形成する。胴部最大径は胴部上方に位置し、肩部が強く張る。脚部はハの字に大きく開き、端部を折り返す。胴部下半には煤が

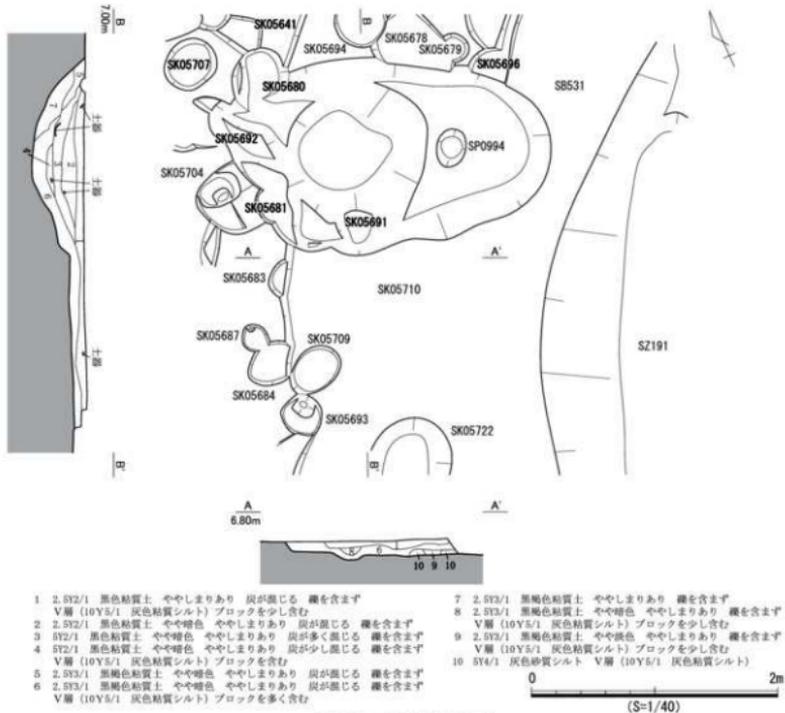


図 2231 SK05710 遺構図

付着する。7934はⅧ期喪D類。口縁部の屈曲は形骸化し、わずかに屈曲して大きく開く。内外面ともに煤が付着し、内面は特に底部周辺が顕著である。脚部を欠損する。7935はⅥ期～Ⅶ期手捏ね土器。底部は平底で、胴部が開いて立ち上がる。

時期 Ⅵ期～Ⅶ期のSB531より先行するが、埋土上面でほぼ完形のⅧ期喪(7933)が出土しており、出土遺物と遺構

の先後関係が一致しない。検出時に遺構の重複関係が著しく、平面形を誤認した可能性がある。

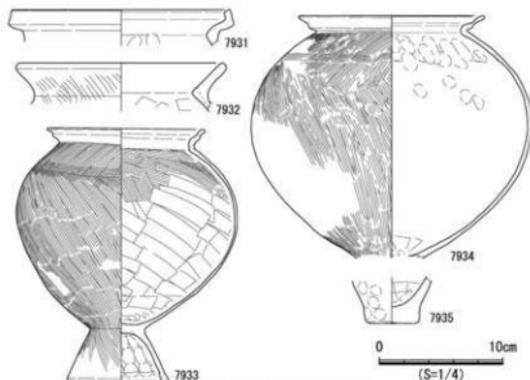


図 2232 SK05710 遺物実測図

SK05720 (遺構：図 2234、遺物：図 2233)

検出状況 東部西側中央の遺構密集域に位置し、西側でSB529を切る。Ⅴ層上面における検出で、埋土中に炭化物を多く含み、平面形は比較的明瞭であった。

形状 長軸長約3.3m、短軸長約2.8mで、平面形は不整楕円形を呈する。南北方向の断面形は掘り鉢状で、深さは0.47mとなる。底面にはL字状に屈曲した低い部分があり、その上段に平坦面を有する。北側の壁面傾斜は緩やかだが、南側と西側は垂直に近い。

埋土 16層に分層した。壁面沿いのブロック土が混入する土層(13～15層など)は壁面崩落土の可能性のあるものの、その他の堆積は中央が窪む土層であり、自然堆積の可能性がある。

遺物出土状況 埋土中から土器2,602点、石器類3点、木製品1点、炭化物・炭化材1点が出土した。特に2層中から土器片が多量に出土した。出土土器はⅤ期～Ⅸ期までのものが確認でき、大半はⅥ期～Ⅶ期のものである。本遺構周辺は遺構の重複が著しいために、幅広い時期の土器が出土した可能性

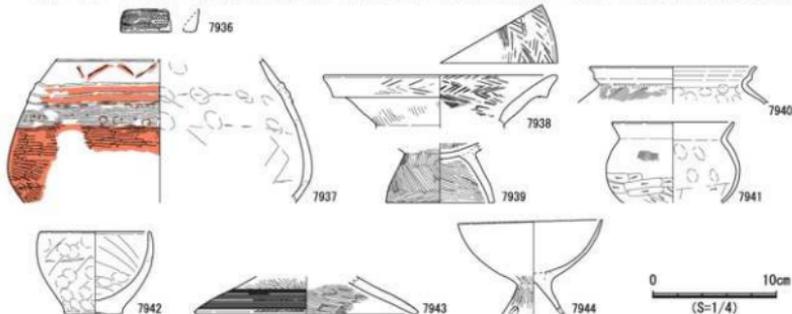


図 2233 SK05720 遺物実測図

がある。

出土遺物 7936はⅥ期～Ⅶ期壺A類。口縁端部に直線文帯を3帯施文し、その間に刺突文帯をそれぞれ充填する。7937はⅧ期壺A類。胴部上半に直線文、ヘラによる山形文が認められ、その下方に貼付突帯が形成される。幅広に粘土を貼りつけ、ユビナデによる凹面を2条形成し、その下方に直線文を施文する。胴部最大径部が明瞭に屈曲し、肩部が張る。外面には赤彩を施す。7938はⅧ期～Ⅸ期壺。口縁部内面、端部に羽状文が認められる。内面に煤が付着する。7939はⅥ期～Ⅷ期甕。脚部がハの字に開き、わずかに内湾する。内外面に粗いハケ目が認められ、接地面を平坦に仕上げる。7940はⅦ期甕D2b類。口縁部が屈曲し、上段が短く外反する。外面には煤が付着する。7941はⅥ期～Ⅶ期鉢A4c類。口縁部がくの字に屈折し、短く直線的に外傾する。胴部上半にはハケ及びビナデを施し、胴部下半

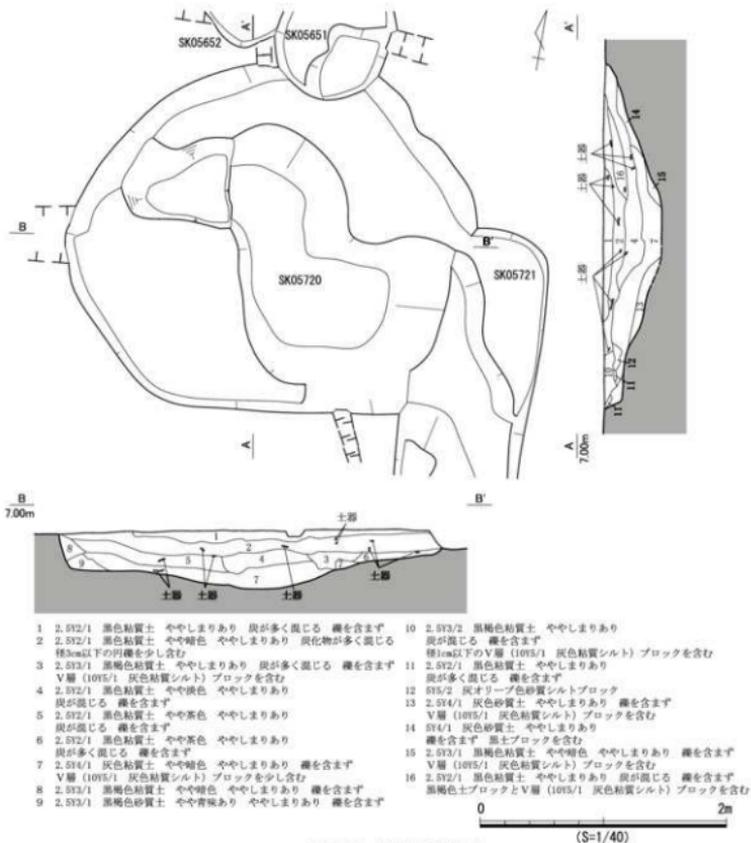


図 2234 SK05720 遺構図

にはケズリが認められる。7942はⅥ期～Ⅶ期鉢C類。胴部は球形を呈し、内面にはコビナデを施す。底部はやや突出し、中央がわずかに窪む。7943はⅦ期高坏G3c類。脚裾部が平坦に開き、端部に平坦面を形成する。裾部外面に多条沈線を施文し、その間に貝による二重山形文を2帯加える。端部際にはクシによる刺突文を加える。7944はⅦ期高坏H1類。坏部が碗状を呈し、端部は尖る。付根から脚部が円錐状に開き、透孔を3方向に配置する。

時期 Ⅶ期のSB529を切ること出土遺物の時期からⅦ期と考えられ、わずかに出土したⅧ期以降の遺物は混入と考えられる。

SK05723 (遺構：図2235、遺物：図2236)

検出状況 東部西側中央の遺構密集域に位置する。周辺をSB531やSB532など複数の遺構に切られ、平面形は不明瞭であった。

形状 遺構の重複が著しく、規模は不明である。南辺と東辺が直線的のび、ほぼ直角に屈曲することから、全形は方形もしくは長方形と考えられる。深さは0.1m未満で、底面は平坦である。

埋土 残存している埋土はわずかであったが、3層に分層した。ブロック土の混入が多く、人為堆積と考えられる。

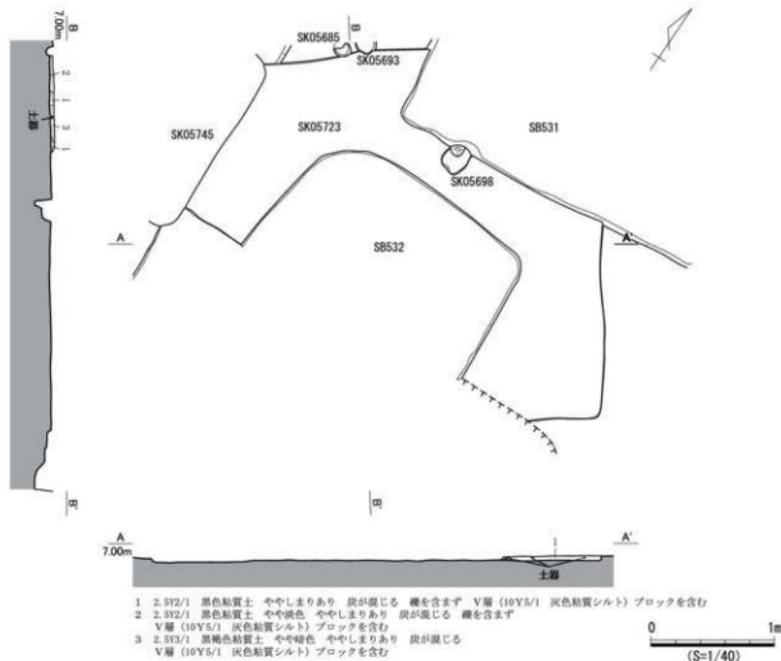


図2235 SK05723 遺構図

遺物出土状況 埋土中から土器894点が散在して出土した。土器の多くはV期～VII期のもので、わずかに出土したVIII期以降の土器は混入と考えられる。

出土遺物 7945はVI期～VII期甕B4類。口縁部がくの字に屈折して直線的に外傾し、端部がナデによってやや外反する。口縁部内面、胴部外面にはハケ目が残るが、胴部のハケは粗く雑である。内面にはナデを施す。7946はVI期～VII期甕。脚部がハの字に開き、わずかに内湾する。外面には粗いハケ、内面にはユビナデが認められ、接地面を平坦に仕上げる。7947はVII期甕B2類。口縁部がくの字に屈折し、直線的に外傾する。内外面ともに粗いハケ目残り、外面には煤が付着する。7948はIX期甕。口縁部が屈折して外傾し、端部がナデによって外反する。胴部は球形を呈して器面にはハケ調整を施し、煤が付着する。内面にはケズリが認められる。7949はV期高坏B2a類。坏底部が浅く、口縁部が明瞭な段を持って屈曲し、直立して立ち上がる。端部は強く外反し、外方に引き出されるようにして平坦面を形成する。口縁部外面には、屈曲部直上に直線文が認められ、その上方には波状文が認められる。器面には丁寧なミガキ調整を施し、精緻な作りである。

時期 VI期～VII期のSB531、SB532に切られるが、出土遺物の時期からV期～VII期と考えられる。

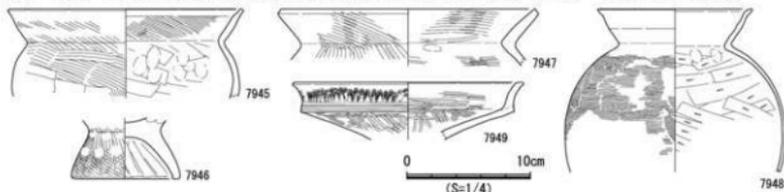


図 2236 SK05723 遺物実測図

SK05732 (遺構：図 2238、遺物：図 2237)

検出状況 東部西側中央の遺構密集域に位置する。東側をSB529に、西側の大半をSB527に切られており、平面形は不明瞭であった。

形状 東辺のみしか検出していないため、不明である。深さは約0.1mであり、底面は平坦である。

埋土 残存している埋土はわずかであったが、3層に分層した。上層には炭が混じる。ブロック土が混入することと、遺構の重複が著しいことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器501点が散在して出土した。土器はいずれの細片であるため図示していない。なお、埋土中から管玉(7950)が出土した。

出土遺物 7950は管玉。縦方向にほぼ半分に分れており、下端に剥離痕が認められる。

時期 出土土器から時期を言及できないが、V期のSB527、VII期のSB529に切られることから、V期以前と考えられる。

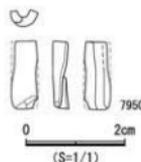


図 2237 SK05732 遺物実測図

SK05749 (遺構：図 2239、遺物：図 2240)

検出状況 東部西側中央の遺構密集域に位置し、南側は調査区域外にある。SB532底面で検出し、平面形は比較的明瞭であった。

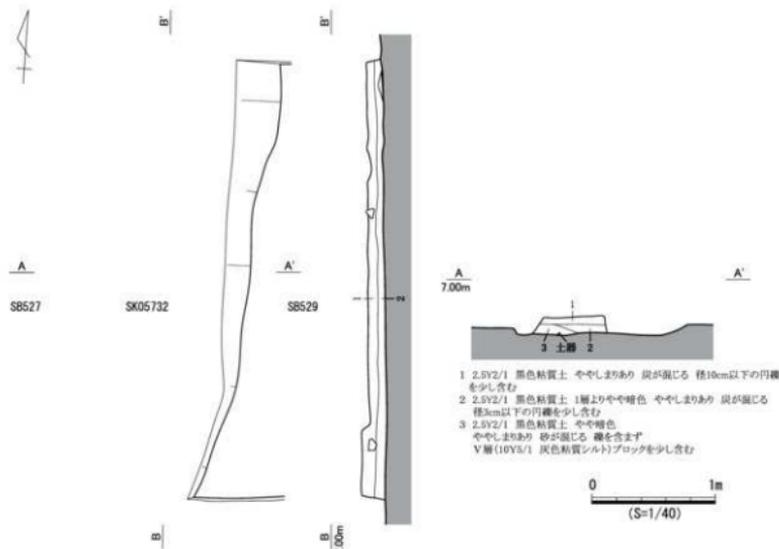


図 2238 SK05732 遺構図

形状 長軸長約2.1mで、東西に長い不整形円形を呈する。深さは約0.1mで、底面はやや凹凸があり、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土 黒色粘質土の単層である。ブロック土が混入することから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器495点が出土した。土器の多くは遺構の東側に偏り、Ⅵ期～Ⅶ期のものが多く出土し、わずかにⅧ期の土器片を確認した。

出土遺物 7951はⅦ期～Ⅷ期高坏。坏底部が小さく、口縁部が外傾して直線的に開く。端部付近はやや内湾し、内傾する平坦面を形成して3条の沈線が認められる。内面の段、外面の稜ともに比較的明瞭

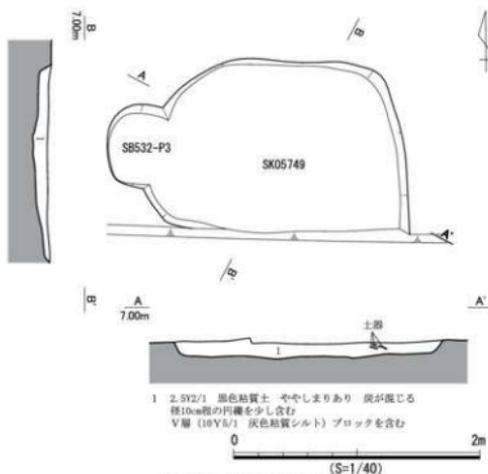


図 2239 SK05749 遺構図

である。内外面ともに丁寧なミガキを施す。7952はⅦ期高坏C類。脚部が付根から円錐状に開き、裾部がやや内湾する。透孔は脚部中位に位置し、2孔1対で2方向に配置される。

時期 Ⅶ期～Ⅷ期のSB532より先行するが、出土遺物の時期からⅦ期～Ⅷ期と考えられる。

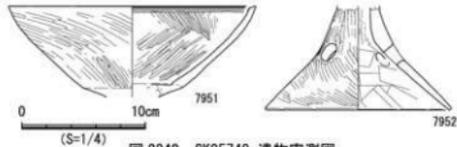


図 2240 SK05749 遺物実測図

SK05751 (遺構：図 2241、遺物：図 2242)

検出状況 東部西側中央の遺構密集域に位置する。南側でSK05756を切り、平面形は比較的明瞭であった。

形状 長軸長約0.4mの楕円形を呈する。深さは約0.2mで、底面は東側が円形に深く、壁面の傾斜は急である。

埋土 4層に分層した。上層に炭が、下層にはブロック土が含まれるが、その成因は不明である。

遺物出土状況 埋土中から土器15点が出土した。

出土遺物 7953はⅥ期～Ⅶ期甕B3類。口縁部がくの字に屈折し、直線的に外傾する。内外面ともに粗いハケ目が残り、端部は断続的なナデによる平坦面を形成する。

時期 出土遺物の時期から、Ⅵ期～Ⅶ期と考えられる。

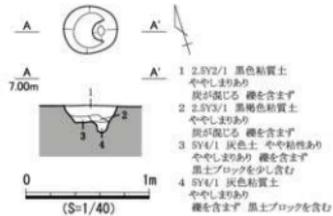


図 2241 SK05751 遺構図

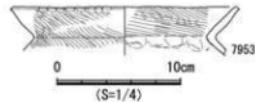


図 2242 SK05751 遺物実測図

SK05758 (遺構：図 2243、遺物：図 2244)

検出状況 東部西側中央の遺構密集域に位置し、南側は調査区域外へのびている。西側をSB532に切られ、東側でSK05829を切り、平面形は不明瞭であった。

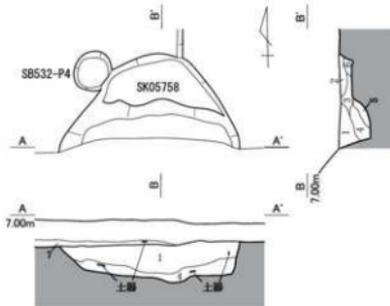
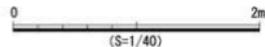


図 2243 SK05758 遺構図

- 2.5Y2/1 黒色粘質土 ややしきあり 炭が混じる 礫を含まず
- 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 ややしきあり 炭が混じる 礫を含まず
- 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 ややしきあり 炭が混じる 礫を含まず V層 (10Y6/1 灰色粘質シルト) ブロックを含む
- 2.5Y2/1 黒色粘質土 ややしきあり 炭が混じる 礫を含まず V層 (10Y5/1 灰色粘質シルト) ブロックを含む
- 5Y5/2 灰色砂質土 ややしきあり 礫を含まず 黒土ブロックを含む
- 7.5Y4/1 灰色砂質シルト V層 (10Y5/1 灰色粘質シルト) ブロックを含む
- 2.5Y2/1 黒色粘質土 ややしきあり 炭が混じる 礫を含まず



形状 東西長約1.5mの不整形を呈する。深さは約0.3mで、底面は南壁沿いが一段低くなっており、北壁面には平坦面が形成されている。

埋土 6層に分層した。ブロック土の混入が多く、層界の凹凸も顕著であることから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器273点が出土した。土器は埋土中から散在して出土し、その多くはVI期～VII期のものである。

出土遺物 7954はVI期～VII期壺A類。器面調整はハケを基本とし、頸部下方には直線文帯が3帯認められる。その間にクシによる山形文を施文し、文様に沿って赤彩を施す。一部に煤が付着する。7955はVII期高坏C4a類。口縁部が外傾し、端部付近がやや内湾して直立する。端部にはわずかな平坦面を形成し、内外面ともにミガキを施す。

時期 VII期～VIII期のSB532に切られ、VI期～VII期のSK05829を切ることで、出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。

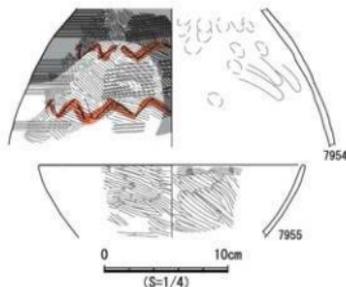


図 2244 SK05758 遺物実測図

SK05780 (遺構：図 2245)

検出状況 東部西側中央の遺構密集域に位置する。SZ175の南溝を切り、平面形は不明瞭であった。北東端部が調査区域境にかかるものの、ほぼ全形を検出したと考えられる。

形状 平面形は長楕円形を呈し、北北東-南南西方向を長軸とする。長軸長約3.3m、短軸長約1.0mで、深さは約0.3mである。

断面形は逆台形状で、底面は平坦であり、壁面傾斜は緩やかである。南西側に位置するSK05781は規模や形状等が類似することから、一連の施設である可能性もある。

埋土 4層に分層した。埋土全体に炭化物が混入し、下層にはブロック土が含まれる。

遺物出土状況 埋土中から土器760点、石器類1点が出土した。遺物は散在して出土したが、細片が多く図示していない。

時期 出土遺物から言及で

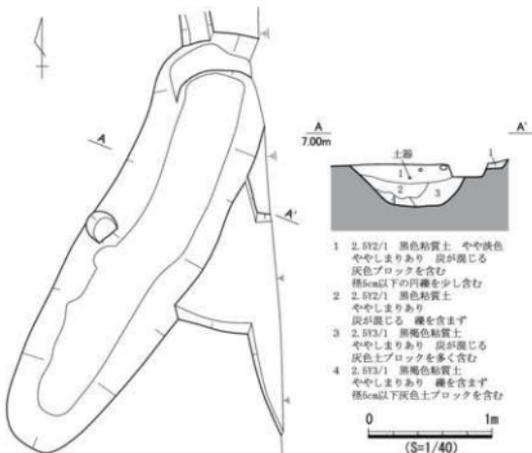


図 2245 SK05780 遺構図

- 1 2.872/1 黒色粘質土 やや褐色
ややしまりあり 炭が混じる
灰色ブロックを含む
標高5cm以下の階層を少し含む
- 2 2.872/1 黒色粘質土
ややしまりあり
炭が混じる 礫を含まず
炭が混じる
- 3 2.873/1 黒褐色粘質土
ややしまりあり 炭が混じる
灰色土ブロックを多く含む
- 4 2.873/1 黒褐色粘質土
ややしまりあり 礫を含まず
標高5cm以下灰色土ブロックを含む

きず、Ⅲ期～Ⅳ期のSZ175より後出することから、それ以降としかいえない。

SK05781 (遺構：図2246)

検出状況 東部西側中央の遺構密集域に位置する。北東端はSK05780に近接し、一連の遺構の可能性がある。なお、平面形は不明瞭であった。

形状 平面形は長楕円形を呈し、北東-南西方向を長軸とする。長軸長約3.3m、短軸長約1.0mで、深さは約0.4mである。断面形は逆台形状で、底面は平坦であり、北東側の底面が一段低くなる。壁面の傾斜は急で、直線的に開く。

埋土 3層に分層した。埋土全体にブロック土が混入することから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 土器77点が散在して出土した。しかし、いずれも細片であり図示していない。

時期 出土遺物から言及できず、SK05780と同様に、Ⅲ期～Ⅳ期以降と考えられる。

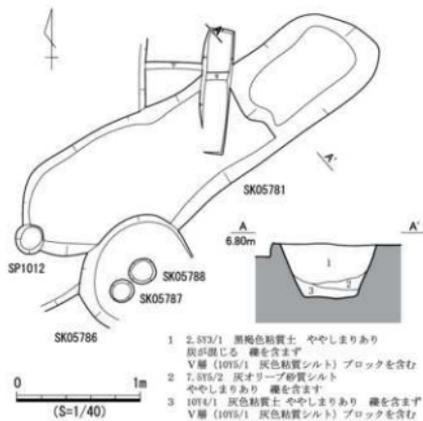


図2246 SK05781 遺構図

SK05796 (遺構：図2247、遺物：図2248)

検出状況 東部西側中央の遺構密集域にあり、SZ178の西側、SZ179の北側に位置する。北側でSP1010、南側でSH024-P3に切られ、平面形は不明瞭であった。なお、東側は平成18年度に、西側は平成23年度にそれぞれ調査し、平成23年度調査範囲は南北方向の攪乱があり、遺構の全容が把握できなかった。そのため、西側をSK05497、東側をSK05796として報告する。

形状 遺構上方の西側の様相は不明であるが、全形は南北長約5.0mの方形を呈すると考えられる。底面中央やや北寄りでは東西方向に長い隅丸長方形の深部があり、その底面は平坦で、東西壁面の傾斜は緩やかである。

埋土 11層に分層した。中央北側の最深部の断面形状に沿うように、4層や6層の堆積が認められる。全体的にブロック土の混入があり、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器3,721点、石器類2点が出土した。遺物の多くは1、2層出土遺物であり、3層以下の出土遺物は少ない。図示した遺物はすべてSK05796出土遺物であり、1層もしくは2層出土である。

出土遺物 7956、7957はⅦ期壺。7956は平らな底部がやや突出する。胴部下半は球形状に丸く立ち上がり、器面には粗いハケ目が認められる。7957は底部の中央部が窪む。底部からの立ち上がり部分を含めて、胴部全面に赤彩が認められる。7958、7959はⅤ～Ⅶ期甕Ⅱ類。ともに頸部が強く屈曲し、

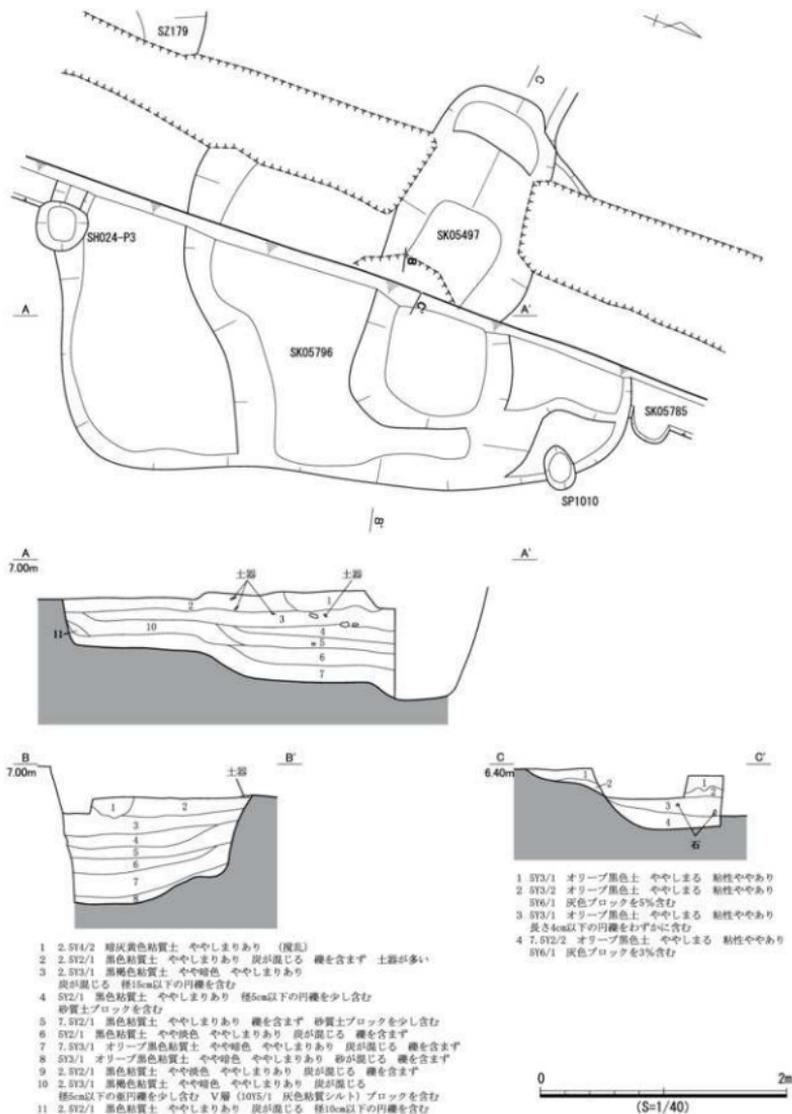


図 2247 SK05796 遺構図

口縁部が短く直立気味であり、北陸系の甕に類似する。胎土は在地のものとの差がない。屈曲部内面はナデによって凹面を形成し、外面には顕著な稜を作り出す。器形は類似するが、7959の方が口縁端部の立ち上がりがやや長くなり、別個体と考えられる。口縁部外面には擬凹縁らしき凹面が3条認められる。7960はVI期甕D1b類。口縁部下段が外方に引き出され、端部の屈曲は明瞭である。外面に押し引きが認められる。7961はVI～VII甕E類。小型の脚部が付き、やや内湾する。7962はVI期高坏H2類。口縁部が内湾して立ち上がり、端部は直立気味となる。7963はVII期高坏H2類。坏部が碗状を呈し、口縁端部はほぼ直立する。端部直下には細かな刺突文が認められ、以下は多条沈線を施文する。内外面ともに丁寧にミガキ調整が施される。7964はVIII期壺H2b類。口縁部が直立し、外面に多条沈線を施文する。多条沈線間には山形文、刺突文を加える。小片ながら、精緻な作りの資料といえる。

時期 掘削時期は不明であるが、VII期頃には窪地となっており、遺物が廃棄されたと考えられる。

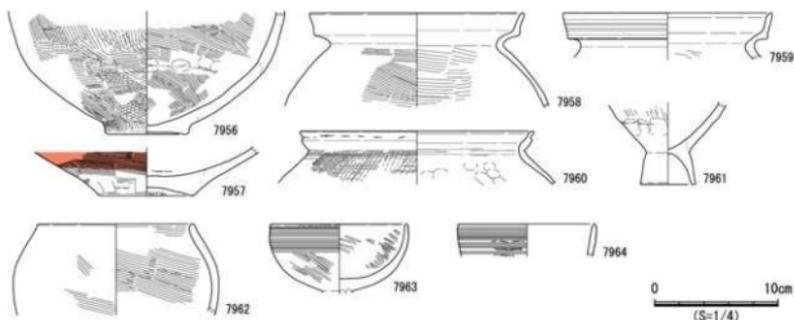


図 2248 SK05796 遺物実測図

SK05803 (遺構：図 2249)

検出状況 東部西側中央に位置し、SZ178 西溝を切る。平面形は不明瞭であった。

形状 長軸長約 2.9m、短軸長約 1.2m であり、平面形は北北西-南南東方向を長軸とする長楕円形を呈する。深さは約 0.4m で、断面形は逆台形に近いが、西壁面の一部は平坦面を有する。底面は平坦で、壁面の傾斜は急である。土坑の主軸方位や幅が SZ178 西溝と近似することから、SZ178 西溝を再掘削した土坑の可能性がある。

埋土 5層に分層した。壁面崩落土と考えられる2層と3層にブロック土が混入している。しかし、他の土層はブロック土の混入が認められず、その成因は不明である。

遺物出土状況 埋土中から土器

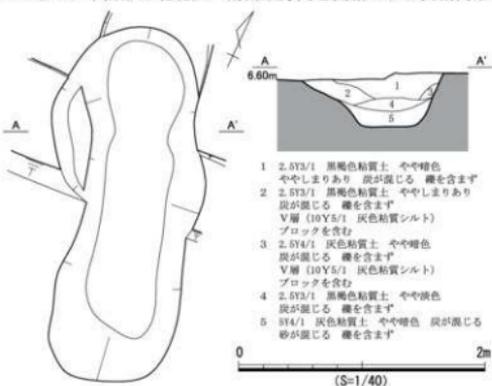


図 2249 SK05803 遺構図

61点が出土した。しかし、いずれも細片であり図示していない。

時期 IV期のSZ178周溝を切ることから、IV期以降である。

SK05828 (遺構：図2250、遺物：図2251)

検出状況 東部西側中央の遺構密集域に位置する。V層上面における検出で、平面形は比較的明瞭であった。

形状 長軸長約1.8m、短軸長1.5mの、東西方向にやや長い不整楕円形を呈する。断面形はやや深い皿状で、深さは約0.3mである。底面は平坦だが、最深部が南西に偏る。壁面の傾斜は緩やかだが、南西部はやや急になる。

埋土 6層に分層した。埋土全体にブロック土が混入することから、人為堆積と考えられる。埋土4層は炭化物層であり、それより上位層は土器片や炭化物を多く含む。

遺物出土状況 埋土中から土器1,382点が散在して出土した。IX期の土器片が多く、炭化物層(4層)中からもIX期高坏(7971)が出土した。

出土遺物 7965はⅦ期～Ⅷ期壺。胴部上半に三重の円形刺突文が認められる。7966はIX期壺。口縁部内湾し、端部を丸くおさめる。7967はIX期甕。口縁部がくの字に屈折し、わずかに内湾する。内側にやや膨らみ、外面にはハケ目が残る。内面はナデの後に非常に強くケズリを施し、ケズリが施される部位は極めて器壁が薄くなる。7968～7971はIX期高坏。7968は口縁部が直線的に外傾し、端部がわずかに外反する。内外面ともにヨコナデを施し、

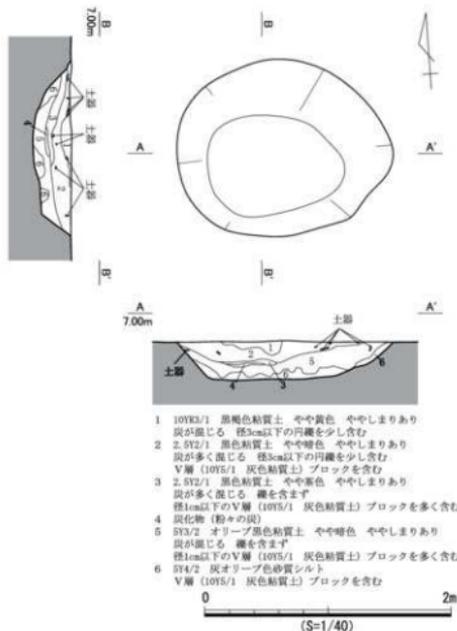


図2250 SK05828 遺構図

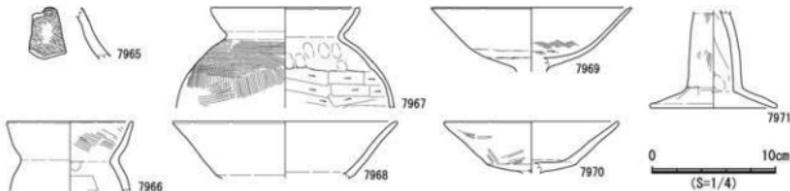


図2251 SK05828 遺物実測図

端部を丸くおさめる。7969は坏部が碗状を呈し、口縁端部を丸くおさめる。7970は平坦な坏底部から口縁部が直線的に外傾する。器面の摩耗が著しい。7971はエンタシス状に脚部中央部がやや膨らむ。強く屈曲して柄部が平坦に開き、端部を丸くおさめる。

時期 出土遺物の時期から、IX期と考えられる。

SK05829 (遺構：図 2253、遺物：図 2252)

検出状況 東部西側中央の遺構密集域に位置する。南側は調査区域外にあり、西側はSK05758に切られる。

形状 大部分が調査区域外になるため全形は不明である。底面は中央に向かって低くなり、最深部で深さ0.20mである。

埋土 2層に分層した。上下層ともにブロック土の混入することから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器432点が散在して出土した。土器はVI～VII期の小片が多い。

出土遺物 7972はVII期壺A類。頸部下方には粘土を貼付し、強いヨコナデによって貼付突帯を2段形成する。突帯下方には直線文、山形文が認められる。7973はVI期甕D2a類。口縁部が屈曲して下段が開き、上段が内傾して端部は外反する。7974はVII期高坏C4d類。やや内湾する口縁部を肥厚して内面に多条沈線を施文し、その間にヘラによる山形文2帯が認められる。7975はVII期高坏G3b類。矮小な坏底部から口縁部が屈曲して立ち上がり、内湾する。端部付近には多条沈線を施文する。内外面ともに丁寧なミガキを施す。

時期 VI期～VII期のSK05758に切られるが、出土遺物の時期からVI期～VII期と考えられる。

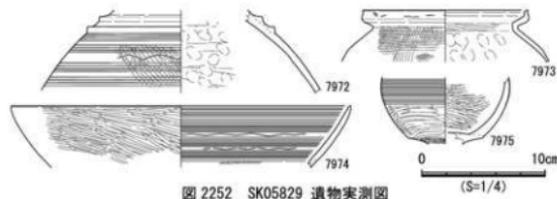


図 2252 SK05829 遺物実測図

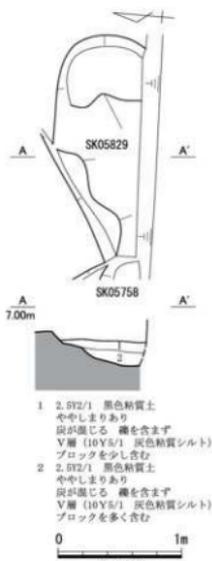


図 2253 SK05829 遺構図

SK05835 (遺構：図 2255、遺物：図 2254)

検出状況 東部西側中央の遺構密集域に位置する。SB537埋土上面で検出し、西側をSK05834に切られ、平面形は不明瞭であった。

形状 大半が調査区域外に及ぶため、全形は不明である。底面は凹凸があり、北西側が一段低くなる。深さは約0.2mで、壁面の傾斜はほぼ垂直である。

埋土 3層に分層した。中央が緩やかに窪む堆積である。

遺物出土状況 埋土中から土器87点が出土した。1層と2層の層界付近から、甕や壺の破片が横位

でまとまって出土した。

出土遺物 7976はV期～VI期壺A類。胴部上半に直線文と貝による刺突文が交互に4回施文される。

7977はV期甕B1a類。口縁部が外反し端部に顕著な平坦面を形成する。器面には縦位の細かいハケ目が残り、胴部下半には煤が付着する。口縁部周辺の内面はナデが認められるが、それ以下はケズリである。7978はVI期～VII期鉢A4c類。口縁部がやや肥厚して直線的に外傾する。端部はわずかに外反し、平坦面を形成する。

時期 VI期～VII期のSB537を切ることと出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。

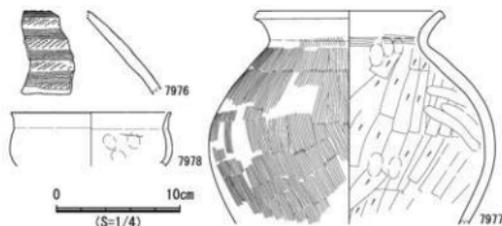


図 2254 SK05835 遺物実測図

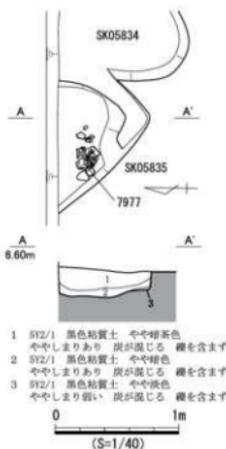


図 2255 SK05835 構構図

- 1 312/1 黒色粘質土・やや暗褐色
ややしまりあり 炭が混じる 礫を含まず
- 2 312/1 黒色粘質土・やや褐色
ややしまりあり 炭が混じる 礫を含まず
- 3 312/1 黒色粘質土・やや褐色
ややしまり弱い 炭が混じる 礫を含まず

SK05845 (構構：図 2257、遺物：図 2256)

検出状況 東部西側中央の遺構密集域に位置する。西側をSB539に、東側をSB541に切られ、平面形は不明瞭であった。底面は平坦であったが、底面で小穴を検出できなかったため土坑とした。

形状 北側は調査区域外にのび、周辺は他遺構と重複するため、平面形は不明である。深さは約0.1mで、底面は平坦であり、残存している壁面の傾斜は急である。

埋土 4層に分層した。全体的にブロック土の混入が認められ、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器192点、石器類1点が出土した。

出土遺物 7979はVI期～VII期壺H2a類。口縁部が外傾して立ち上がり、端部に向けて内湾する。端部には内傾面を形成する。胴部は最大径の位置が下がり、下膨れの形状を呈すると考えられる。7980はVI期～VII期器台B4類。受部が皿状というより碗状に近く、口縁部が内湾する。端部には粘土を貼付して下方に大きく拡張し、極めて幅広い平坦面を形成する。平坦面の中央部には多条沈線を施文し、クシによる羽状文をそれぞれ上下ともに施文する。脚部が付根から円錐状に開き、透孔が認められる。受部内面は丁寧なミガキ調整を施し、精緻な作りである。

時期 VI期～VII期のSB539とSB541に切られるが、出土遺物の時期からVI期～VII期と考えられる。

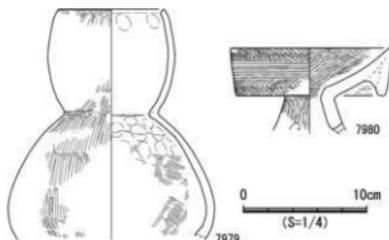


図 2256 SK05845 遺物実測図

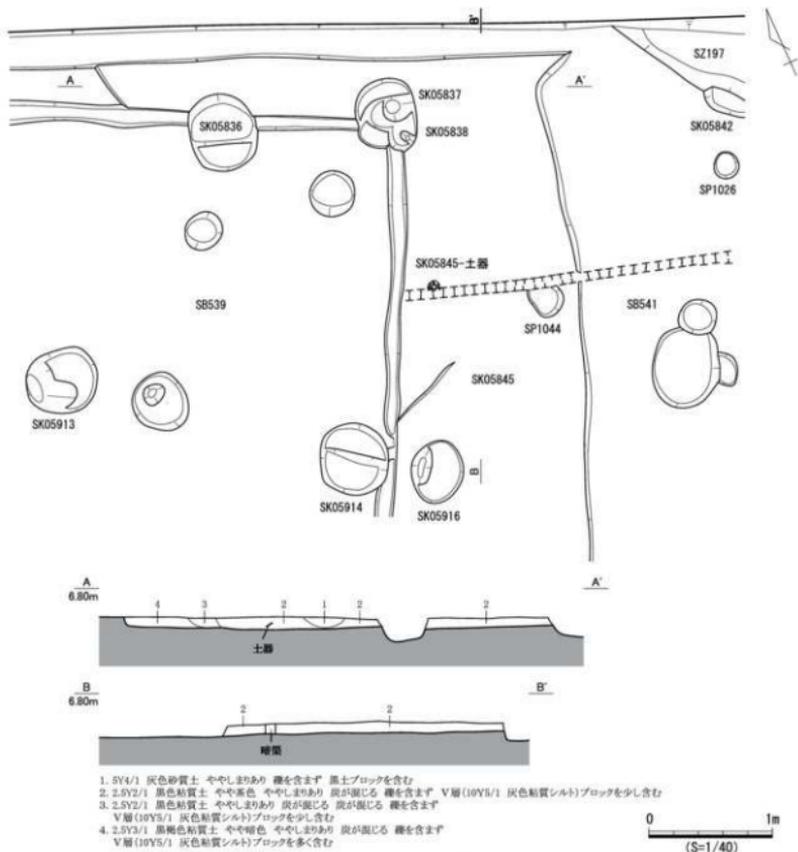


図 2257 SK05845 遺構図

SK05859 (遺構：図 2259、遺物：図 2258)

検出状況 東部西側中央の遺構密集域に位置する。V層上面での検出であったが、平面形は不明瞭であった。

形状 長軸長約 1.4m の不整楕円形を呈する。深さは約 0.2m で、底面は凹凸があり、壁面の傾斜は急である。

埋土 4層に分層した。全体的にブロック土が混入し、層界の凹凸も認められることから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器 118 点が散在して出土した。また、粘土塊も出土した。

出土遺物 7981はV期～VI期鉢B2類。口縁端部がやや内湾し、外面には粗いハケ目が残る。

時期 出土遺物の時期から、V期～VI期と考えられる。

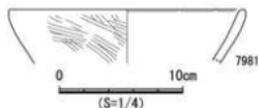


図 2258 SK05859 遺物実測図

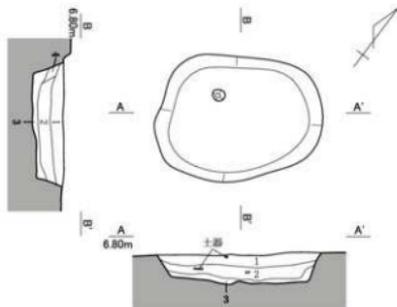
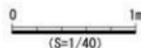


図 2259 SK05859 遺構図

- 1 2.SY2/1 黒色粘質土、ややしまりあり 炭が混じる 礫を含まず
V層(10V5/1 灰色粘質シルト)ブロックを含む
- 2 2.SY3/1 黒褐色粘質土、ややしまりあり 炭が混じる
径3cm以下の円礫を少し含む
10V15/3 には、灰色粘質土塊を少し含む
- 3 SY3/1 オリーブ黒色粘質土、ややしまりあり 礫を含まず
V層(10V5/1 灰色粘質シルト)ブロックを多く含む
- 4 2.SY1/1 黒褐色粘質土、ややしまりあり 礫を含まず
V層(10V5/1 灰色粘質シルト)ブロックを多く含む



SK05880 (遺構：図 2260、遺物：図 2261)

検出状況 東部西側中央の遺構密集域に位置する。SD1117の底面において検出し、平面形は比較的光明瞭であった。

形状 長軸長約0.5m、短軸長約0.4mの不整楕円形を呈する。深さは約0.1mであり、底面は平坦で、壁面の傾斜は緩やかである。

埋土 2層に分層した。ブロック土の混入が目立つことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器5点が出土した。VII期高坏(7982)の口縁部片が、底面にて横位で出土した。

出土遺物 7982はVII期高坏C4d類。やや内湾する口縁部が肥厚し、内面に多条沈線を施文する。端部に山形文1帯、多条沈線間には山形文2帯と対向山形文1帯が認められ、いずれもヘラによる施文である。

時期 出土遺物の時期から、VII期と考えられる。

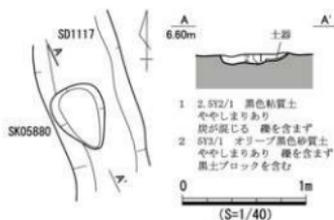


図 2260 SK05880 遺構図

- 1 2.SY2/1 黒色粘質土、ややしまりあり 炭が混じる 礫を含まず
- 2 SY3/1 オリーブ黒色粘質土、ややしまりあり 礫を含まず 黒土ブロックを含む

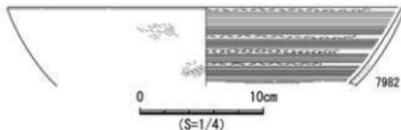


図 2261 SK05880 遺物実測図

SK05887 (遺構：図 2262、遺物：図 2263)

検出状況 東部西側中央の遺構密集域に位置する。V層上面において検出し、平面形は比較的光明瞭であった。

形状 長軸長約1.0m、短軸長約0.7mの、東西に長い長楕円形を呈する。断面形状は逆台形に近く、深さは約0.3mで、底面は平坦である。東壁面の傾斜は急で、西壁面にはわずかに平坦面がみられる。

埋土 4層に分層した。中央が緩やかに窪む堆積であるが、ブロック土の混入が多いことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器271点、木製品2点、炭化材・炭化物1点が出土した。

出土遺物 7983はV期～VI期鉢B2類。口縁部がほぼ直立し、端部には顕著な平坦面を形成する。7984はV期高坏B3a類。口縁部が大きく外反し、端部に凹面を形成する。7985は分割材を利用した細長い柱材。全体的に反っており、下端は2方向から削って平坦に加工している。

時期 出土遺物の時期から、V期～VI期と考えられる。

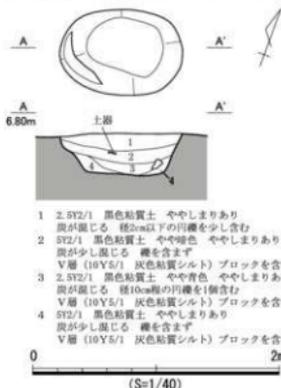


図 2262 SK05887 遺構図

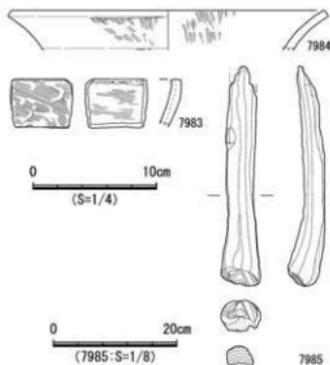


図 2263 SK05887 遺物実測図

SK05933 (遺構：図 2264、遺物：図 2265)

検出状況 東部西側中央の遺構密集域に位置する。SK05931底面で検出し、南側をSD1131とSK05990に切られる。

形状 長軸長約2.0m、短軸長約1.0mの不整長楕円を呈する。深さは約0.1mであり、底面は平坦で、壁面の傾斜は急である。

埋土 2層に分層した。上下層ともにブロック土が混入し、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器273点が散在して出土した。

出土遺物 7986、7987はVI期～VII期甕A3類。7986は口縁部が

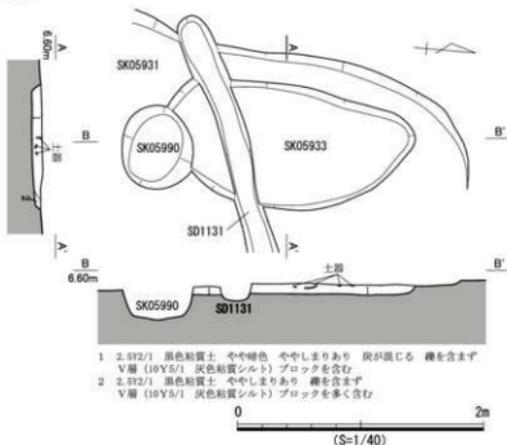


図 2264 SK05933 遺構図

- 2.5T2/1 黒色粘質土 やや褐色 ややしまりあり 炭が混じる 礫を含まず
V層 (10Y5/1 灰色粘質シルト) ブロックを含む
- 2.5T2/1 黒色粘質土 ややしまりあり 礫を含まず
V層 (10Y5/1 灰色粘質シルト) ブロックを多く含む

外反し、端部が屈曲して端部に顕著な平坦面を形成する。外面にもほぼ垂直な平坦面をもち、いずれにも強いナデ痕が残る。頸部は肥厚して外面には直立部位を作り出す。7987は明瞭な段をもって口縁部が屈折し、端部も強く屈曲する。端部は短く直立し、内傾する平坦面を形成する。外面には垂直な平坦面を形成し、そこには多条沈線を施文する。7988はⅥ期～Ⅶ期変B2類。口縁部が強く外反し、端部には顕著な平坦面を形成する。頸部はやや肥厚し、外面には煤が付着する。7989はⅥ期～Ⅶ期変C2類。口縁部がわずかに内湾し、端部には顕著な平坦面を形成する。端部及び外面には強いナデ痕が残る。

時期 出土遺物の時期から、Ⅵ期～Ⅶ期と考えられる。



図 2265 SK05933 遺物実測図

SK05943 (遺構：図 2266、遺物：図 2267)

検出状況 東部西側中央に位置する。SK05828に切られ、平面形は比較的明瞭であった。

形状 直径約0.3mの円形を呈し、深さは0.11mで底面は平坦である。

埋土 2層に分層した。ブロック土が多く混入することから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器6点が出土した。底面直上にて、Ⅴ期～Ⅵ期の甕脚部が逆位で出土した。

出土遺物 7990はⅤ期～Ⅵ期甕。脚部がハの字に開き、外面にはケズリ、内面にはユビナデ痕が顕著に認められ、端部を折り返す。外面には煤が付着する。

時期 IX期のSK05828に切られることと出土遺物の時期から、Ⅴ期～Ⅵ期と考えられる。

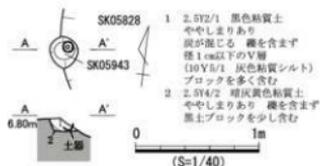


図 2266 SK05943 遺構図

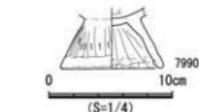


図 2267 SK05943 遺物実測図

SK05947 (遺構：図 2268、遺物：図 2269)

検出状況 東部西側中央に位置する。Ⅴ層上面における検出で、平面形は比較的明瞭であった。

形状 南側が調査区域外に及ぶため、全形は不明であるが、およそ北北西～南南東方向に主軸をもつ長楕円形を呈すると考えられる。深さは約0.5mであり、底面はやや凹凸がある。壁面は部分的な崩落によるためか、小さな平坦面が複数形成されている。

埋土 13層に分層した。埋土の大半を占める1～3層は水平な堆積であり、炭が混じる。壁面沿いの堆積層はブロック土の混入が目立ち、その多くは壁面崩落土と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器5,346点、木製品2点が出土した。遺存状況は良好とはいえないが、出土土器はⅧ期～Ⅸ期のものが多い。

出土遺物 7991はⅥ期～Ⅶ期壺。胴部上半に、直線文及びび刺突文が交互に2回ずつ施文される。7992はⅧ期～Ⅸ期壺。柳ヶ坪型壺で、口縁部の内外面に羽状文が認められる。7993～7997はⅨ期壺。7993は口縁部が大きく外反し、端部が強く屈曲してほぼ直立する。伊勢湾西岸地域からの搬入品の可能性

がある。7994は胴部が浅く、口縁部がやや内湾して大きく開き、丁寧なミガキが認められる。7995は口縁部が屈折してわずかに内湾気味に立ち上がり、大きく外傾して端部付近はやや外反する。口縁部は内外面ともにミガキ調整を施し、胴部外面にも同様にミガキが認められる。7996は口縁部下段が外反し、一度屈曲して上段がさらに外反する。端部が強く屈曲して直立し、外面に平坦面を形成する。外面に煤が付着する。7997は胴部が球形を呈し、外面にはミガキ調整を施す。内面はハケを施し、指頭圧痕が認められる。底部は平底でやや突出し、木葉痕が認められる。7998はⅦ期甕Ⅱ類。口縁部が屈折し、上段が大きく外反する。7999～8001はⅨ期甕。7999は口縁部がくの字に屈折するが、やや内湾気味で、端部がわずかに肥厚する。胴部の上半にはヨコハケが認められ、内面にはケズリが認められる。8000は口縁部が弱く屈曲し、端部には平坦面を形成する。頸部には沈線を1条巡らせ、外面には煤が付着する。8001は底部に穿孔が認められる。8002はⅦ期～Ⅸ期高坏。口縁部が直線的に外傾し、端部を尖らせる。8003、8004はⅨ期高坏。8003は平坦な坏底部から口縁部が外傾して立ち上がり、端部付近はやや外反する。外面の稜は明瞭だが、内面の段は消失する。8004は脚部が円錐状

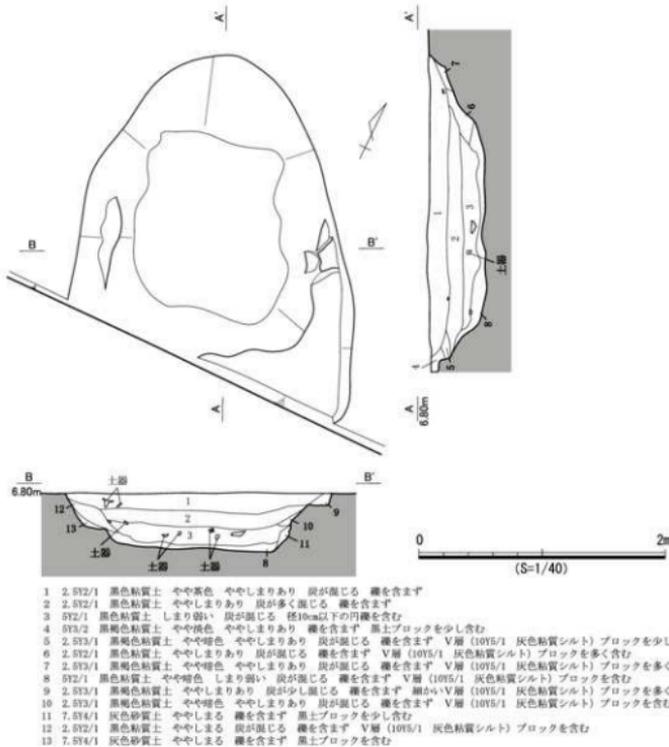


図 2268 SK05947 遺構図

に開き、裾部が強く外反する。

時期 出土遺物の時期からⅩ期と考えられる。

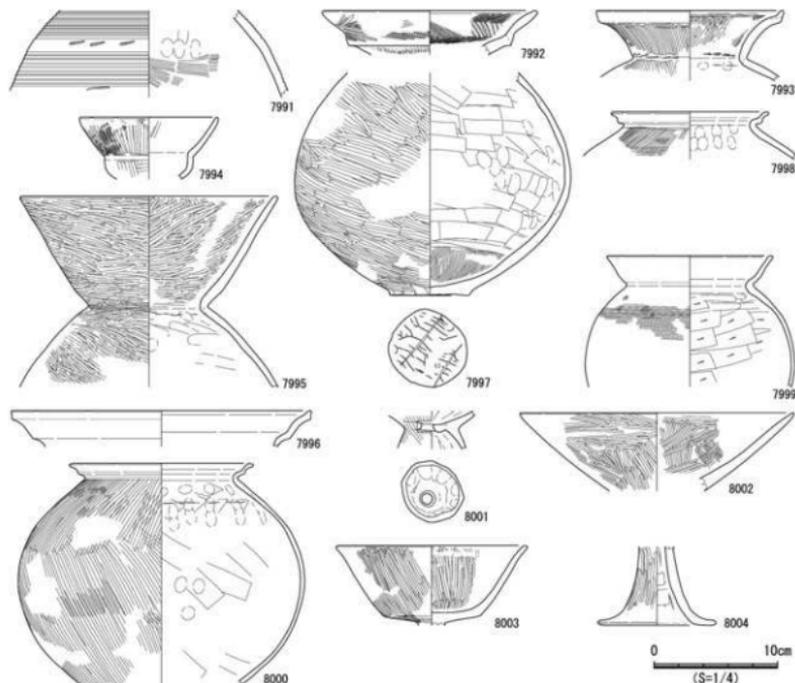


図 2269 SK05947 遺物実測図

SK05992 (遺構：図 2271、遺物：図 2270)

検出状況 東部西側中央の遺構密集域に位置する。SB540埋土上面で検出したが、平面形は比較的明瞭であった。

形状 直径約1.5mの不整形円形を呈する。深さは約0.3mで、底面は南東側が一段低くなり、壁面の傾斜は急である。

埋土 3層に分層した。層界に凹凸が見られることや2層にブロック土が混入することから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器540点、石器類1点が出土した。土器類は埋土全体から散在して出土した。

出土遺物 8005はⅤ期壺B1類。口縁部が大きく外反し、端部には粘土を貼付して顕著な平坦面を形成する。頸部は非常に強く屈折し、胴部にはハケ調整を施す。

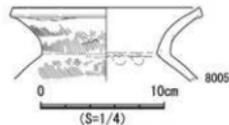


図 2270 SK05992 遺物実測図

時期 図示した遺物はV期であるが、IX期のSB540を切っていることから、IX期以降と考えられる。

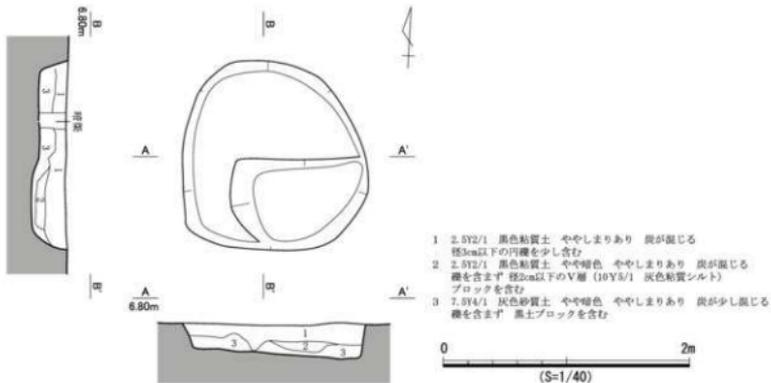


図 2271 SK05992 遺構図

SK06046 (遺構：図 2272、遺物：図 2273)

検出状況 東部西側南寄りの遺構密集域に位置し、平面形は比較的明瞭であった。

形状 長軸長約1.0mで、不整形円形を呈する。深さは約0.2mで、底面は凹凸があり、壁面の傾斜は急である。

埋土 2層に分層した。上下層ともにブロック土が混入することから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器46点、石器類1点が出土した。土器はVI期～VII期のものが含まれるが、いずれも細片であり図示していない。

出土遺物 8006は砥石。自然面の残る砂岩を素材とする。断面方形を呈し、3面の砥面には斜めから縦方向の線状痕が認められる。

時期 出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。

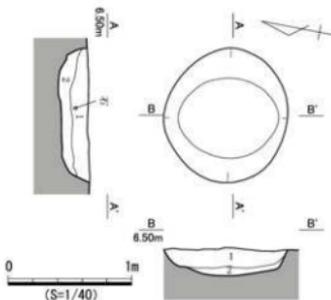


図 2272 SK06046 遺構図

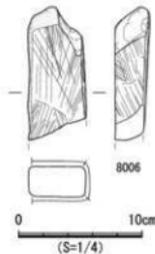


図 2273 SK06046 遺物実測図

SK06050 (遺構：図 2274、遺物：図 2275)

検出状況 東部西側南寄りの遺構密集域に位置し、SK06043を切る。検出当初は竪穴住居跡を想定したが、底面で小穴や壁溝は検出できなかった。なお、平面形は不明瞭であった。

形状 南北長約2.6mの隅丸方形を呈する。深さは0.1m未満と浅く、底面は平坦で、壁面の傾斜は緩やかである。なお、底面でSZ180を検出した。

埋土 単層であり、炭化物をわずかに含む。

遺物出土状況 埋土中から土器94点が出土した。出土土器は細片が多く、IV期、VI期～VII期の土器片が含まれる。IV期のもは、混入の可能性が高い。

出土遺物 8007はIV期壺A1類。口縁部が屈曲し、やや内傾して立ち上がる。端部には平坦面を形成し、外面には2条の凹線を施文する。

時期 出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。

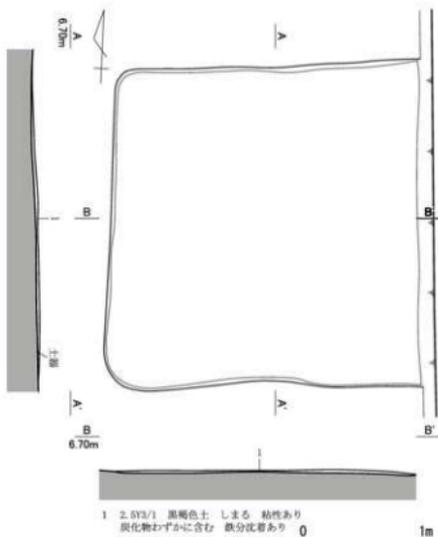


図 2274 SK06050 遺構図 (S=1/40)

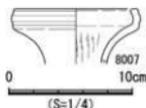


図 2275 SK06050 遺物実測図

SK06079 (遺構：図 2276、遺物：図 2277)

検出状況 東部西側南寄りの遺構密集域に位置し、東側は調査区域外にある。V層上面において検出し、他遺構との重複はなかったが、平面形はやや不明瞭であった。

形状 長軸長約1.3mの不整楕円形を呈する。深さは約0.2mで、底面はほぼ平坦であり、壁面の傾斜は緩やかである。

埋土 2層に分層した。ほぼ水平堆積であり、ブロック土が混入することから人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器210点が出土した。その時期はVI期～VII期のものが認められる。

出土遺物 8008はVI期～VII期壺D2a類。口縁部が短く屈曲する。8009はVII期壺D類。口縁部下段が外方に大きく引き出され、端部が肥厚する。8010はVII期高杯G3類。脚裾部が外反し、端部には平坦面をもつ。

時期 出土遺物の時期から、VI期～VII期頃と考えられる。

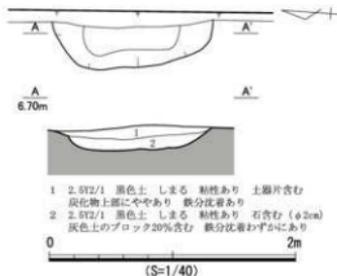


図 2276 SK06079 遺構図



図 2277 SK06079 遺物実測図

SK06086 (遺構：図 2278、遺物：図 2279)

検出状況 東部西側南寄りの遺構が密集する範囲に位置する。北側と西側は調査区域外に位置し、上部に攪乱溝があり、SK06098を切る。平面形は明瞭であった。

形状 大半が調査区域外に位置するため平面形は不明である。深さは約0.2mで、底面はやや丸みを帯び、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土 5層に分層した。下層にブロック土が含まれることから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土から土器53点が出土した。南東側の壁面沿いにて高坏坏部が内面を上にして斜位で出土し、他の遺物は埋土中から散在して出土した。

出土遺物 8011はⅦ期高坏。坏底部に平坦面は認められず、坏部形状はやや深い皿状を呈する。内面には段は認められないが、外面にはわずかに稜が認められる。端部を丸くおさめ、内外面ともに丁寧なミガキ調整を施す。

時期 出土遺物の時期から、Ⅶ期と考えられる。

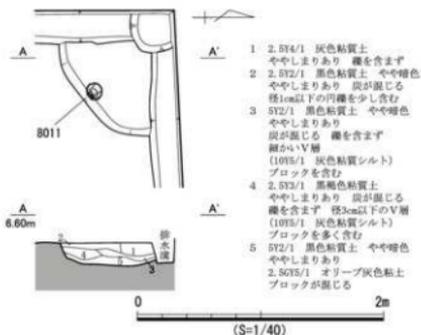


図 2278 SK06086 遺構図

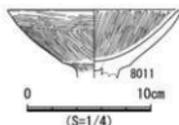


図 2279 SK06086 遺物実測図

SK06143 (遺構：図 2280、遺物：図 2281)

検出状況 東部西側南寄りの遺構が密集する範囲に位置する。上方にある攪乱底面で検出し、東側の埋土上方をSK06139とSK06144に切られている。平面形は不明瞭であった。

形状 長軸長約2.8mの不整形を呈する。深さは約0.1mで、底面はほぼ平坦で中央南寄りに段があり、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土 3層に分層した。全体的に炭を含み、ブロック土や長さ約20cmの亜円礫なども見られることから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器247点が散在して出土した。土器はⅣ期とⅦ期のものが出土した。本遺構周辺には方形周溝墓が多く分布することからⅣ期の遺物は混入の可能性が高く、最終埋没はⅦ期頃と考えられる。

出土遺物 8012はⅣ期壺A類。頸部に複数の直線文が認められる。8013はⅣ期甕A2類。口縁部が大きく開き、平坦な端部にはタタキが残る。胴部にはタタキの後にハケ調整を施す。8014はⅦ期器台C1類。口縁部が浅く皿状に開き、端部には顕著な平坦面をもつ。

時期 出土遺物の時期から、Ⅶ期と考えられる。

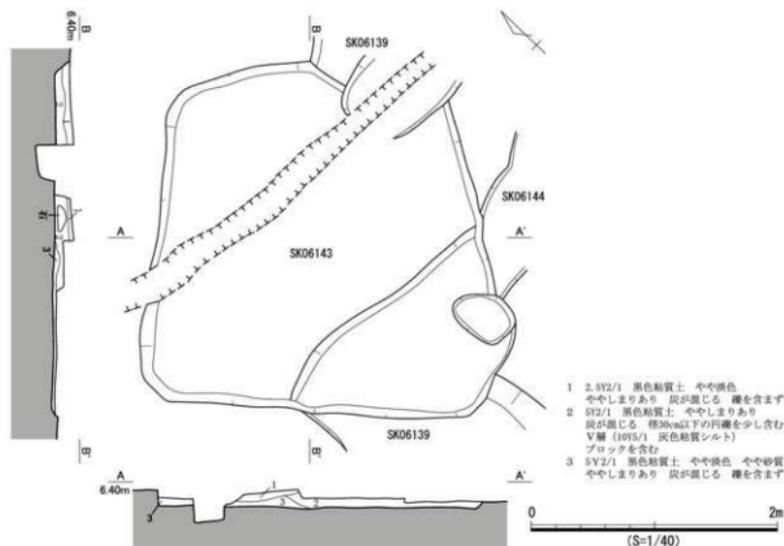


図 2280 SK06143 遺構図

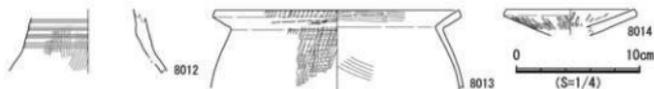


図 2281 SK06143 遺物実測図

SK6162 (遺構：図 2282、遺物：図 2283)

検出状況 東部西側南寄りの遺構が密集する範囲に位置する。SB520底面で検出し、平面形は不明瞭であった。なお、本遺構がSB520に伴う遺構である可能性は否定できないものの、本遺構の平面形がSB520の柱穴の位置から推定できる平面形よりも外側に出してしまうことから、単独の土坑と考えた。

形状 西側が調査区域外にのびるが、およそ不整形円形を呈する。底面は東側が浅く平坦で、西側は深く底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は緩やかである。遺構の西側では、底面よりやや高い位置で約50cm×30cmの範囲内で赤色顔料の広がりを確認した。顔料は2cm程度の厚みがあり、検出時には複数の小土器片が横位で顔料直上から出土した。また、その下層では顔料の位置が検出面からやや北側にずれて出土し、顔料とともに甕A類(8018)が出土した。

埋土 10層に分層した。赤色顔料は埋土中程に位置し、その上下にも赤色～赤褐色粒が含まれている。また、埋土は全体的にブロック土を含んでおり、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器422点が出土した。赤色顔料周辺以外の土器は散在して出土した。出土土器はVI期～VII期の小片が多い。

出土遺物 8015はVI期～VII期甕A3類。頸部がやや直立し、口縁部は外反する。端部付近で屈曲し、

内面にはナデによる凹面が形成され、端部外面には刺突を加える。頸部直下の胴部にも刺突文が認められる。8016はⅥ期～Ⅶ期甕B2類。口縁部が短く外傾し、端部にはわずかな平坦面を形成する。8017はⅥ期～Ⅶ期甕E1類。口縁部が短く外傾し、端部には外傾する平坦面をもつ。平坦面には刺突を加え、内側をわずかに拡張する。8018はⅥ期～Ⅶ期甕A2b類。口縁部が明瞭に受口状を呈する。口縁部は端部付近が強く屈曲して尖り気味となり、内面にはナデによる顕著な凹面を形成する。胴部や肩部の張りは弱く、胴部には文様は認められない。8019はⅥ期～Ⅶ期鉢A3a類。口縁部が短く外反し、端部付近で屈曲する。端部の断面が三角形状になるように、外傾する平坦面を形成する。胴部は最大径部が強く張り出す形状を呈する。8020はⅤ期～Ⅵ期高坏B3b類。坏底部から口縁部が大きく外反し、端部にはわずかに平坦面が認められる。内面の稜は不明瞭だが、外面の稜は極めて明瞭である。

時期 Ⅵ期～Ⅶ期のSB520に切られるが、出土遺物の時期からⅥ期～Ⅶ期と考えられる。

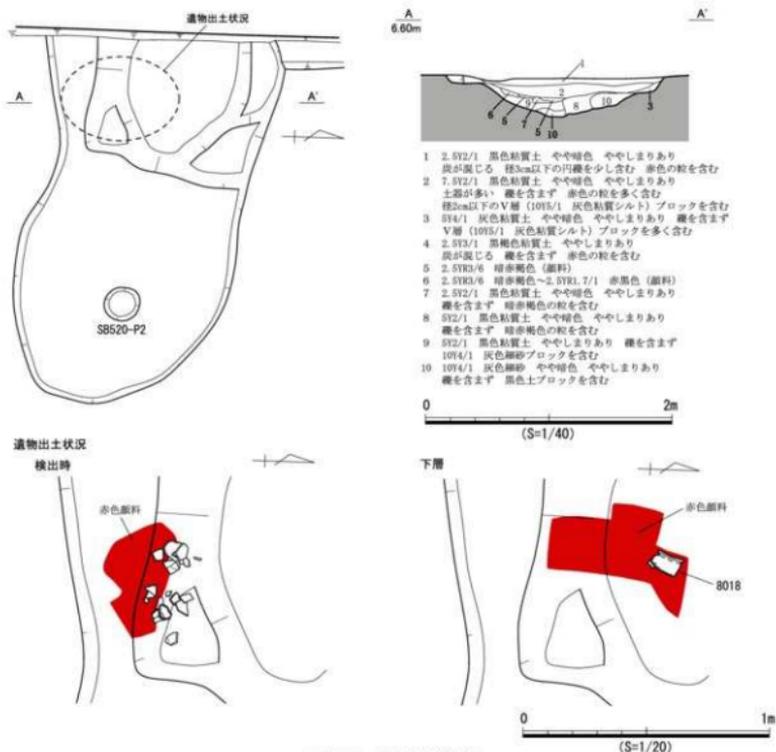


図 2282 SK06162 遺構図

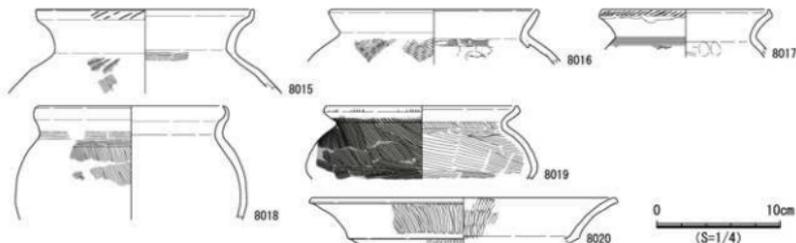


図 2283 SK06162 遺物実測図

SK06208 (遺構：図 2284)

検出状況 東部西側南寄りの遺構密集域に位置し、SK06196、SK06201に切られる。V層上面での検出であったが、平面形が漸移的でやや不明瞭であった。

形状 長軸長約1.9m、短軸長約0.9mの、東西に長い楕円形を呈する。深さは約0.5mで、底面は丸みを帯びる。壁面の傾斜は南北側が急、東西側が緩やかであり、全体としては舟底状を呈する。

埋土 4層に分層した。埋土の大半は黒褐色～黒色を呈するが、底面から壁面にかけては灰色土が堆積している。なお、この成因は不明である。

遺物出土状況 埋土中から土器16点が出土した。しかし、いずれも細片であり図示していない。

時期 遺構の重複関係や出土遺物から時期を推定することが困難であり、不明である。

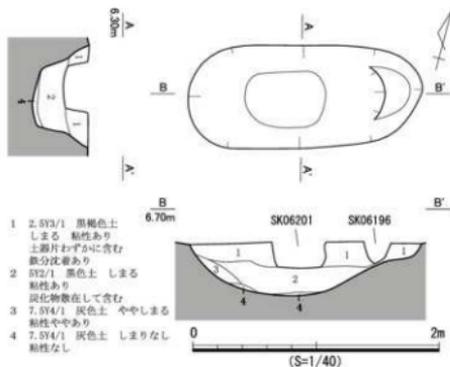


図 2284 SK06208 遺構図

SK06288 (遺構：図 2285、遺物：図 2286)

検出状況 東部西側南寄りの遺構密集域に位置する。SK06278底面に検出し、平面形は明瞭であった。

形状 直径約0.2mの円形を呈する。深さは約0.1mであり、底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は急である。

埋土 黒褐色土が単層で堆積する。

遺物出土状況 埋土中から土器10点、石器

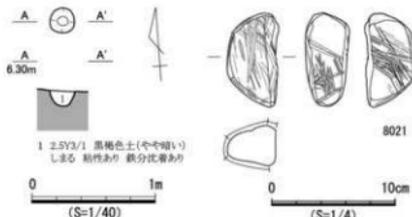


図 2285 SK06288 遺構図

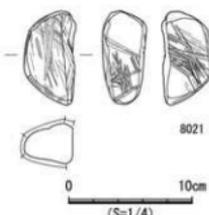


図 2286 SK06288 遺物実測図

類1点が出土した。

出土遺物 8021は砥石。いわゆる筋砥石で、複数の溝状の窪みや線状痕が認められる。

時期 出土遺物から時期は言及できないが、埋土の様相からV期以降と考えられる。

SK06293 (遺構：図2287、遺物：図2288)

検出状況 東部西側南寄りの遺構密集域に位置する。V層上面での検出だが、鉄分の沈着が著しく平面形は不明瞭であった。なお、溝状遺構の可能性もあるが、南側は調査区域外にのび、北側の調査区では確認できなかったことから、不整形の土坑と判断した。

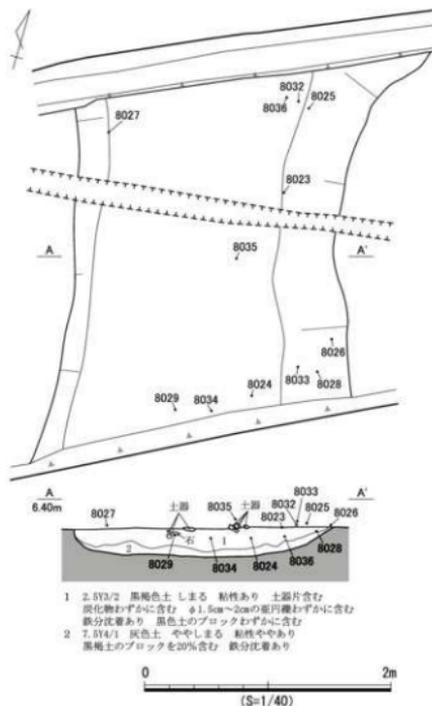
形状 幅約2.5mの南北方向に長い不整形を呈する。深さは最深部で0.23mであり、断面形状は皿状である。底面は広い平坦面を有し、北に向かって高くなっている。

埋土 2層に分層した。上下層ともにブロック土が混入することから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器780点、石器類2点が出土した。土器は上層を中心に出土し、比較的遺存状態がよい。また、その時期はV期～VII期のものが多く、IV期やVIII期～IX期の土器も含まれる。

出土遺物 8022はV期～VI期壺A1a類。口縁部が外反し、下方に拡張した端部には擬凹線が認められ

る。8023はVI期～VII期壺A5類。口縁部が大きく外反し、端部を下方に拡張する。内面は無文だが、端部には擬凹線が認められる。器面の摩耗が進み、文様の詳細や赤彩の有無は不明である。8024はVII期壺H2b類。内湾して長く立ち上がる口縁部には、端部直下から多条沈線が認められ、その間に山形文、対向山形文、羽状文などを加える。8025はIX期壺。柳ヶ坪型壺口縁部で、内面及び端部に羽状文が認められる。8026はV期～VI期甕B2類。口縁部が短く外反し、端部には顕著な平坦面をもつ。8027はVI期～VII期甕A3類。口縁部が短く外反し、端部付近がナデによってわずかに屈曲する。8028はVI期～VII期甕A4類。口縁部が短く屈曲して内面がわずかに内湾し、端部には外傾する平坦面を形成する。8029はVI期～VII期甕C2類。口縁部がくの字に屈曲し、わずかに内湾して開く。端部には平坦面をもつ。頸部外面には粘土を充填して直立部を作出する。8030、8031はVIII期甕D類。口縁部が大きく外方に開き、屈曲は痕跡程度に認められる。8032、8033はVII期甕D2類。



- 2.5V3/2 黒褐色土 しまる 粘性あり 土器片含む
灰化層わずかに含む 厚1.5cm～2cmの層内層わずかに含む
紋分沈着あり 藍色土のブロックわずかに含む
- 2.7V4/1 灰色土 ややしまる 粘性ややあり
黒褐色土のブロックを20%含む 鉄分沈着あり

図2287 SK06293 遺構図

8032は口縁部が強く屈曲し端部を欠損する。胴部にはヨコハケが残る。8033は器壁の薄い脚部がハの字に開く。8032と同一個体の可能性がある。8034はⅦ期高坏C4d類。内湾する口縁部内面に多条沈線を施し、その間に山形文、クシによる二重山形文などを加える。8035はⅧ期高坏。矮小な坏底部から口縁部が開く。脚部が付根から円錐状に大きく外反し、透孔を3方向に配置する。8036はⅤ期器台A類。受部は大きく開き、中空の脚部が直立する。

時期 出土遺物の時期からⅤ期以降に掘削され、Ⅶ期～Ⅸ期頃に埋没したと考えられる。

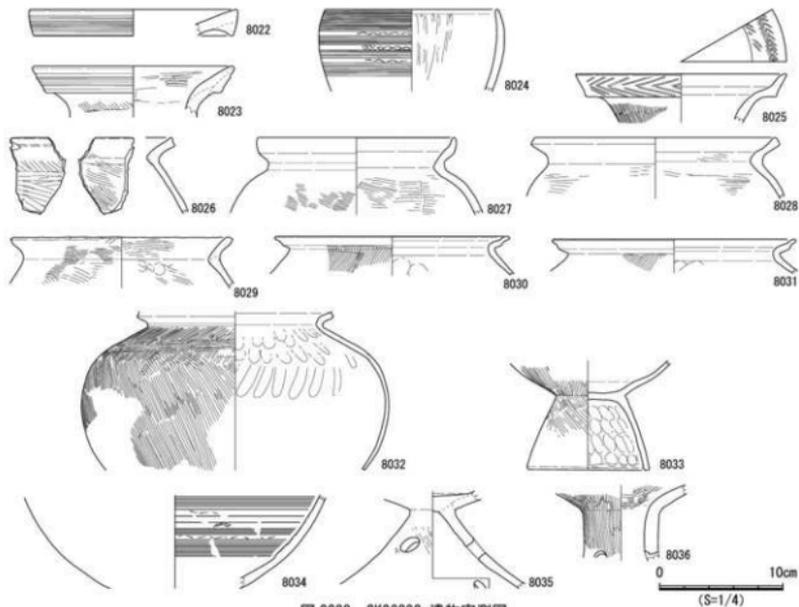


図 2288 SK06293 遺物実測図

SK06308 (遺構：図 2289、遺物：図 2290)

検出状況 東部西側南寄りの遺構密集域に位置し、南端は攪乱により失われている。検出面にて炭化物や土器片が表出していたが、平面形はやや不明瞭であった。

形状 長軸長約1.5mの不整楕円形を呈する。深さは約0.1mで、底面は平坦であり、壁面の傾斜は緩やかである。

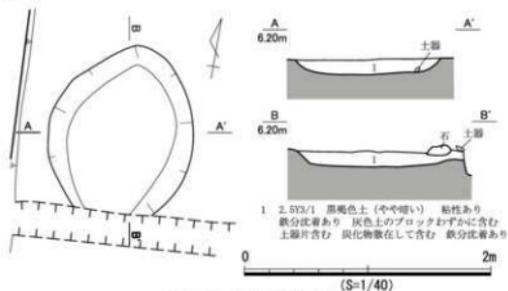


図 2289 SK06308 遺構図

1 2.5%₁ 黄褐色土(やや暗い) 粘性あり
 鉄分沈着あり 灰色土のブロックわずかに含む
 土器片含む 炭化物散在して含む 鉄分沈着あり

埋土 単層である。全体的に炭化物を含み、ブロック土が混入していることから人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器291点、石器類1点(砥石8037)が出土した。土器はⅥ期～Ⅶ期のものが含まれており、検出面にて砥石(8037)が横位で出土した。

出土遺物 8037は砥石。凝灰質砂岩の垂円礫を利用し、部分的に自然面が残っている。砥面は5面認められ、そのうち2面は

緩やかに湾曲している。砥面間の稜線付近や自然面と砥面との境界付近にまとまって敲打痕が認められ、砥面には縦から斜め方向の線状痕が残る。また、わずかに煤が付着している。

時期 出土遺物の時期から、Ⅵ期～Ⅶ期と考えられる。

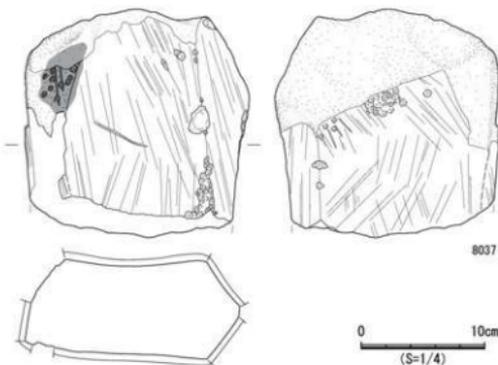


図 2290 SK06308 遺物実測図

SK06335 (遺構：図 2291、遺物：図 2292)

検出状況 東部西側南寄りの遺構密集域に位置する。東側をSD1192に、南側をSD1189に、北側をSK06306とSK06307に切られる。Ⅴ層上面での検出だが、鉄分の沈着が著しく平面形は不明瞭であった。なお、上部が削平されていると判断し、浅い土坑とした。

形状 大半が調査区外に位置しており、東辺と南辺は他遺構に切られるため、平面形は不明である。深さは約0.1mであり、底面はほぼ平坦で、壁面の傾斜は緩やかである。

埋土 2層に分層した。円礫をわずかに含み、ブロック土が混入することから人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器2,424点、石器類2点が出土した。土器は散在して出土し、Ⅶ期～Ⅸ期のものが多い。なお、北東側の1層と2層の層界から、粘土塊が出土した。

出土遺物 8038はⅥ～Ⅶ期壺A1a類。口縁部がわずかに段をもって外反し、端部を下方に拡張する。内面には文様は認められず、端部には擬凹線を施文する。8039はⅦ期壺A類。器面の摩耗が著しいが、わずかに残る直線文帯の間に、クシによる大振りの山形文が認められる。8040はⅦ～Ⅷ期壺A類。口縁部を欠損する。頸部がわずかに外反し、胴部との境には貼付け突帯を形成する。突帯以下に直線文、波状文、直線文の順に施文し、最下段に刺突を加える。それ以下は無文帯となるが、全面に赤彩を施す。肩部の張りが弱く、胴部はおよそ球形を呈し、その最大径はほぼ中央にある。8041、8042はⅨ期壺。8041は柳ヶ坪型壺の口縁部。8042は二重口縁壺に類似するが、外反する端部の直下に粘土を貼付して二重口縁状の形状に似せている。口縁部が外傾して開き端部を丸くおさめる。8043はⅤ期～Ⅵ期壺A2b類。口縁部が屈折し、端部付近で屈曲して直立する。端部にはやや内傾する平坦面をもち、下端には刺突を施す。8044はⅥ期～Ⅶ期壺A3類。口縁部が屈曲して直立し、端部には内傾する平坦

面をもつ。8045はⅦ期甕D2b類。脚部を欠損する。口縁部が屈曲し、下段が強く外方に引き出される。上段の屈曲は明瞭で内面には平坦面を形成し、直立して端部がわずかに外反する。胴部最大径は頸部から3分の1のあたりに位置し、やや肩が張る。8046はⅣ期鉢。径の大きい透孔をもった台付鉢である。脚裾部が極端に肥厚し、端部を丸く仕上げる。端部直上の外面に2条の凹線が認められる。8047はⅦ～Ⅷ期高坏C類。坏底部から脚部が円錐状に開く。穿孔は1穿孔1組3方向で、2段に千鳥状に配置する。

時期 Ⅶ期以降のSD1189に切られるが、出土遺物の時期からⅦ期～Ⅸ期と考えられる。

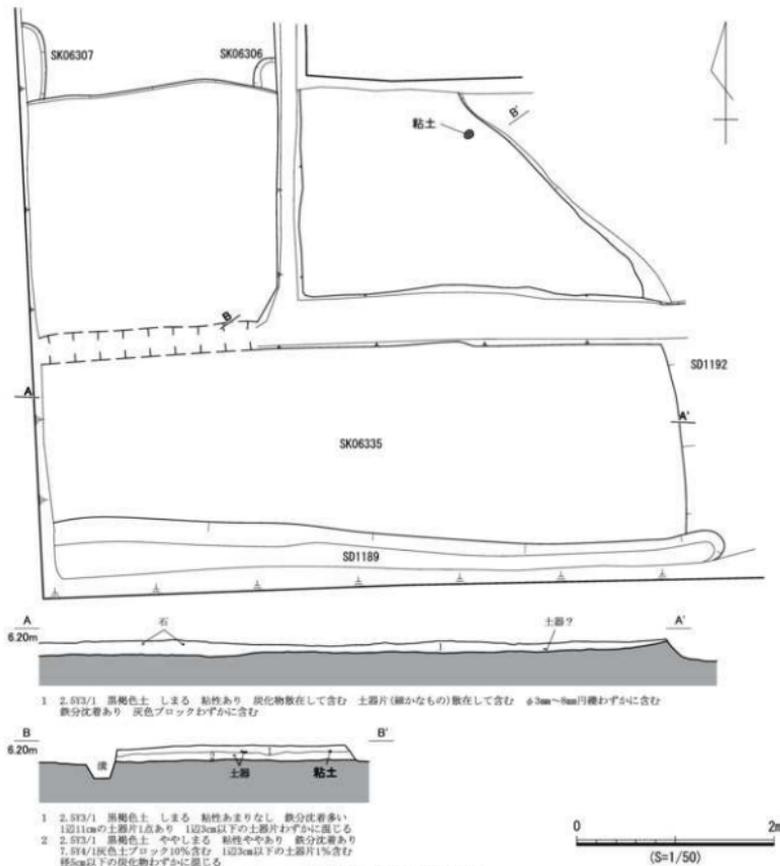


図 2291 SK06335 遺構図

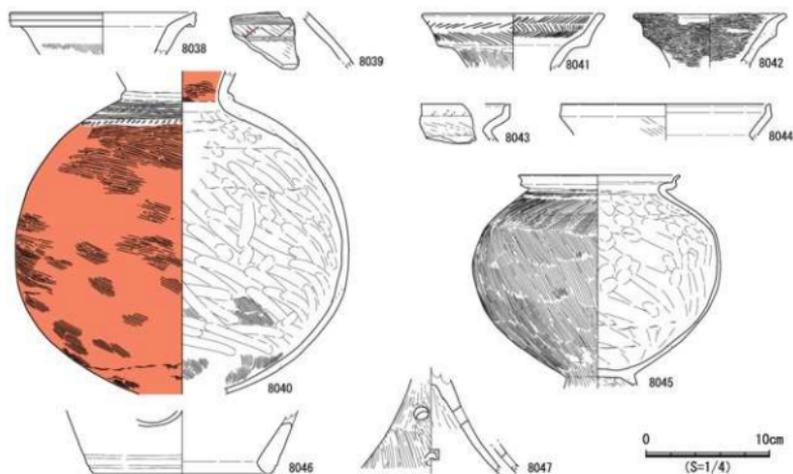


図 2292 SK06335 遺物実測図

SK06354 (遺構：図 2293、遺物：図 2294)

検出状況 東部西側南寄りに位置し、南側は調査区域外にのびる。西側はSD1154やSD1169に、東側はSB558に切られ、西側でSK06347に切られる。遺構の重複が著しく、平面形は不明瞭であった。

形状 規模は不明であるが、北辺と東辺が直線的にのび、直角気味に屈曲することから、全体形はおよそ方形を呈すると考えられる。深さは約0.2mであり、底面は凹凸がある。

埋土 単層である。炭化物や土器片を多く含み、ブロック土の混入が認められることから人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器1,769点が散在して出土した。Ⅵ期～Ⅶ期の土器片を多く含み、Ⅳ期とⅧ期の土器片もわずかに含む。Ⅳ期の土器はSD1154からの混入の可能性がある、Ⅷ期の土器も本遺構がⅥ期～Ⅶ期のSB558に切られることから混入の可能性がある。

出土遺物 8048はⅣ期壺A1類。口縁部が大きく開き、屈曲して直立する。端部には顕著な平坦面を形成し、外面には3条の明瞭な凹線が認められる。頸部には2条の凹線が認められる。8049はⅥ期～Ⅶ期甕A2b類。口縁部がナデによって屈曲し、内面に明瞭な凹面を形成して直立する。口縁端部には平坦面を形成し、わずかに外方に拡張する。8050はⅦ期甕D2b類。口縁部の屈曲が弱く、外方に大きく開く。8051はⅦ期高坏D2類。口縁部が大きく開き、端部付近が屈曲して直立する。端部には平坦面を形成し、内外面ともにミガキによる調整を施す。8052はⅦ期高坏D5類。口縁端部に内傾面があり、その面に沈線を施文し、その直下に連弧文の施文が認められる。8053はⅦ期高坏G3c類。口縁部が内湾し、外面には精緻な文様が認められる。端部直下には多条沈線を施文し、下方にはクシによる刺突文と山形文を交互に配置して、その間に沈線を1条ずつ加える。8054はⅧ期高坏。坏底部から口縁部が大きく開き、底部内面の段がわずかに認められる。8055は貝輪を似せて作ったと考えられる土製品で、時期は不明である。幅広の板上に深く明瞭な線描が認められる。断面形は台形で、

外側に向かって薄くなる。また、現状では上端が幅狭で下端が幅広である。

時期 VI期～VII期のSB558に切られるが、出土遺物の時期からVI期～VII期と考えられる。

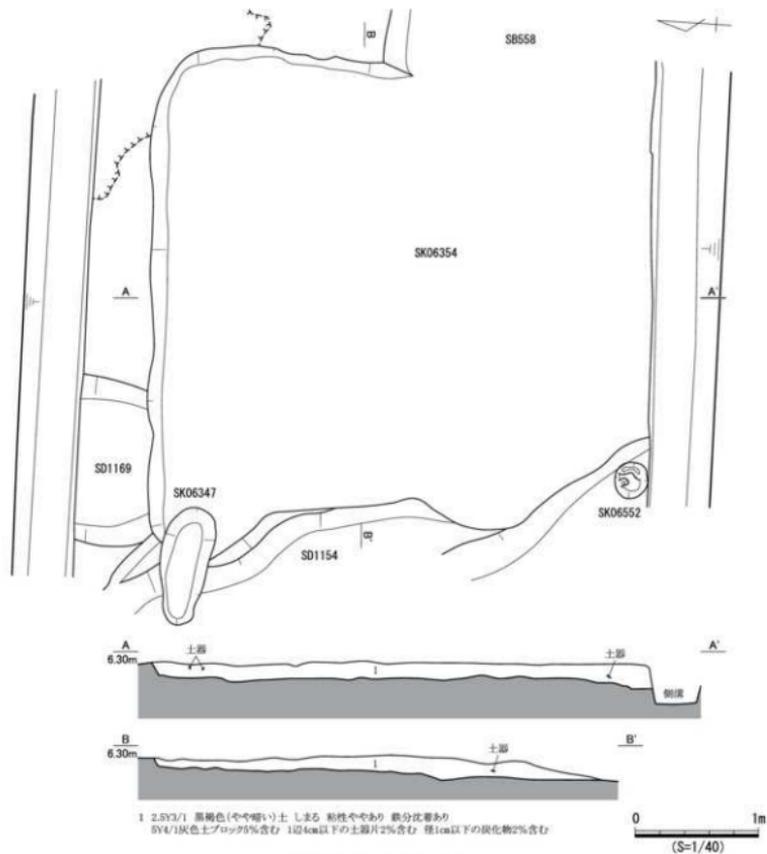


図 2293 SK06354 遺構図

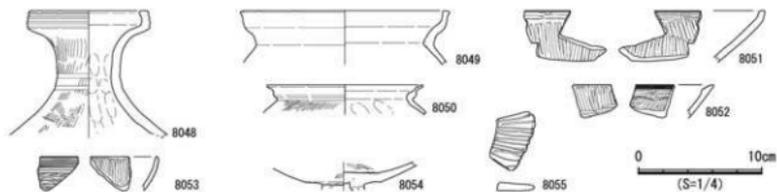


図 2294 SK06354 遺物実測図

SK06357 (遺構：図 2296、遺物：図 2295)

検出状況 東部西側南寄りに位置し、西側でSK06354に、南側でSB558に切られ、平面形は不明瞭であった。

形状 規模や形状は不明であるが、東辺は直線的にのびている。深さは約0.2mであり、底面はほぼ平坦である。

埋土 埋土は4層に分層した。ブロック土の混入が多く、層界の凹凸も認められることから人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器1,290点、石器類3点が出土した。VI期～VII期の土器片を多く含むが、細片が多く図示していない。

出土遺物 8056、8057はいずれも凝灰岩製の砥石。8056は砥面が7面確認でき、表面には部分的に煤が付着している。8057は大半が割れているが、表面に砥面、裏面に自然面が残る。

時期 VI期～VII期のSB558とSK06357に切られるが、出土遺物の時期からVI期～VII期と考えられる。

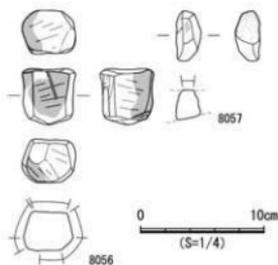


図 2295 SK06357 遺物実測図

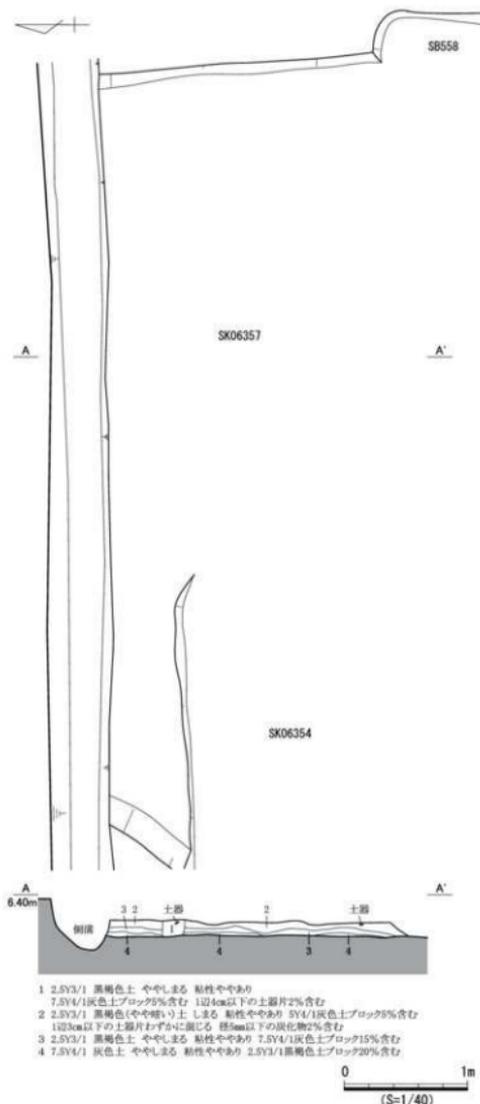


図 2296 SK06357 遺構図

SK06365 (遺構: 図 2297、遺物: 図 2298)

検出状況 東部中央南寄りに位置する。他遺構との重複はなく、平面形は明瞭であった。

形状 長軸長約0.3mの不整円形を呈する。深さは約0.3mであり、底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は南側がほぼ垂直で、北側がやや急である。

埋土 3層に分層した。ブロック土が混入し、残りのよい遺物が含まれることから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器30点が出土した。埋土3層から、残りの良い甕の破片が出土した。

出土遺物 8058はV期～VI期斐A2b類。口縁部が強いナデとともに短く強く屈曲する。内面には凹面を形成し、端部にはわずかな平坦面をもつ。頸部直下には4条からなる直線文を施文し、下方にも同様の波状文を施文する。胴部下半に煤が付着する。

時期 出土遺物の時期から、V期～VI期と考えられる。

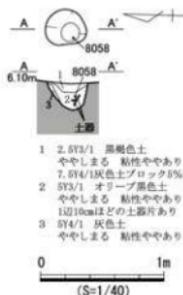


図 2297 SK06365 遺構図

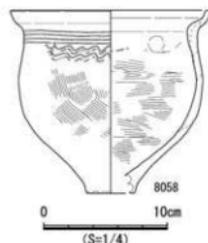


図 2298 SK06365 遺物実測図

SK06376 (遺構: 図 2299、遺物: 図 2300)

検出状況 東部中央南寄りに位置する。他遺構との重複はなく、平面形は明瞭であった。

形状 長軸長約0.3mの不整楕円形を呈する。深さは約0.3mであり、底面はほぼ平坦で、壁面の傾斜は急である。

埋土 3層に分層した。東側が窪む堆積であり、ブロック土の混入が多いことから人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器48点が出土した。1層中から手捏ね土器が2点出土した。

出土遺物 8059、8060はともにVI期～VII期手捏ね土器E類で、器高、形状が酷似する。底部がやや突出気味で、内側はやや窪む。胴部はわずかに内湾して立ち上がり、口縁端部は強く屈曲して水平となる。8059の器面には、工具の圧痕、ハケによる調整痕が認められる。

時期 出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。

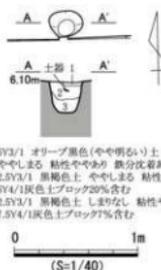


図 2299 SK06376 遺構図

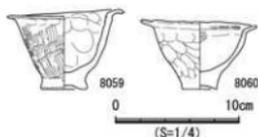


図 2300 SK06376 遺物実測図

SK06381 (遺構: 図 2301、遺物: 図 2302)

検出状況 東部中央南寄りに位置する。他遺構との重複はなく、平面形は明瞭であった。

形状 長軸長約0.4mの不整楕円形を呈する。深さは約0.3mであり、底面は丸く、壁面の傾斜は比

較的急である。

埋土 3層に分層した。西側に傾斜する堆積であり、ブロック土の混入が目立つことから人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器20点が出土した。2層中からV期の甕B類(8061)がやや大きな破片の状態でも出土した。

出土遺物 8061はV期甕B1a類。頸部の屈曲は弱く、口縁部が外反する。端部に平坦面をもち、内面にはヨコナデによるわずかな凹面が認められる。

時期 出土遺物の時期から、V期と考えられる。

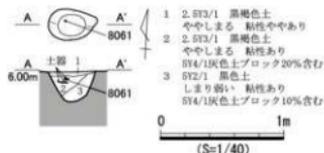


図2301 SK06381 遺構図

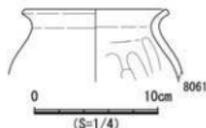


図2302 SK06381 遺物実測図

SK06476 (遺構：図2303、遺物：図2304)

検出状況 東部中央南寄りのSD0381の西肩部において、SD0381-5層掘削後に同7層上面にて検出した。検出時にすでに遺物が集中して出土しており、精査したところ、不明瞭ながら平面形を確認できたため土坑と判断した。

形状 東部はSD0381埋土に切れ全形は不明であるが、平面形は概ね南北方向に主軸をもつ不整形円形を呈すると考えられる。残存高約0.1mで、底面は平坦であり、壁面の傾斜は緩やかである。

埋土 2層に分層した。埋土中にブロック土は確認できなかったが、ほぼ完形に復元できる土器3個体がまとまって出土したことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器322点、石器類1点が出土した。ほぼ完形に復元できる甕3個体が重なるように出土し、そのうち甕D類

(8063)は口縁部を南側に向けて横位で出土した。

出土遺物 8062、8063はともにVI期甕D1a類。口縁部の屈曲がきわめて明瞭で、上段はほぼ垂直に立ち上がる。端部は短く外反し、外面には刺突を加える。最大径の位置は胴部中央より上方に寄り、肩が張る。脚部は直線的に開き、裾部に折り返しは認められない。8062の外面には粗いハケ目が残るが、内面にはハケ調整痕は一部に認められるのみである。8063は内外面ともにハケ目が残るが、内面はハケの後にナデ調整を施す。

8064はVI期甕D1類。脚部がハの字

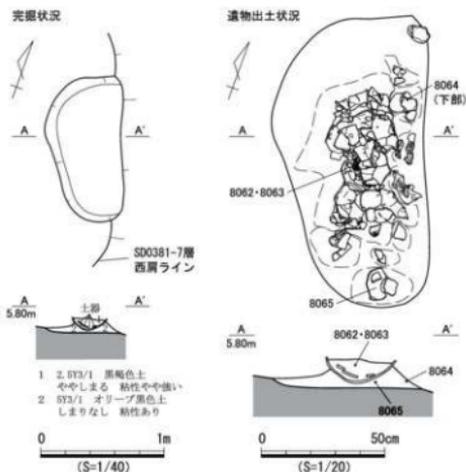


図2303 SK06476 遺構図

に開き、胴部には粗いハケ目が残る。8065はVI期甕B4類。屈曲部内面は稜をもって強く外反するが、外面の外反はゆるやかである。端部を丸くおさめる。外面には全体に粗いハケ目残り、下方3分の2の範囲には煤の付着が顕著である。脚部はハの字に開き、裾部付近はわずかに内湾する。最大径の位置は胴部中央よりやや下がり気味となる。

時期 出土遺物の時期から、VI期と考えられる。

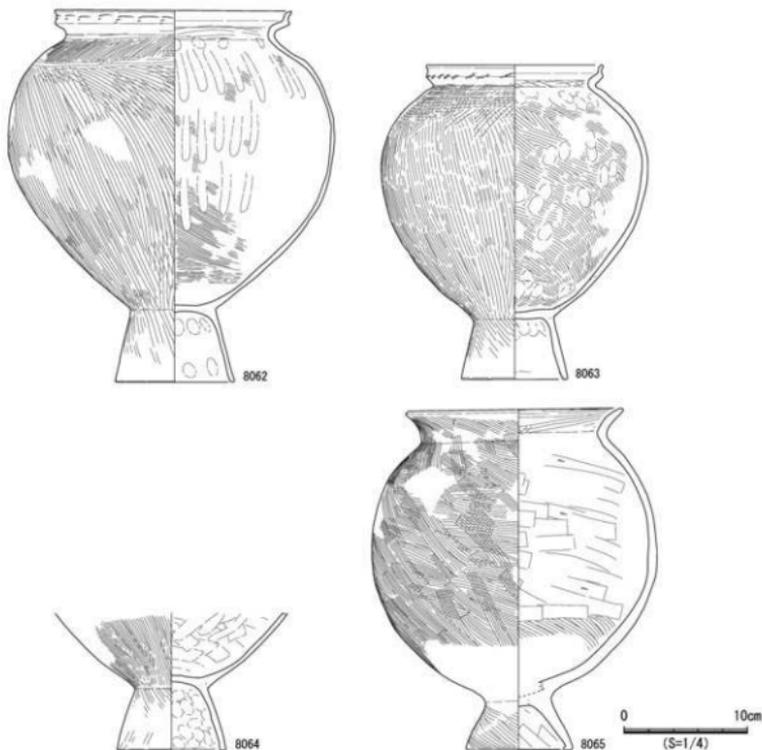


図 2304 SK06476 遺物実測図

SK06504 (遺構：図 2305、遺物：図 2306)

検出状況 東部中央南寄りの、SD0381西側に位置する。SD1212埋土上面で検出し、平面形は明瞭であった。

形状 長軸長約1.2mで、北西-南東方向に主軸をもつ不整楕円形を呈する土坑である。深さは約0.3mで、底面は全体的に丸みを帯びているが、部分的に凹凸がある。壁面の傾斜はおおよそ急であるが、南側のみやや緩やかである。

埋土 5層に分層した。底面及び壁面沿いにブロック土の堆積が目立ち、層界の凹凸も認められるこ

とから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器416点が散在して出土した。土器の多くはⅧ期～Ⅸ期のものであり、それ以前の土器もわずかに出土した。

出土遺物 8066はⅦ期～Ⅶ期変D類脚部。8067、8068はⅧ期変D類。口縁部が屈曲して大きく開く。8067は端部を肥厚する。8069はⅨ期変。口縁部が開き、屈曲して直線的に立ち上がる端部を丸くおさめ、外面には煤が付着する。

時期 出土遺物の時期から、Ⅷ期～Ⅸ期と考えられる。

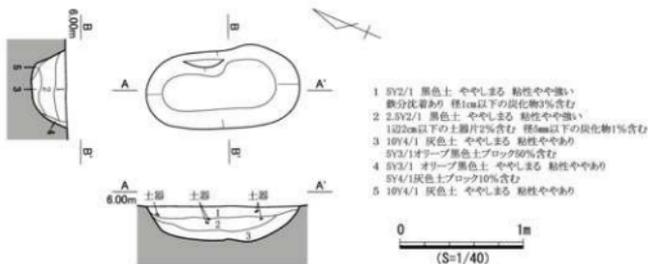


図 2305 SK06504 遺構図

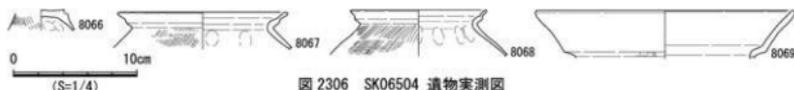


図 2306 SK06504 遺物実測図

SK06507 (遺構：図 2307、遺物：図 2308)

検出状況 東部中央南寄りに位置する。V層上面で検出し、平面形は明瞭であった。

形状 長軸長約0.4mの不整楕円形を呈する。深さは約0.2mで、底面は緩やかに丸みを帯び、壁面の傾斜は急である。

埋土 3層に分層した。炭化物を含み、2層中にブロック土が混入するが、その成因は不明である。

遺物出土状況 埋土中から土器24点が出土した。その多くは細片であるが、1層直下からⅦ期～Ⅶ期の斐脚部片(8070)が逆位で出土した。

出土遺物 8070はⅦ期

～Ⅶ期変。器壁の厚い

脚部が短くハ字に開

き、脚端部を丸く収める。

時期 出土遺物の時期

から、Ⅶ期～Ⅶ期と考

えられる。

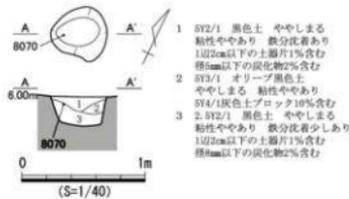


図 2307 SK06507 遺構図

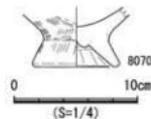


図 2308 SK06507 遺物実測図

SK06511 (遺構：図 2309、遺物：図 2310)

検出状況 東部中央南寄りに位置し、SD1215の底面で検出した。検出時には高坏(8071)が見えており、精査後に遺構の平面形を確認したが、やや不明瞭であった。

形状 長軸長約0.3mの不整形を呈する。深さは約0.1mで、底面は平坦であり、壁面の傾斜は急である。

埋土 3層に分層した。中央が緩やかに窪む堆積であるが、1・2層中にブロック土の混入が顕著であることから人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器7点が出土した。ほぼ完形のV期高坏H1類(8071)が横位で出土しており、埋土が人為堆積と考えられることから、高坏は原位置を保っている可能性が高い。

出土遺物 8071はV期高坏H1類。坏部が碗状を呈し、端部を丸くおさめる。付根から脚部が円錐状に開き、裾部は大きく外反する。付根から直線文が2帯認められ、その間に斜位の刺突文を施す。上段の直線文中には何らかの工具による横位の痕跡が認められる。口縁端部にはナゲが認められるが、それ以外の部位には丁寧なミガキを施す。

時期 VI期～VII期のSD1215より先行することと出土遺物の時期から、V期と考えられる。

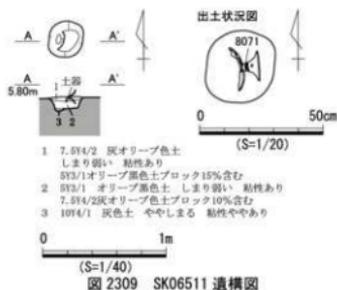


図 2309 SK06511 遺構図

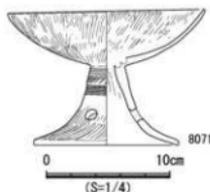


図 2310 SK06511 遺物実測図

SK06517 (遺構：図 2311、遺物：図 2312)

検出状況 東部中央南寄りに位置し、北側と西側は調査区域外にのびている。V層上面で検出したが、鉄分の沈着が著しく平面形はやや不明瞭であった。

形状 東辺は直線的にのびるが、全形や規模は不明である。深さは約0.1mであり、底面は西側に向かって緩やかに傾斜している。

埋土 3層に分層した。埋土全体にブロック土が混入し、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器47点、石器類2点が出土した。土器の多くはVII期のもので、わずかにIV期のものが混入している。また、砥石も出土した。

出土遺物 8072はIV期変A2類。口縁部がくの字に屈折して端部に平坦面をもち、タキを加える。口縁部内面にはハケを施す。8073、8074はVII期変D2b類。8074は口縁部が屈曲して上段がやや長く外反し、端部が肥厚気味である。8075は砥石。大半は割れているが、垂円礫の一面を

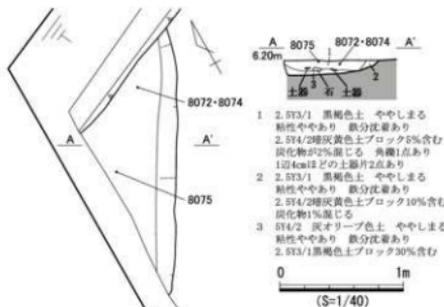


図 2311 SK06517 遺構図

底面として利用している。

時期 出土遺物の時期から、Ⅶ期と考えられる。

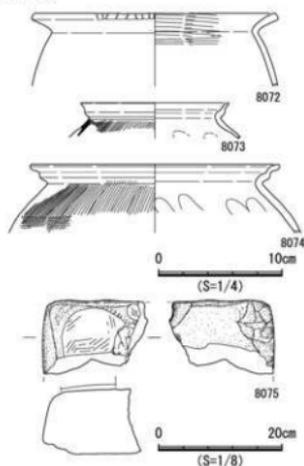


図 2312 SK06517 遺物実測図

SK06518 (遺構：図 2313、遺物：図 2314)

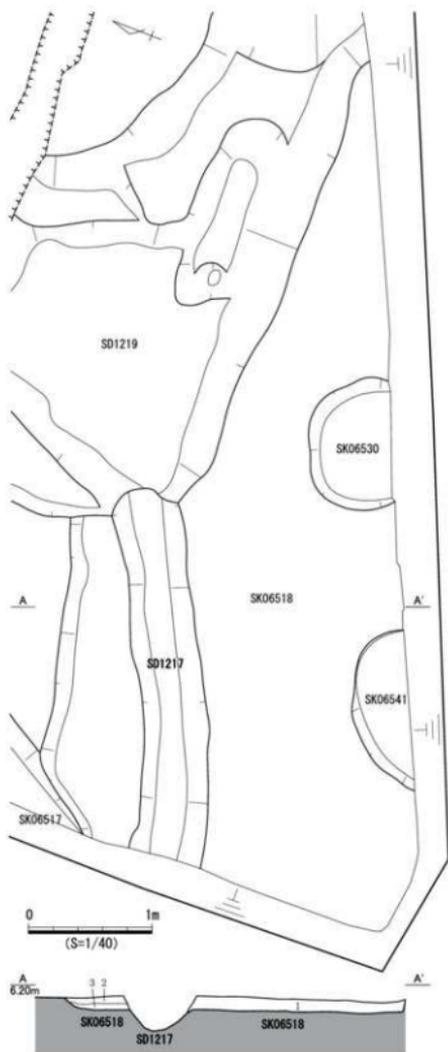
検出状況 東部中央南寄りに位置し、南側と西側は調査区域外にのびている。SD1217、SD1219、SK06517、SK06530、SK06541などに切られ、平面形は不明瞭であった。

形状 北辺は直線的にのびるが、全形や規模は不明である。深さは約0.1mであり、底面はほぼ平坦で、壁面の傾斜は緩やかである。

埋土 3層に分層した。埋土の多くは黒褐色土であるが、SD1217の北側のみにブロック土の混入が目立つため、別遺構が存在していた可能性もある。

遺物出土状況 埋土中から土器719点が出土した。土器の多くはⅦ期に属する。

出土遺物 8076はⅦ期甕D2b類。8077はⅦ期甕D類。いずれも同一個体の可



- 1 2.SY3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 鉄分沈着あり
- 2 2.SY3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 鉄分沈着あり
SY4/2灰オリーブ色土ブロック30%含む
- 3 SY4/2 灰オリーブ色土 ややしまる 粘性ややあり 鉄分沈着あり
2.SY3/1黒褐色土ブロック10%含む

図 2313 SK06518 遺構図

能性がある。8076は口縁部が屈曲し、上段が直立して強く外反する。

時期 VII期のSK06517、SD1217、VII期末～VII期初めのSD1219に切られるが、出土遺物の時期からVII期と考えられる。

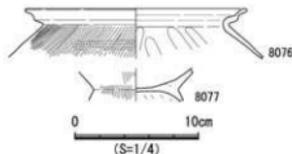


図 2314 SK06518 遺物実測図

SK06521 (遺構：図 2316、遺物：図 2315)

検出状況 東部中央南寄りに位置する。SK06526の底面で検出し、平面形は明瞭であった。

形状 長軸長約0.9mの不整形円形を呈する。深さは約0.1mであり、底面は平坦で、壁面の傾斜は急である。

埋土 3層に分層した。埋土中にブロック土が散在し、人為堆積と考えられる。しかし、3層は掘りすぎた可能性もある。

遺物出土状況 埋土中から土器29点が出土した。出土土器はVI期～VII期の細片が多い。

出土遺物 8078はVI期～VII期甕D類。器壁が薄く、ハケ目が残る。

時期 VII期のSK06526より先行すること出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。

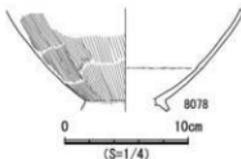
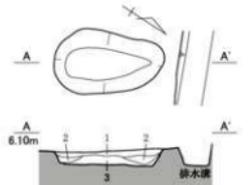


図 2315 SK06521 遺物実測図



1. 2.5Y2/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 鉄分沈着あり 5Y4/1灰色土ブロック10%含む
2. 3Y3/1 オリーブ黒色土 しまり弱い 粘性あり 鉄分少し沈着あり 5Y4/1灰色土ブロック15%含む
3. 10Y4/1 灰色土 ややしまる 粘性ややあり 5Y3/1オリーブ黒色土ブロック5%含む

図 2316 SK06521 遺構図

SK06522 (遺構：図 2317、遺物：図 2318)

検出状況 東部中央南寄りに位置する。SK06526の底面で検出し、南側をSD1219に切られる。平面形は明瞭であった。

形状 長軸長約1.2mの不整形円形を呈する。深さは約0.2mであり、底面は緩やかに丸みを帯び、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土 2層に分層し、炭化物を全体的に含む。2層にブロック土の混入が多く認められることから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器194点、石器類3点が出土した。出土土器の多くはVII期に属する。

出土遺物 8079はVII期甕B3類。口縁部がくの字に屈折し、端部に断続的なナデによる平坦面を形成する。胴部外面にはハケ目残り、煤が付着する。口縁部、胴部の外面には指頭圧痕や凹凸が認められ、雑な作りである。8080、8081はVII期甕D2b類。いずれも口縁部が屈曲し、上段が短く外反する。胴部外面には斜位のハケ後、ヨコハケが施される。

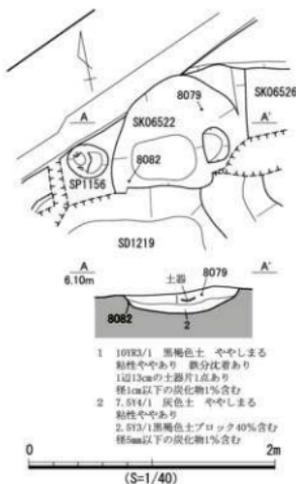


図 2317 SK06522 遺構図

8082はⅦ期器台B3類。口縁部が内湾し、脚部は円錐状に開く。2孔1対の透孔を2方向に配置し、透孔以下で大きく開く。

時期 Ⅶ期のSK06526とⅦ期末～Ⅷ期初めのSD1219に切られるが、出土遺物の時期からⅦ期と考えられる。

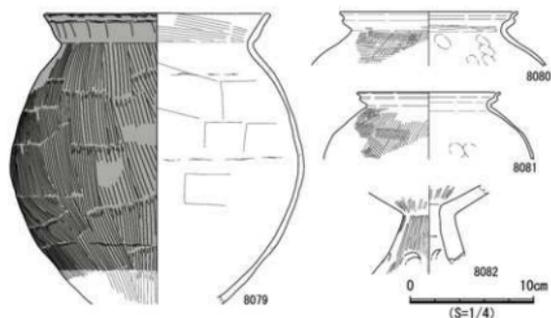


図 2318 SK06522 遺物実測図

SK06526 (遺構：図 2320、遺物：図 2319)

検出状況 東部中央南寄りに位置し、北側は調査区域外にのびる。検出面における鉄分の沈着が著しく、平面形が不明瞭であったため、SB555、SB556、SD1219に切られる範囲をすべて本遺構の埋土として掘削した。

形状 全形や規模は不明である。深さは約0.1mであり、下層にあるSK06527の平面形が見えた面を底面とした。

埋土 2層に分層した。全体的にブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器 1,167点、石器類 1点が出土した。遺物は遺構の東側からの出土が目立ち、Ⅵ期～Ⅶ期のものが多い。なお、炭化材がわずかに出土した。

出土遺物 8083はⅤ期～Ⅶ期甕。胴部の肩の張りがやや強く、器面にはハケ目が残る。胴部下半は直線的に開き、底部は平底である。8084はⅥ期～Ⅶ期壺D3a類。頸部が直立して立ち上がり、口縁部が外反する。端部付近が屈曲して直立し、端部にはわずかな平坦面を形成する。口縁部外面には刺突文が認められる。8085はⅥ期～Ⅶ期壺H類。口縁部を欠損する。胴部は扁平で、最大径は胴部中

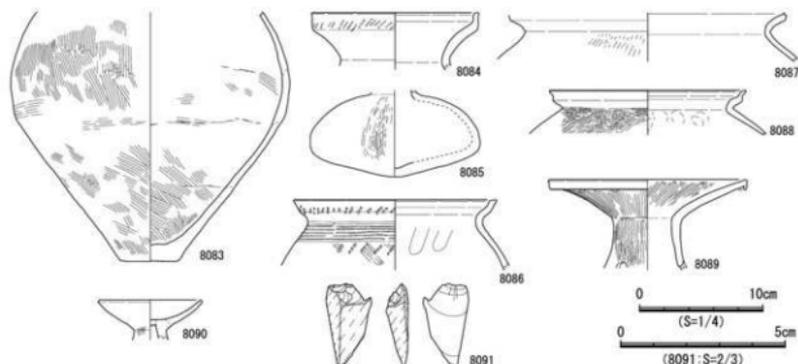


図 2319 SK06526 遺物実測図

央より下方に位置する。底部は平坦面をもたずやや突出する。8086はV期～VI期甕A3類。口縁部が屈曲して受口状を呈し、端部には顕著な平坦面を形成する。口縁部外面には刺突を施す。頸部直下には直線文を施文し、下方に刺突文が認められる。8087はVI期～VII期甕D類。口縁部下段が外傾するが、屈曲部から上方を欠損する。器面の磨耗が著しい。8088はVII期甕D2b類。口縁部が屈曲し、上段が短く外反して平坦になる。8089はV期～VI期器台B1a類。口縁部が直線的に開き、端部を下方に拡張する。脚部は付根から直立し、穿孔以下で開く。8090はVII期器台C2類。口縁部が短く円錐状に開き、やや内湾する。端部は丸くおさめるが、先端に沈線が1条認められる。8091はサヌカイト製の縦長剥片。

時期 出土遺物の時期はVI期～VII期であり、VII期のSK06522を切ることからVII期と考えられる。

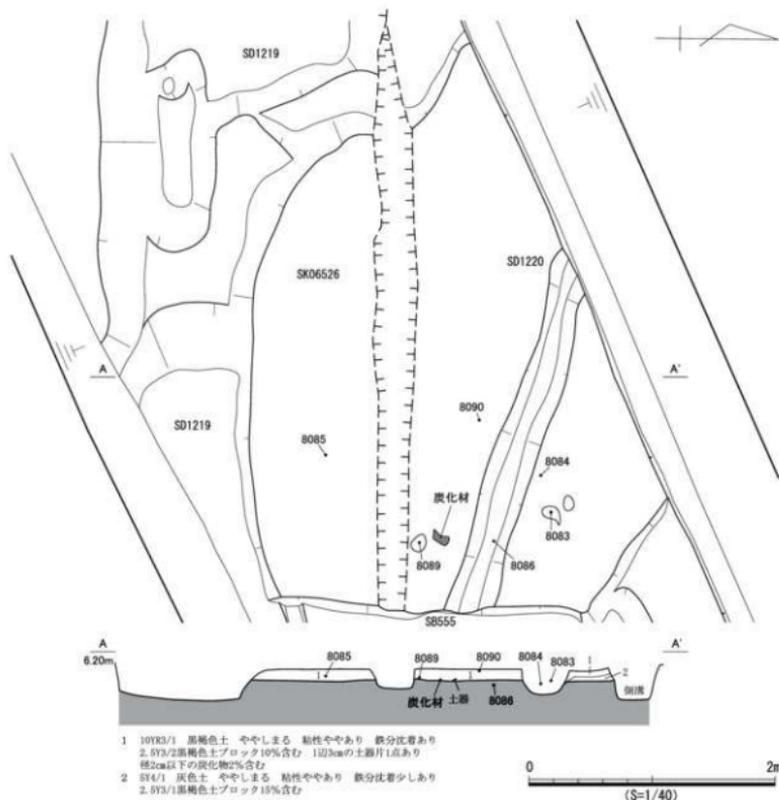


図 2320 SK06526 遺構図

SK06527 (遺構：図2321、遺物：図2322)

検出状況 東部中央南寄りに位置し、SB555とSD1219に切られ、SB556を切る。SK06526の底面で検出し、平面形は明瞭であった。

形状 南側と東側を別遺構に切られているため定かではないが、西辺は直線的のび、北西隅はほぼ直角に屈曲することから方形を呈すると考えられる。深さは約0.1mで、底面はほぼ平坦であり、壁面の傾斜は緩やかである。

埋土 2層に分層した。ブロック土の混入が目立ち、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器843点が出土した。出土土器はV期～VII期のもので、特にV期の遺物が多い。西壁沿いでは高坏I類(8103)の坏部に鉢A類(8096)が入り込むような状態で出土し、いずれもほぼ完形に復元できた。また、それよりやや北側では残りの良い高坏B類(8100, 8101)、高坏H類(8102)が出土し、やや離れて高坏B類(8099)がほぼ完存して横位で出土した。西壁沿いで出土したこれらの土器はいずれもV期に属する。また、本遺構の東側を中心に炭化物がまとまって出土した。VI期～VII期の遺物は混入と考えられる。

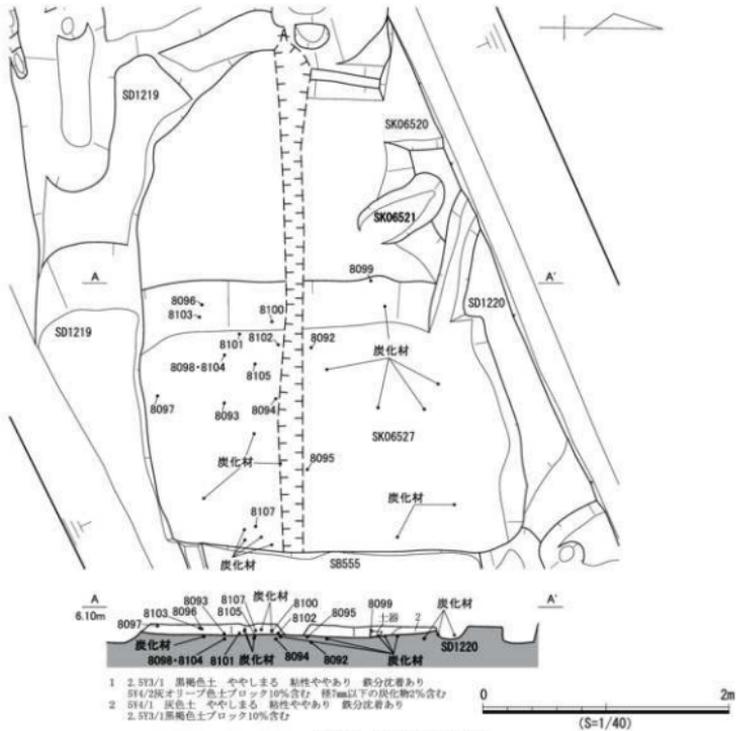


図2321 SK06527 遺構図

出土遺物 8092はV期～VI期壺A類。胴部上半には、刺突文、直線文が認められる。下半はハケ後ミガキの器面調整を施す。底部は平底である。8093はVI期～VII期壺H3類。口縁部が短く直立し、端部は外反して尖る。胴部はやや扁平で、底部は平底である。8094はV期～VI期甕A3類。口縁部が強く屈曲して端部が直立し、受口状を呈する。端部下端には刺突を加える。器面の摩耗が進んでいるため不明瞭だが、頸部直下には直線文2帯とその間に波状文らしき文様が認められる。一部に粗いハケ目が残り、煤の付着が認められる。胴部最大径は胴部中央より上に位置して腰高で、底部は平底で小さい。8095、8096はともにV期鉢A1類。口縁部がナデとともに明瞭に屈曲して、受口状を呈する。口縁端部外面には刺突を加える。8095の端部には平坦面が形成されるが、8096は丸くおさめる。頸部以下には文様が認められる。8095は頸部から直線文、刺突文、直線文、波状文の順に施文され、波状文のあたりが胴部最大径となる。器面に強い被熱があり、摩耗が著しい。8096は器面の磨耗が著しく、文様が不明瞭だが、刺突文が2帯認められる。胴部最大径はともに上から3分の1ほどに位置し腰高である。内面にはケズリが認められる。8095は肩部が強く張り、胴部形状が扁平で、器高が低くなる。底部は矮小な平底である。8097はVI期～VII期鉢A4a類。口縁部が短く外反し、端部には顕著な平坦面をもつ。胴部は肩部が強く張り、口径と胴部最大径はほぼ同じである。8098はV期高坏B2b類。坏底部は浅い皿状を呈して口縁部が直立気味に立ち上がり、端部は強く外反して丸くおさめる。脚部は付根から直立し、裾部が外反する。透孔は脚部下方に位置する。8099はV期高坏B2c類。坏底部は浅い皿状を呈し、口縁部が直立して立ち上がる。端部に向けて外反し、端部を丸くおさめる。内外面の稜は明瞭で、外面屈曲部の稜は、突帯状に下方に張り出す。脚部は付根から円錐状に開き、裾部が大きく外反する。透孔を3方向に配置し、脚部下方に位置する。8100、8101はともにV期高坏B3b類。坏部は浅い皿状を呈し、口縁部が外反して端部を丸くおさめる。口縁部の立ち上がりは直立気味で、裾部は外反する。脚部は付根から円錐状に開き、裾部が外反する。透孔は3方向に配置され、8101は脚部中央よりやや下方に位置するが、8100は脚部中央に位置する。8100の端部は外反する。8102はV期高坏H1類。坏部が碗状を呈し、口縁部は尖る。脚部が付根から円錐状に開き、裾部が大きく外反する。透孔を4方向に配置する。8103はV期高坏I2類。坏部が碗状を呈し、口縁部が屈曲して立ち上がる。端部を丸くおさめ、ナデ調整を施す。端部以下の口縁部にはミガキを施す。脚部は付根から柱状に直立し、直線文を3帯施文する。透孔は脚部下方に位置し、3方向に配置する。透孔以下で裾部が大きく外反し、端部を丸くおさめる。8104はV期器台A1a類。口縁部が外反し、端部をわずかに上下に拡張して平坦面を形成する。脚部は柱状に直立し、透孔以下で強く外反する。透孔の上方には直線文が認められ、透孔は3方向に配置する。脚部端部は、口縁部と同様に上下に拡張して平坦面を形成する。8105はV期器台B1a類。口縁部が外反する。端部をわずかに下方に拡張して平坦面を形成する。脚部は柱状に直立し透孔以下で外反する。透孔は3方向に配置する。8106はV期器台A1類。口縁部が外反し、端部には粘土を貼付して上下に拡張する。端部には顕著な平坦面を形成する。8107はV期～VI期器台B1a類。口縁部が直線的に開き、端部付近が外反する。端部をわずかに下方に拡張して平坦面を形成する。脚部は柱状に直立し透孔以下で外反する。透孔は3方向に配置する。

時期 VI期～VII期のSB555とVII期末～VIII期初めのSD1219に切られ、V期のSB556を切るが、出土遺物の時期から、V期と考えられる。



图 2322 SK06527 遺物実測図

SK06528 (遺構: 図2323、遺物: 図2324)

検出状況 東部中央南寄りに位置する。西側でSB555を切り、平面形は明瞭であった。

形状 長軸長約0.9mの不整形円形を呈する。深さは約0.1mで、底面はやや凹凸があり、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土 2層に分層した。炭化物を多く含む。土器片がまとまって出土したことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器267点が出土した。土器は埋土全体から散在して出土し、Ⅶ期～Ⅸ期のやや大きな破片が多い。

出土遺物 8108はⅦ期壺。柳ヶ坪型壺で、口縁部の内外面に羽状文が認められる。8109はⅥ期～Ⅶ期甕C1類。口縁部がくの字に屈折し端部付近がわずかに内湾する。8110はⅧ期甕D類。口縁部が比較的明瞭に屈曲し、上段が外反する。8111はⅥ期～Ⅶ期甕D類脚部。8112はⅦ期甕D類脚部。8113はⅦ期～Ⅷ期甕D類脚部。底部には打ち欠きによる穿孔が認められる。胴部外面には煤が付着する。8114はⅨ期甕。口縁部の屈曲は形骸化し、端部をやや肥厚する。

時期 Ⅵ期～Ⅶ期のSB555を切ることと出土遺物の時期から、Ⅶ期～Ⅸ期と考えられる。

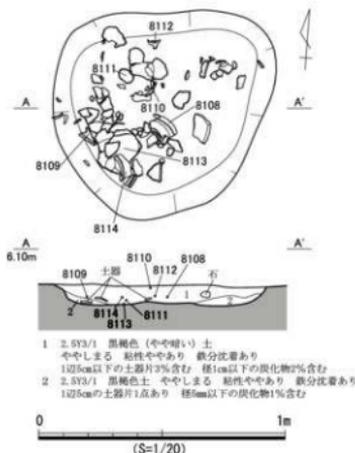


図2323 SK06528 遺構図

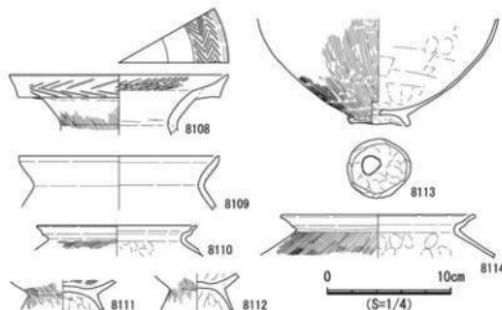


図2324 SK06528 遺物実測図

SK06530 (遺構: 図2325、遺物: 図2326)

検出状況 東部中央南寄りに位置する。SK06518上面で検出し、南側は調査区域外にのびる。

形状 全形は不明であるが、平面形は長軸長約1.2mの円形もしくは楕円形を呈すると思われる。深さは約0.2mで、底面は平坦であり、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土 2層に分層した。中央が窪む堆積であり、壁面沿いにブロック土を含む崩落土が堆積している。

遺物出土状況 埋土中から土器128点が出土した。遺構の中央付近にて埋土上層からⅦ期の高坏D類(8116)とⅦ期～Ⅷ期の甕D類(8115)の破片が横位で出土した。他の土器もⅦ期～Ⅷ期のものが多い。

出土遺物 8115はⅦ期～Ⅷ期甕D類。器面にハケ目が残り、煤、炭化物が付着する。8116はⅦ期高

環D類。脚部が付根から円錐状に開き、透孔は上下2段で3方向に配置する。

時期 VII期のSK06518を切ることと出土遺物の時期から、VII期～VIII期と考えられる。

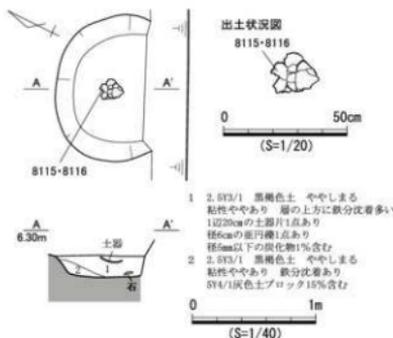


図 2325 SK06530 遺構図

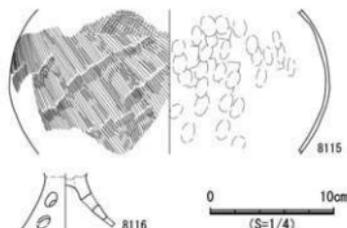


図 2326 SK06530 遺物実測図

SK06531 (遺構：図 2327、遺物：図 2328)

検出状況 東部西側南寄りに位置する。周辺はIV層がほとんど遺存せず、1b層除去後にV層表面で検出した。平面形は明瞭であった。

形状 長軸長約0.5mの不整形円形を呈する。深さは約0.1mで、底面は東側が深く、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土 3層に分層した。1層が2層と3層を切るような堆積である。2層と3層はブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器21点が散在して出土した。出土土器はVI期～VII期のものが多い。

出土遺物 8117はVI期～VII期変B3類。口縁部が短く屈曲し、端部にはナデによる平坦面を形成する。端部の平坦面にはナデの押圧によって凹凸が認められ、外面には粗いハケ目が残る。

時期 出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。

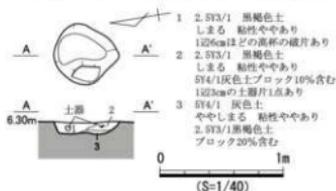


図 2327 SK06531 遺構図

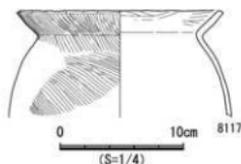


図 2328 SK06531 遺物実測図

SK06567 (遺構：図 2329、遺物：図 2330)

検出状況 東部西側南寄りの遺構密集域に位置する。SB558底面で検出し、SB559の壁溝を切る。平面形は明瞭であった。

形状 長軸長約0.6mの隅丸長方形を呈する。深さは約0.1mで、底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は緩やかである。

埋土 3層に分層した。全体的にブロック土が混入して

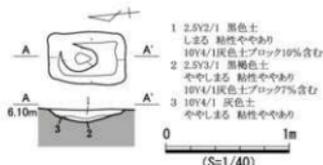


図 2329 SK06567 遺構図

おり、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器14点が出土した。IV期の土器片が目立つものの、遺構の重複関係から混入と考えられる。

出土遺物 8118はIV期壺H類。胴部に弧状の直線文帯が認められる。

時期 VI期～VII期のSB553より先行し、VI期～VII期のSB559に切られることから、VI期～VII期と考えられる。

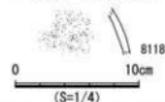


図 2330 SK06567 遺物実測図

SK06599 (遺構：図 2331、遺物：図 2332)

検出状況 東部西側南寄りに位置し、SZ217周溝埋土上面で検出した。なお、平面形は不明瞭であった。

形状 長軸長約1.2mの不整楕円形を呈する。深さは約0.2mで、底面はやや凹凸があり、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土 2層に分層した。1層が大半を占め、全体的に鉄分沈着が著しい。

遺物出土状況 埋土中から土器237点、石器類2点が出土した。出土土器は埋土全体から散在して出土し、その時期はVI期～VII期に属し、特にVII期後半の土器が多い。

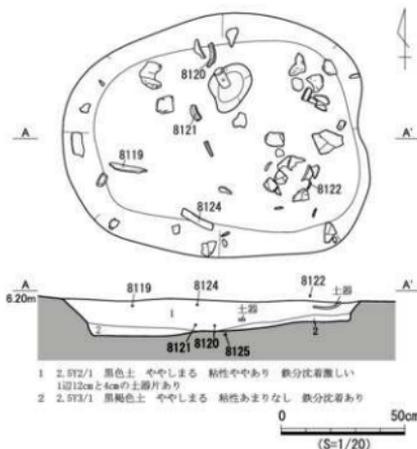


図 2331 SK06599 遺構図

出土遺物 8119はVI期～VII期甕B3類。口縁部が直線的に開き、端部にはナデによる平坦面が形成される。

頸部内面はくの字に屈曲するが、外面には粘土を充填してわずかな直立部を作出する。8120、8121はVII期甕D2b類。口縁部の屈曲は弱く、口縁部全体が大きく外方に開く。端部にはわずかに肥厚して平坦面をもつ。8122はVII期甕D類。胴部の器壁は薄く、外面には粗いハケ目が残る。脚部を打ち欠きにより欠損する。8123はVII期甕D類。口縁部がわずかに屈曲し、大きく開く。8124はVI期～VII期鉢A2類。口縁部が短く外反し、ナデによってわずかに屈曲して直立する。端部を

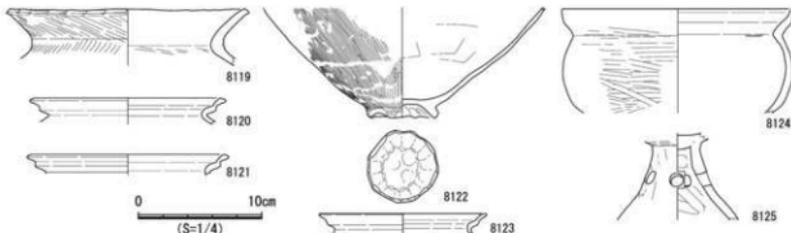


図 2332 SK06599 遺物実測図

丸くおさめ、胴部には粗いハケ目が残る。8125はⅦ期～Ⅷ期高坏。脚部が円錐状に細く開き、2孔1対の透孔を2方向に配置する。脚部は大きく外反する。

時期 出土遺物の時期から、Ⅵ期～Ⅷ期と考えられる。

SK06623 (遺構：図 2333、遺物：図 2334)

検出状況 東部中央の遺構密集域に位置し、南側はSD1245に切られ、SZ083を切る。

形状 不整形を呈し、深さは約0.2mである。底面は緩やかに丸みを帯び、壁面の傾斜は緩やかである。

埋土 4層に分層した。層界の凹凸が顕著でブロック土が混入していることから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器55点が出土した。出土土器の大半はⅥ期～Ⅶ期のものである。SZ083と重複しているためⅡ期の土器片も出土したが、いずれも混入と考えられる。

出土遺物 8126はⅡ期壺。8127と同じく、沈線文系土器の壺胴部片。貼付突帯に刺突を施し、流水文らしき文様が認められる。8127はⅠ期～Ⅱ期壺。沈線文系土器の壺胴部片。頸部直下に複数条からなる沈線文帯を2帯施文し、その間にヘラによる刺突文を加える。文様全体が波状にも見えるが、小片のため全容は不明である。

時期 Ⅳ期のSZ083を切り、Ⅵ期～Ⅶ期のSD1245に切られるが、出土遺物の時期からⅥ期～Ⅶ期と考えられる。

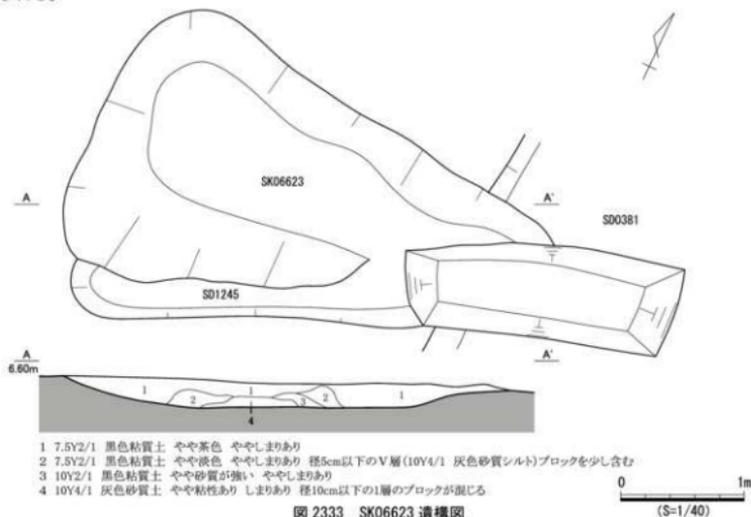


図 2333 SK06623 遺構図



図 2334 SK06623 遺物実測図

SK06625 (遺構：図 2335、遺物：図 2336)

検出状況 東部中央のSD0381の東壁面上に位置し、西側はSD0381に削平され、東側はSD1252に切られている。

形状 残存している範囲は東西に細長いものの、詳細は不明である。深さは約0.2mであり、底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は緩やかである。

埋土 単層である。炭化物を含むが、その成因は不明である。

遺物出土状況 埋土中から土器8点、木製品1点が出土した。

出土遺物 8128はVI期～VII期高坏C類頸部。付根から脚部が円錐状に開き、裾部が大きく内湾する。2孔1対の透孔を2方向に配置する。8129は棒材。削り出しの棒材で、上端は斜めに切断されている。

時期 VI期～VII期のSD1252に切られるものの、出土遺物の時期からVI期～VII期と考えられる。

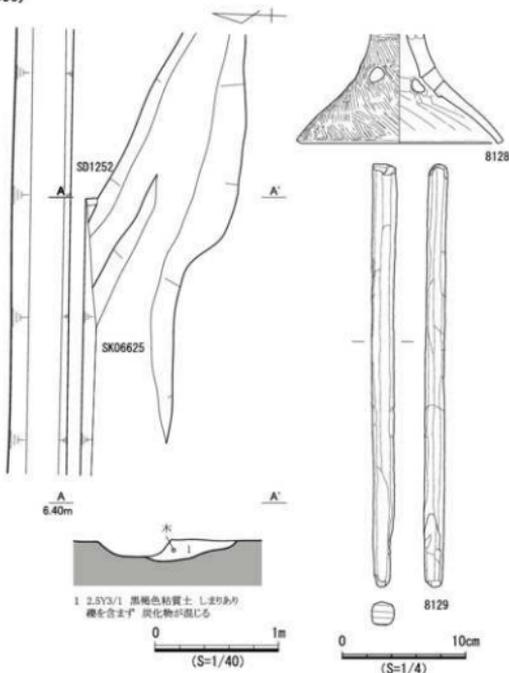


図 2335 SK06625 遺構図

図 2336 SK06625 遺物実測図

SK06644 (遺構：図 2338、遺物：図 2337)

検出状況 東部中央の遺構密集域に位置し、SB549の底面で検出した。

形状 東西方向に長く、長軸長約2.6mの不整楕円形を呈する。深さは約0.4mで、底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は緩やかである。

埋土 5層に分層した。全体的には中央が窪む堆積であるが、層界の凹凸が著しく、埋土下層にブロック土の混入が多いことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土から土器4点、石器・石製品1点が出土した。土器はいずれも小片である。

出土遺物 8130は下呂石製の打製石鏃。先端部は折損しており、基部は直線状となる平基鏃である。

時期 出土遺物から判断できないが、VI期～VII期のSB549に切られているため、それ以前と考えられる。

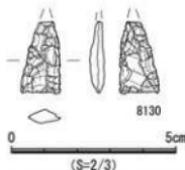


図 2337 SK06644 遺物実測図

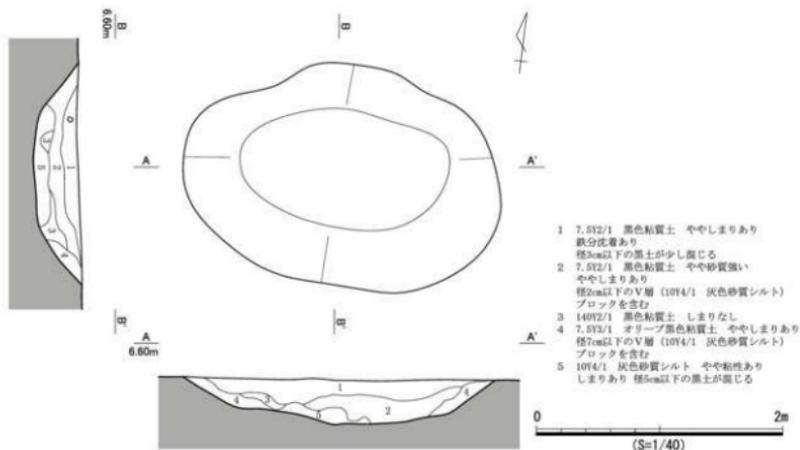


図 2338 SK06644 遺構図

SK06648 (遺構：図 2340、遺物：図 2339)

検出状況 東部中央の遺構密集域に位置し、SZ201とSD1260を切る。

形状 東西方向に長い、長軸長約1.5mの不整楕円形を呈する。深さは約0.1mで、底面は平坦であり、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土 単層であり、その成因は不明である。

遺物出土状況 埋土中から土器48点が出土した。

出土土器の多くは、VI期～VII期のものである。

出土遺物 8131はVI期～VII期高坏C類。坏底部から口縁部が直線的に立ち上がる。

時期 V期のSD1260を切ることと出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。

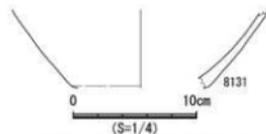


図 2339 SK06648 遺物実測図

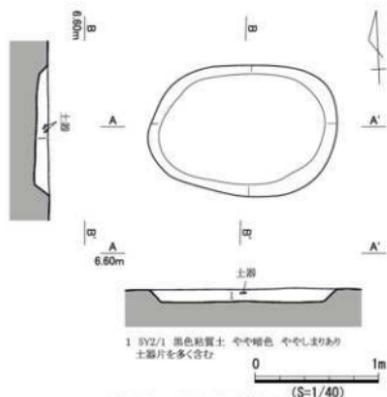


図 2340 SK06648 遺構図

SK06666 (遺構：図 2341)

検出状況 東部中央の遺構密集域に位置し、SB548の底面で検出した。

形状 東西に主軸をもち、長軸長約2.2mの不整楕円形を呈する。深さは約0.2mであり、底面はほぼ平坦で、北側よりも南側がわずかに低い。なお、壁面の傾斜は緩やかである。

埋土 5層に分層した。全体的には中央が窪む堆積であり、下層は灰色砂質シルトや黒色土の混入が目立つ。層界の凹凸も認められることから、人為堆積と考えられる。
遺物出土状況 埋土から土器5点が出土したが、いずれも細片であり図示していない。

時期 出土遺物から判断できないが、VI期～VII期のSB548に切られているため、それ以前と考えられる。

SK06953 (遺構：図2342、遺物：図2343)

検出状況 東部東側南寄りに位置する。他遺構との重複はなく、平面形は明瞭であった。

形状 直径約0.2mの円形を呈する。深さは0.1m未満であり、底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は緩やかである。

埋土 単層であり、ブロック土が混入していることから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器4点が出土し、V期の甕A類(8132)が底面付近から横位で出土した。

出土遺物 8132はV期甕A類。底部から脚部が剥落している。

時期 出土遺物の時期から、V期と考えられる。

SK07090 (遺構：図2345、遺物：図2344)

検出状況 東部東側南寄りに位置し、本遺構周辺は遺物包含層掘削時から土器片の出土が多く、検出面にも土器片が表出していた。なお、北側はSD1271に切られている。

形状 長軸長約3.2m、短軸長約2.7mの隅丸方形を呈する。深さは0.1m未満であり、底面は凹凸が目立ち、壁面の傾斜は緩やかである。

埋土 2層に分層した。ブロック土の混入が認められ、人為堆積と考えられる。

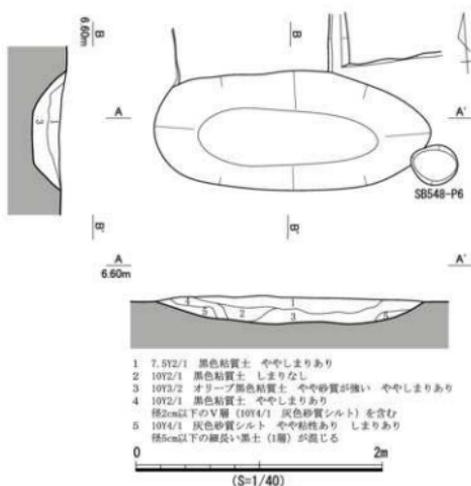


図2341 SK06666 遺構図



図2342 SK06953 遺構図



図2343 SK06953 遺物実測図



図2344 SK07090 遺物実測図

遺物出土状況 埋土中から土器124点が出土した。出土土器はVI期～IX期に属し、大半は摩滅が進行している。

出土遺物 8133はVII期～IX期甕D類。器壁の薄い脚部はハの字に開き、裾部には折り返しが認められる。8134はVI期～VIII期高坏。坏底部は浅い皿状を呈すると思われる。脚部は低く、裾部が大きく開く。2孔1対の透孔を2方向に配置する。8135はVI期器台B類。脚裾部が外反し、裾端部には平坦面を形成する。

時期 VI期～X期のSD1271に切られるが、出土遺物の時期からVI期～IX期と考えられる。

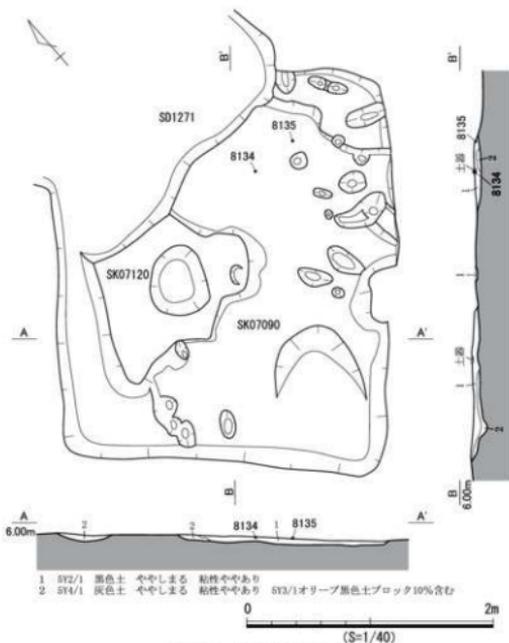


図 2345 SK07090 遺構図

5 焼土

SF003 (遺構：図 2346)

検出状況 東部西側中央に位置し、SB536埋土上面にて検出した単独の炉跡である。SB536以外の竪穴住居跡の炉である可能性を検討したが、周辺では本遺構に伴う小穴等は確認できなかった。なお、焼土や炭化物が広がる範囲を平面形とした。

形状 直径約0.5mの不整楕円形を呈する。中央北側に扁平な円礫がほぼ水平に据えられており、その北東側に焼土の堆積が顕著である。しかし、焼土は薄く、その厚さは1cmに満たない。

埋土 3層に分層した。焼土層は2層であり、その上下層には炭化物が混入する。

遺物出土状況 埋土中から土器1点が出土したのみであり、細片であるため図示していない。

時期 VI期～VII期のSB536より後出することから、それ以降と考えられる。

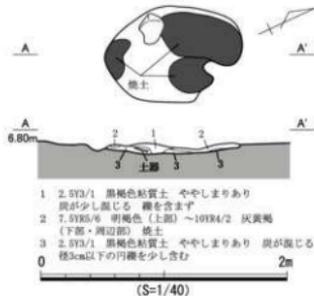


図 2346 SF003 遺構図

6 水田跡（遺構：図2347～2350）

検出状況 東部東側北寄りから中央に位置する。大半は『荒尾南遺跡B地区Ⅰ』にて報告済みであり、今回の報告箇所は11_7地点の幅約1.0mの区間である。Ⅰ層もしくはⅣ層を掘削中に、Ⅴ層ブロックが混入する灰色土を帯状に検出し、畦畔と認識した。

形状 11_7地点の調査範囲は狭小であったため水田区画の形状は不明であるが、『荒尾南遺跡B地区Ⅰ』の報告と整合すると、水田は長辺約3.5m～9.0m、短辺約2.5m～6.5mの不整長方形（もしくは不整形）を呈する。畦畔の下端幅は0.3～0.6mと差があり、11_7地点では畦畔が途切れる箇所（水口）を3箇所を確認した。そのうち、SD1293では水口部分が南側に開く平面形を呈しており、底面は北側が高く、南側が低かったことから、およそ北から南への流水が推定できる。また、水田周辺の溝状遺構は西側にSD0684、北東側にSD0634、SD0635、東側にSD0572、SD0680が位置する。SD0684はⅤ期頃に埋没していた可能性が高いため、今回検出した水田跡との関連性は低いと考えられる。一方、SD0634、SD0635はSD0572、SD0680と一連の溝状遺構と考えられる。SD0572の北側に位置するSD0680内には水制遺構が設置されており、『荒尾南遺跡B地区Ⅰ』では、SD0680からSD0572へと導水していたと考えられている。SD0572の底面標高は水田面とほぼ同じであることから（図2347）、簡易な板材などを溝内に設置すれば水田への導水が可能となる。また、水田面全体の標高は北側が高く、南側が低いことや、SD1293から想定できる流水方向などから、今回検出した水田跡はSD0634、SD0635、SD0572などから取水していた可能性が指摘できる。

埋土 検出した畦畔で区画された部分を水田面とし、掘削した。水田面の基本的な堆積は、覆土（畦畔検出時に畦畔周辺に広がっていた土）、耕作土、基盤層であり、覆土の多くは灰色～オリーブ黒色土、耕作土の多くはⅤ層ブロック土が混入するオリーブ黒色土、基盤層はⅤ層である。また、基盤層上面で長軸長約0.1m～0.2mの不整形を呈するオリーブ黒色土の広がりを複数確認し、耕作等に伴う踏み込み痕と判断した。

耕作土下の様相 水田耕作土を掘削すると、北側の基盤層上にて、ST078とST081間の畦畔下でSD1292を、水田耕作土等の下で柱根が残存するSP1222～SP1224を検出した。また、中央ではST106とST101間の畦畔下で土坑列（SK03674、SK04629、SK06067、SK06598）を検出した。溝や土坑列は水田耕作に関連する遺構の可能性があるものの、柱根が残存しているSP1222～SP1224は水田造営以前の遺構と考えられる。なお、SP1224の柱根は最終形成年輪が残っており、放射性炭素年代測定の結果、弥生時代後期に相当する年代範囲が示された（第6章第2節参照）。

遺物出土状況 覆土や耕作土中から弥生土器や土師器の小片がわずかに出土した。しかし、大半は摩滅が進んでおり、図示していない。また、覆土中には山茶碗などの中世以降の遺物もわずかに含まれている。

時期 今回の報告箇所からは言及できないが、『荒尾南遺跡B地区Ⅰ』で検討したようにⅤ期～Ⅵ期と考えられる。

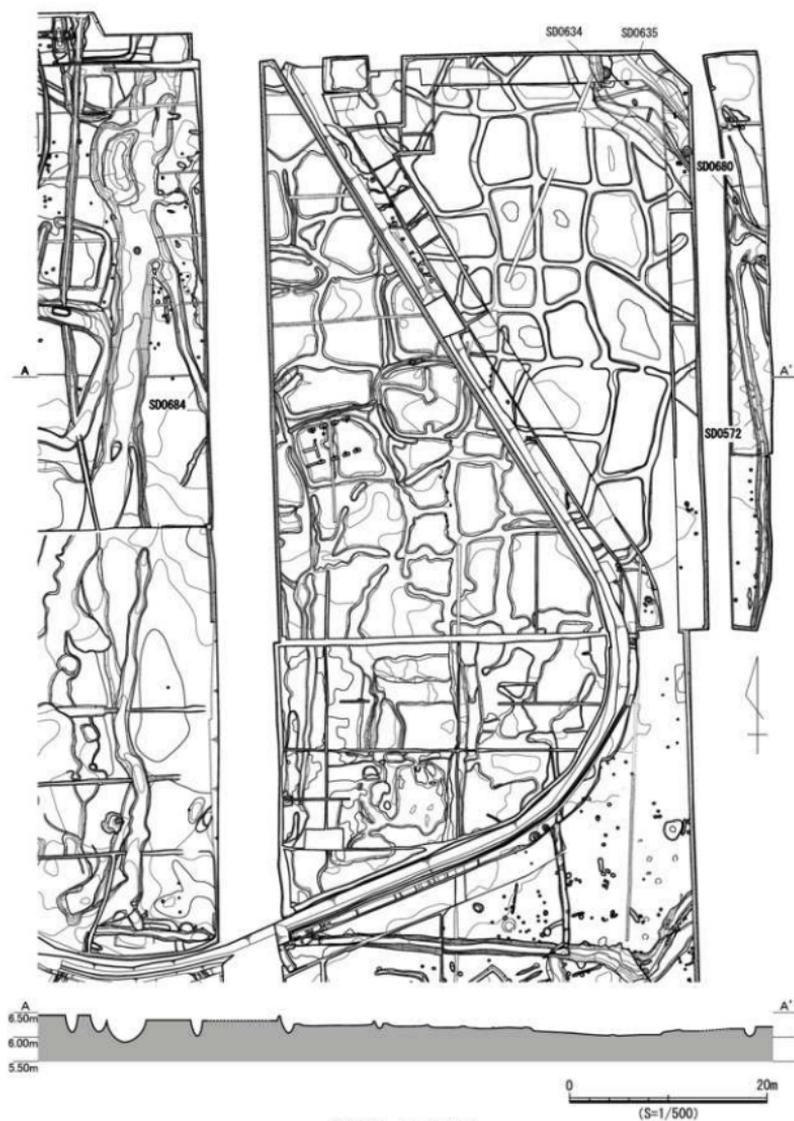


図2347 水田跡 (1)

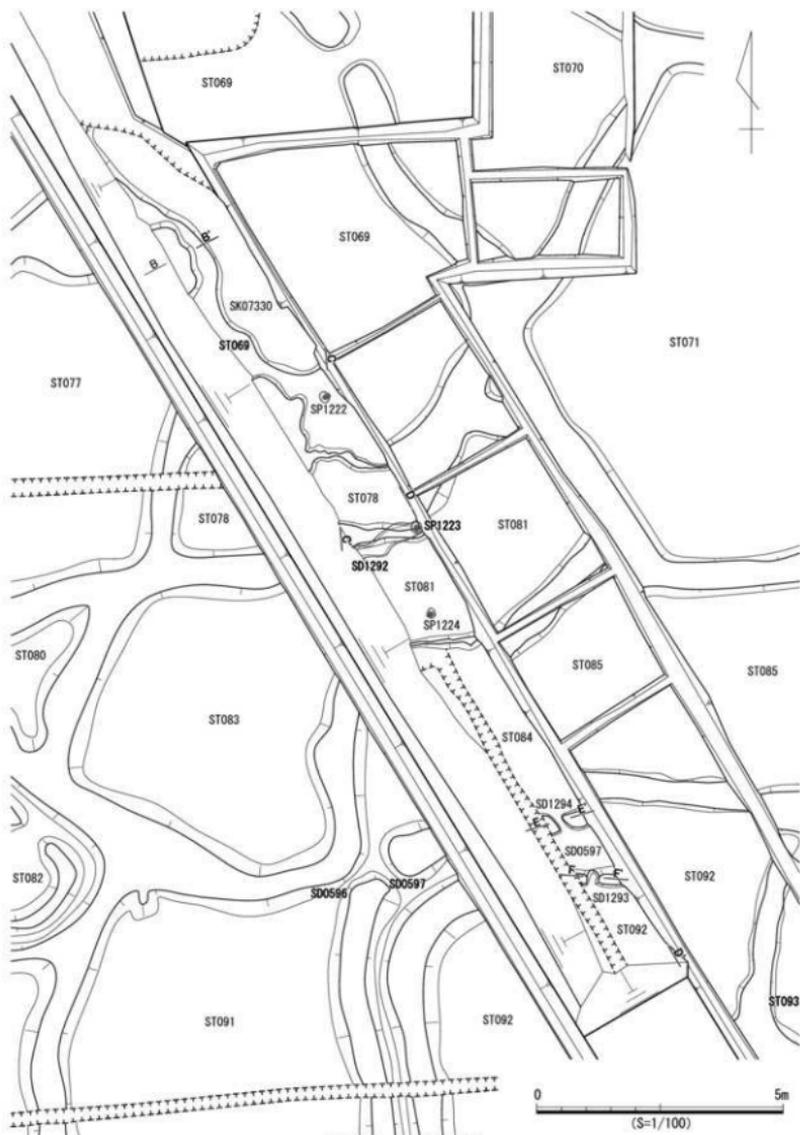


図 2348 水田跡 (2)

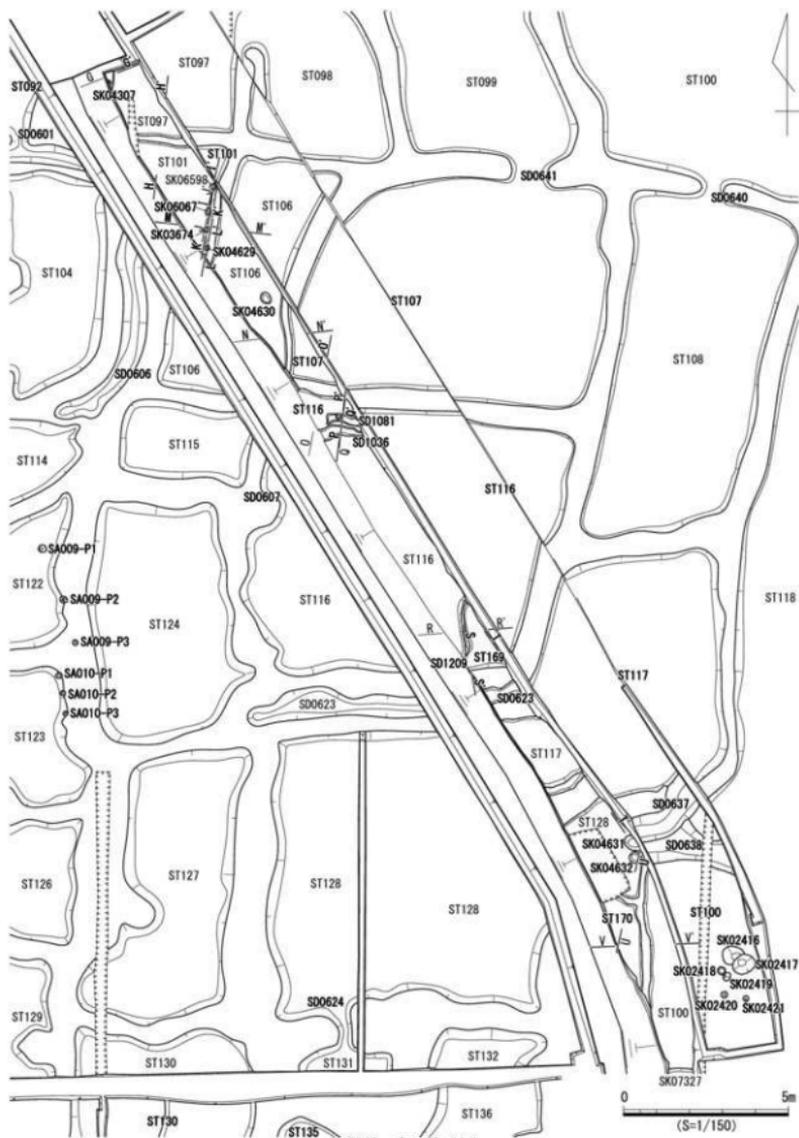


図 2349 水田跡 (3)



図 2350 水田跡 (4)

第4節 古墳時代中期以降の遺構と遺物

東部城では、古墳時代中期以降の遺構として、溝状遺構3期、土坑4基、土坑列10基、耕作跡1基、杭列1基について報告する。その分布は東部城南東側に偏り、古墳時代前期以前まで建物跡が多く分布した東部城中央から西側にかけては、ほとんど認められない。

以下、順に記載する。

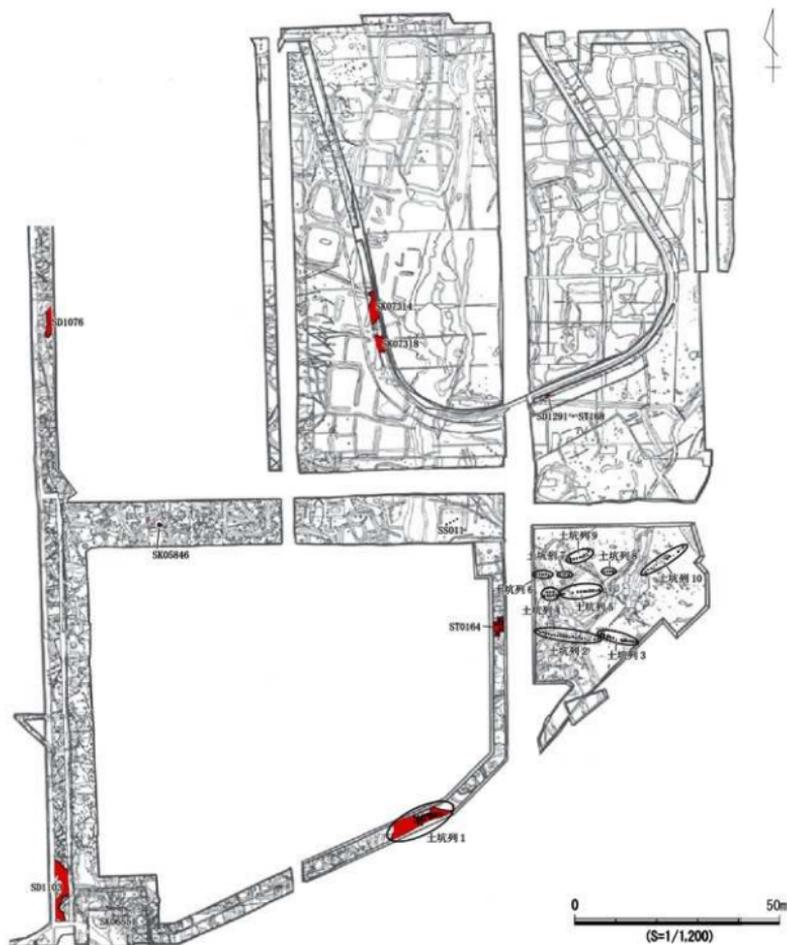


图 2351 東部城の古墳時代中期以降の遺構分布図

1 溝状遺構

SD1076 (遺構: 図 2353、遺物: 図 2352)

検出状況 東部西側中央の堅六住居跡密集域の南側に位置する。北側はSD1075に、西側はSK05427に切られており、平面形は不明瞭であった。

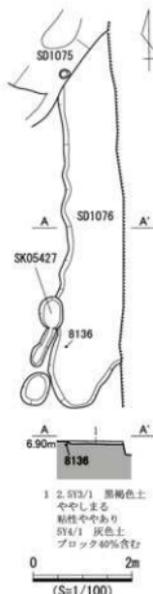
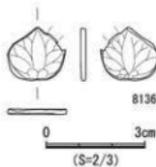
形状 ほぼ南北方向に主軸を持ち、残存幅約1.3m、深さは0.1mにも満たない。西辺の平面形はやや蛇行しており、底面はほぼ平坦で、壁面の傾斜は緩やかである。

埋土 単層で、ブロック土の混入が多いことから人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器320点が出土した。また、底面から線刻のある金属製品(8136)が底面に刺さったような状態で出土した。

出土遺物 8136は不明金属製品。板状で、平面形は宝珠形を呈するが、右上方に剥離した痕跡がある。表裏面には蓮の花を描いたような細い線刻が認められる。

時期 遺構検出時にVI期～VII期のSD1075に切られると判断したが、本遺構の時期は底面出土遺物の時期から古代以降と考えられる。そのため、SD1075との重複関係を検出時に誤認した可能性が高い。



SD1103 (遺構: 図 2354、遺物: 図 2355)

検出状況 東部西側南寄りに位置し、遺物包含層掘削後に検出した。平面形は明瞭であった。

形状 不整形を呈し、最深部は蛇行している。規模は不明で、深さ約0.2mであり、底面は凹凸が認められ、壁面の傾斜は緩やかである。

埋土 2～3層に分層した。円礫や粗砂を多く含んでおり、自然堆積と考えられる。溝底面では複数の遺構を検出し、それらの埋土を削平したためか、本遺構の埋土からは土器の小片が多数出土した。基底面はVI層の砂礫であり、埋土と基盤層との識別が困難であったため、適宜サブトレンチを設置して掘削深度を確認した。

遺物出土状況 埋土中から土器6,104点、中近世陶磁器13点が出土した。出土土器はVI期～VII期のものが多く、わずかにI期とIV期の土器片も出土した。また、溝底面で検出したSZ190と接合した破片もあった。

出土遺物 8137はIV期壺B2類。大型で、口縁部が屈曲して直立する。端部には顕著な平坦面を形成し、直下には凹線を4条施文する。8138～8140はIV期甕A2類。8138は端部が強く屈曲し、端部を肥厚気味にして顕著な平坦面を形成する。平坦面には2条の凹線を施文し、下端にはキザミを加える。頸部には粘土を貼付して幅広の突帯部を形成し、突帯上には刺突を加える。胴部にはタタキの後にハケによる調整を施す。8139は口縁部が短く屈曲し、端部にはヨコナデによる凹線状の凹みが認められ、上下端にはタタキが認められる。8140は口縁部が短く屈曲する。磨減が進行して器面の状況が不明瞭である。8141はIV期甕B2類。外反する口縁部が強く屈曲して直立し、屈曲部内面には微

図 2352 SD1076 遺物実測図 図 2353 SD1076 遺構図

小さな刺突が認められる。端部にはわずかに平坦面を形成する。外面には刺突文が認められるが、上半はナデによって消失している。8142はⅣ期甕A類底部。8143はⅤ期～Ⅵ期甕A3類。口縁部が外反し、端部直下で屈曲して直立する。端部には内傾する平坦面を形成し、ヨコナデ痕が明瞭に残る。8144はⅥ期～Ⅶ期甕B2類。口縁部が外反し、端部を丸くおさめる。8145はⅦ期高坏C3b類。内湾する口縁部に多条沈線を施文する。8146はⅦ期高坏G3b類。口縁部が内湾し、端部直下に多条沈線を施文する。8147はⅠ期遠賀川系土器の壺。胴部に削り出し突帯を形成し、突帯上に沈線を加える。

時期 弥生土器や土師器片が多数出土したものの、検出面の埋土が灰色気味であり、中近世陶磁器も出土したことから、中世以降と考えられる。

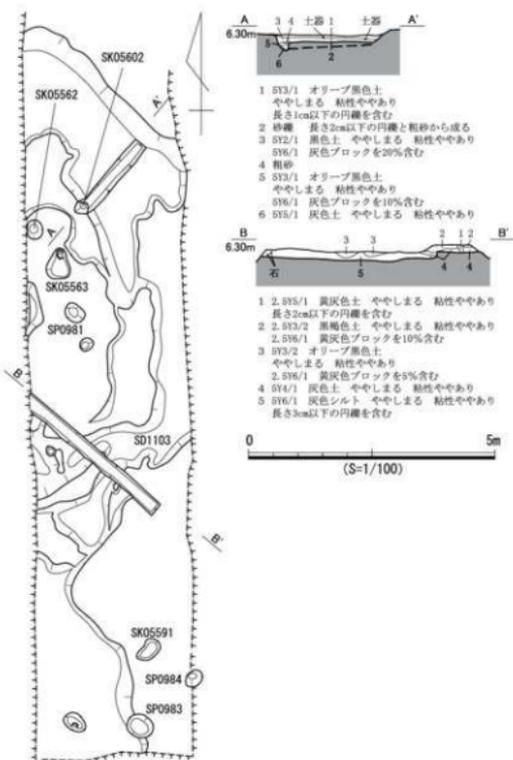


図 2354 SD1103 遺構図

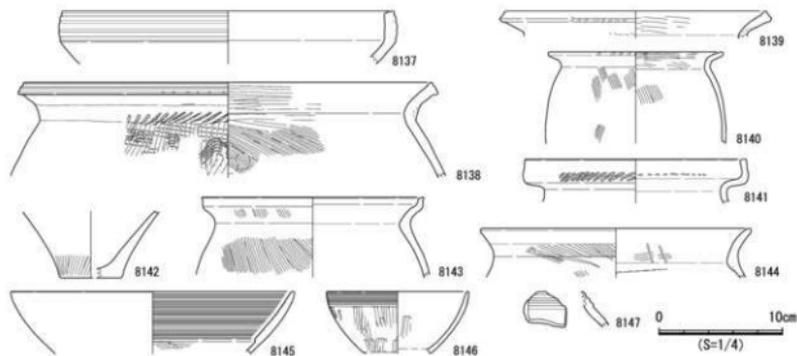


図 2355 SD1103 遺物実測図

SD1291・ST168 (遺構：図2356、遺物：図2357)

検出状況 東部東側中央に位置し、大半は調査区外にのびている。検出時は黒色土中に灰色土が南北方向に帯状に確認でき、土層断面を確認すると畦畔状の盛土であった(土層断面5層)。そのため、畦畔のみ残して掘削すると東側は溝状に落ち込み(SD1291)、西側は灰色土が細かく筋状に入り込む攪拌土を確認したため、水田遺構(ST168)と判断した。

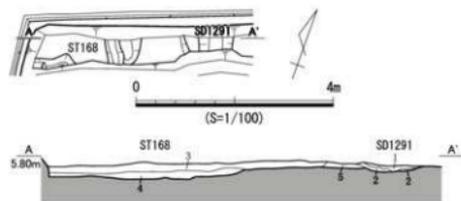
形状 大半が調査区域外にあるため、規模や形状は不明である。SD1291は深さ0.1m未満であり、底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は緩やかである。また、ST168の底面には凹凸がある。

埋土 SD1291、ST168ともに2層に分層した。SD1291は中央が窪む堆積であるが、層界に凹凸が認められるため攪拌されている可能性がある。ST168の下層は灰色土中にオリーブ黒色土を含み、底面の状況も加味すると、人為的な攪拌土もしくは整地土と考えられる。

遺物出土状況 SD1291から灰軸陶器1点、ST168から土器70点、須恵器1点、灰軸陶器9点が出土した。しかし、いずれも小片である。

出土遺物 8148はSD1291出土の灰軸陶器碗。8149はST168出土の灰軸陶器皿。いずれも底部外面が高台貼り付け部よりも下位に位置する。高台は内面が直線的に開き、外面中程に稜を有する。

時期 出土遺物の時期から、いずれの遺構も古代以降と考えられる。



- 1 2.5Y2/2 黒褐色土 ややしみる 粘性ややあり
- 2 5Y4/1 灰色土 ややしみる 粘性ややあり
- 3 5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしみる 粘性ややあり 5YR/1 灰色土を筋状に多く含む
- 4 5Y2/2 オリーブ黒色土 ややしみる 粘性ややあり 5YR/1 灰色土を筋状に含む
- 5 5Y5/1 灰色土 ややしみる 粘性ややあり 5Y3/1 オリーブ黒色土を全体的に20%程度含む

0 2m
(S=1/50)

図2356 SD1291・ST168 遺構図



図2357 SD1291・ST168 遺物実測図

2 土坑

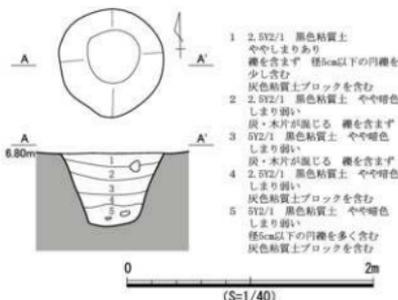
SK05846 (遺構：図2358、遺物：図2359)

検出状況 東部西側中央に位置する。SB534の埋土上面で検出し、平面形は比較的明瞭であった。

形状 直径約0.9mの円形を呈し、断面形は逆台形状で、深さは約0.6mである。底面はやや丸みを帯び、壁面の傾斜は急である。

埋土 5層に分層した。中央が緩やかに窪む堆積であり、4・5層にブロック土が、2・3層に炭や木片が混入する。

遺物出土状況 埋土中から土器166点が散在



- 1 2.5Y2/1 黒色粘質土 ややしまりあり 礫を含まず 径5cm以下の円礫を少し含む 灰色粘質土ブロックを含む
- 2 2.5Y2/1 黒色粘質土 やや褐色しまり弱い 炭・木片が混じる 礫を含まず
- 3 5Y2/1 黒色粘質土 やや褐色しまり弱い 灰色粘質土ブロックを含む
- 4 2.5Y2/1 黒色粘質土 やや褐色しまり弱い 炭・木片が混じる 礫を含まず 径5cm以下の円礫を多く含む 灰色粘質土ブロックを含む
- 5 5Y2/1 黒色粘質土 やや褐色しまり弱い 径5cm以下の円礫を多く含む 灰色粘質土ブロックを含む

0 2m
(S=1/40)

図2358 SK05846 遺構図

して出土した。

出土遺物 8150はX期高坏。坏底部は平坦で、脚部が付根から円錐状に開く。裾部が強く屈曲して平坦に開き、端部を丸くおさめる。

時期 VI期～VII期のSB534を切ることで出土遺物の時期から、X期と考えられる。

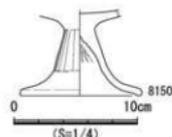


図 2359 SK05846 遺物実測図

SK06551 (遺構：図 2360、遺物：図 2361)

検出状況 東部西側南寄りの遺構密集域に位置する。SD1154底面で検出し、平面形は明瞭であった。

形状 長軸長約0.4mの不整楕円形を呈する。深さは0.1m未満で、底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は緩やかである。

埋土 単層であり、ブロック土が混入することから人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器4点、金属製品1点が出土した。

出土遺物 8151は銭貨であり、約半分に割れている。「天口口寶」と判別できる。

時期 出土銭貨の時期から、古代以降と考えられる。

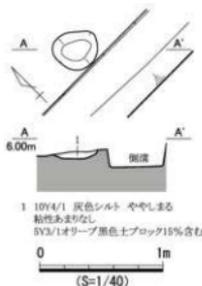


図 2360 SK06551 遺構図



図 2361 SK06551 遺物実測図

SK07314 (遺構：図 2362、遺物：図 2362)

検出状況 東部中央に位置し、大半は調査区域外へのびている。平面形は明瞭であった。

形状 規模や形状は不明である。しかし、南辺は東西方向にのび、西辺は蛇行しつつもおよそ南北方向にのびていることから、全体形は方形を呈する可能性がある。また、南辺に沿って畦畔状の盛土を確認したことから、耕作に伴う遺構と考えられる。

埋土 北側は5層に、南側は10層に分層した。層界の凹凸が著しく、埋土中に小礫を比較的多く含む。

遺物出土状況 埋土中から土器454点、須恵器3点、灰釉陶器1点、中近世陶磁器5点、

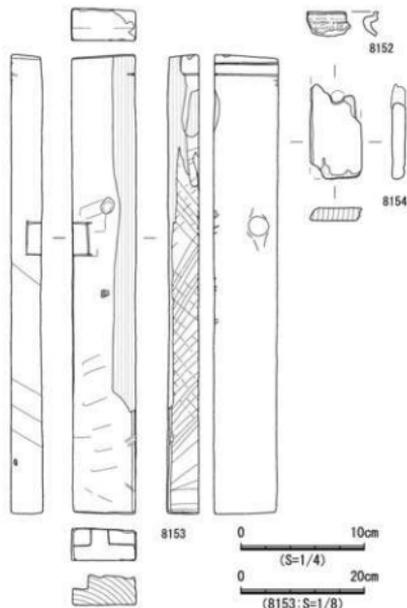


図 2362 SK07314 遺物実測図

木製品3点が散在して出土した。建築部材(8153)は遺構の中央付近で横位で出土した。

出土遺物 8152はⅦ期変D2a類。口縁部が屈曲し、上段が内傾して屈曲し端部は外反する。8153は建築部材。左右側面に鋸挽きの痕跡が残り、中央やや上方に方形の仕口がある。8154は板材。中央に直径約1.0cmの円形孔の痕跡が残る。

時期 出土遺物の時期から、中世以降と考えられる。

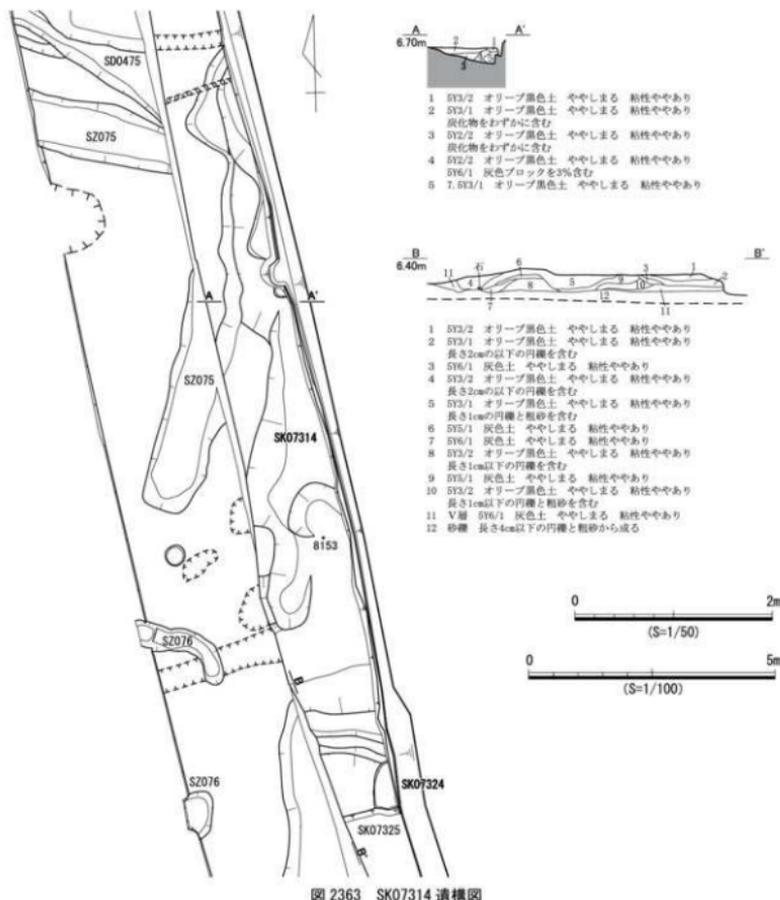


図 2363 SK07314 遺構図

SK07318 (遺構：図 2364、遺物：図 2365)

検出状況 東部中央に位置する。遺構の中央付近に南北にのびる掘乱があり、南端も大きく掘乱により失われている。平面形は明瞭であり、調査区壁面でも明瞭に土坑の掘形が確認できた。なお、検出

面にて土器片が多数出土した。

形状 規模や形状は不明である。底面はほぼ平坦であり、北壁の傾斜は比較的急である。底面で土坑を8基検出した。土坑の底面は凹凸が著しく、特にSK07319やSK07324などは小楕円形坑が連続するような状況であった。

埋土 6層に分層した。ほぼ水平堆積であるが層界の凹凸が認められ、ブロック土が混入することから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器1,285点、中近世陶磁器7点、底面土坑内から土器382点、中近世陶磁器1点が出土した。出土土器の大半は弥生土器や土師器の小片であり、特にSK07317、SK07319から100点以上が出土したが、SK07316底面から山茶碗の底部片(8155)が出土したことから、弥生土器や土師器片は混入の可能性が高い。なお、遺構北側の埋土1層から18世紀代の近世陶器が出土したが、攪乱に近いために混入遺物と判断した。

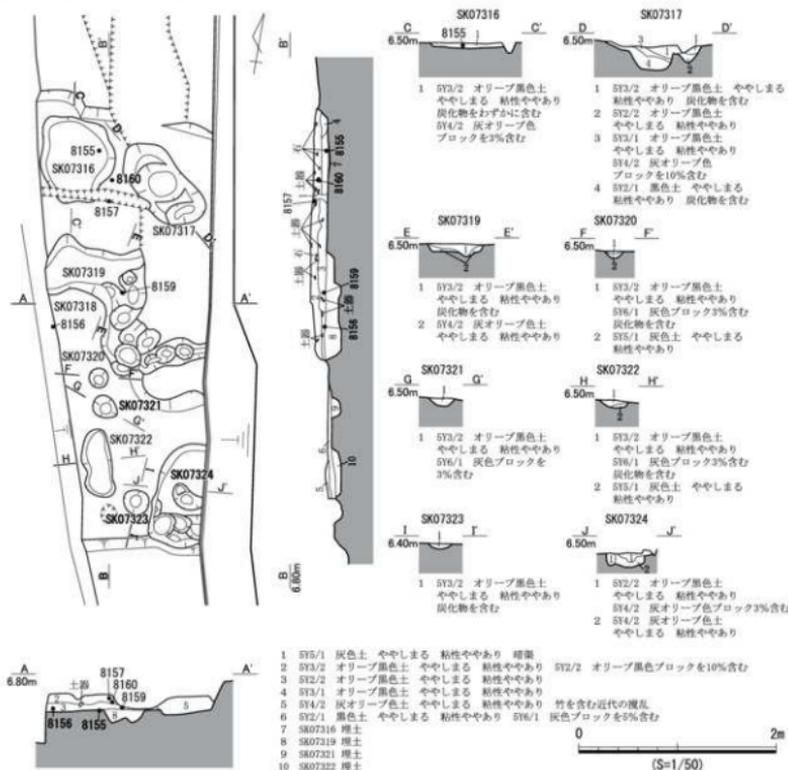


図 2364 SK07318 遺構図

出土遺物 8155は山茶碗。第6型式の碗で、高台が低い。8156はV期～VI期壺A類。外面に3帯の刺突文が残る。8157 V期～VI期壺A2類。口縁部が大きく外反し、端部外面に平坦面を形成する。器面の磨耗が著しいために不明瞭であるが、端部には刺突文らしき凹みが認められる。頸部には円形刺突文を施し、内外面ともに赤彩を施す。8158はVII期高坏G3b類。内湾する口縁部外面に多条沈線を施文する。8159はVII期高坏G類。坏底部は中央がやや膨らみ、口縁部が明瞭な段をもって立ち上がる。脚部は低く、裾部が扁平に大きく開く。端部には平坦面をもち、透孔を3方向に配置する。8160はV期器台A類。脚部が直立気味で口縁部が開く。8161は同安窯系青磁碗。外面に櫛掻文、内面に劃画文が施されている。

時期 遺構底面の土坑SK07316から山茶碗が出土したため、中世以降と考えられる。

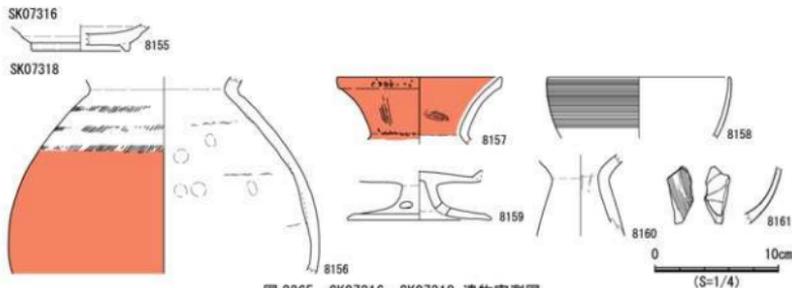


図 2365 SK07316・SK07318 遺物実測図

3 土坑列

東部城の南東側では、列状に並ぶ小規模な土坑を複数検出したため、それらを土坑列として報告する。土坑列は10基検出し、土坑列1は10_4地点、土坑列2～10は10_5地点に位置し、およそ南北方向に主軸をもつ楕円形の土坑を、東西方向に列状に並んで検出した。土坑列を形成する土坑は比較的浅く、埋土中に鉄分の沈着による硬化やブロック土の混入が目立つ。土坑列の性格として、西部域で検出した道路状遺構の他に、土坑列2のように10_4地点で検出したST164と同一の性格である耕作痕の可能性も考えられる。10_5地点の土坑列の出土遺物の大半は弥生土器と古墳時代前期以前の土師器であるが、SD1198やSD1250、S2212などの埋土上面で検出していることや、わずかに須恵器が出土したことなどから、その時期は古墳時代中期以降と考えられる。そのため、各遺構の時期については、土坑列1のみ記載し、10_5地点で検出した土坑列2～10の説明では記載していない。

土坑列1（遺構：図2366・2367）

検出状況 東部中央南寄りに位置し、SD0381埋土上面で検出した。南北方向に主軸をもつ楕円形の土坑群を東西方向に並んで検出し、いずれの埋土も類似し平面形も明瞭であったので、一連の土坑群と判断した。また、それらの下にあるSK06478とSK06499も同様の埋土を有していたため、土坑列に関連する遺構として、ここで報告する。なお、SK06478は出土遺物が多いため、その詳細は後述する。

形状 東西約7.0m、南北約3.0mの範囲に長軸長約0.6m～1.3mの不整楕円形を呈する土坑が、

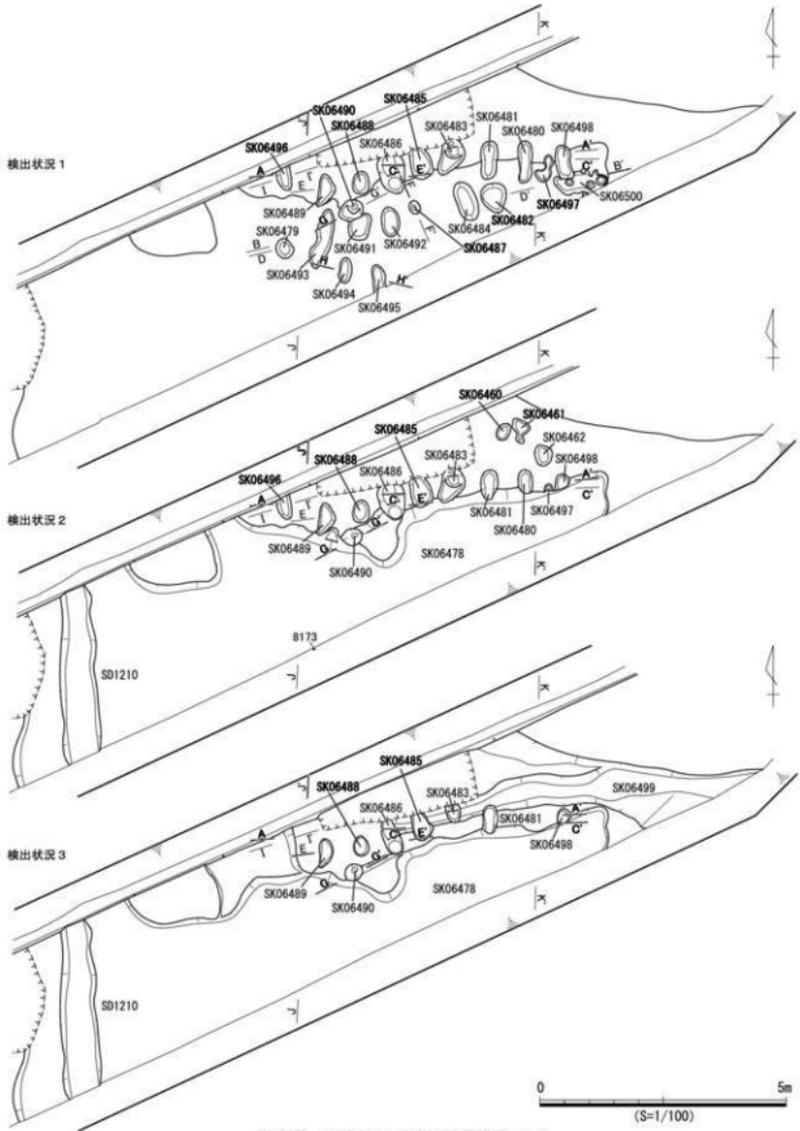


図 2366 土坑列 1・SK06478 遺構図 (1)

ほぼ東西に並ぶ。土坑列はA-A'ライン、B-B'ラインの2列以上あり、土坑間は0.2m～0.7mである。各土坑とも深さ約0.1m、もしくは0.1m未満と浅く、底面は平坦なものや丸みを帯びるものがある。これらの土坑に切られてSK06478がある。SK06478は後述するように埋土が攪拌されており、土坑列を掘削する前段階の整地痕跡の可能性もある。また、SK06478に切られるようにSK06499があり、それを掘削すると土坑列直下に浅い溝状の落ち込みを確認できた。これらの遺構は、土坑列の存在やそれらと重複関係にある溝状遺構の存在、埋土中に砂質土が含まれる点など、B地区西部域からA地区にかけて検出した中世以降の道路状遺構に類似する。そのため、道路状遺構の可能性が高いといえるものの、検出範囲が狭いことや、SK06478と土坑列の関係がやや不明瞭であることなどから、土坑列として報告する。

埋土 小土坑の埋土は単層、もしくは2層であり、黒色砂質土が主体をなす。また、ブロック土が多く混入していることから、人為堆積と考えられる。SK06499は単層であり、砂質土のブロック土が混入する。

遺物出土状況 土坑列の埋土中から土器714点、須恵器2点、灰軸陶器1点が出土した。SK06487を除いていずれも土器片が出土しており、須恵器はSK06494から、灰軸陶器はSK06479からの出土である。また、SK06499からは土器408点、須恵器1点が出土した。しかし、いずれも細片であり図示していない。

時期 出土遺物からは言及できないものの、古代以降の遺物が含まれること、検出時の平面形が明瞭であること、埋土が砂質土で古墳時代以前の埋土と異なること、中世以降の道路状遺構との関連性などから、古代以降と考えられる。

SK06478 (遺構：図2366・2367、遺物：図2368)

検出状況 東部中央南寄りに位置し、南側は調査区域外にのびる。SD0381上面で検出し、西側はSD1210に、北東側は複数の土坑に切れ、平面形は不明瞭であった。

形状 形状、規模ともに不明であり、北東辺の平面形は不整形を呈する。深さは約0.2mであり、底面は南側に向かって緩やかに傾斜している。

埋土 3層～5層に分層した。全体的に攪拌されたような土で、植物遺体やブロック土が混入し、微砂をわずかに含むことから、人為堆積の可能性もある。また、本遺構の上面に土坑列が存在することから、整地土の可能性もある。

遺物出土状況 埋土中から土器4,062点、陶器(須恵器ないしは灰軸陶器)1点、木製品4点が出土した。土器の大半は古墳時代前期以前のものであり、SD0381埋土上層の遺物が攪拌の影響で本遺構埋土に混入した可能性が高い。なお、陶器片は細片であり図示していない。

出土遺物 8162はⅥ期～Ⅶ期壺C類。器壁の厚い口縁部が外傾して直線的に開く。端部には顕著な平坦面を形成し、凹面が認められる。口縁部中段に2孔1対の穿孔が認められる。8163はⅧ期～Ⅸ期壺H1a類。口縁部がわずかに外傾して直線的に開く。胴部は扁平というより球形に近いが、最大径の位置は中央からやや下がった位置となる。底部は極めて矮小で、中央がわずかに窪む。器壁が薄く、丁寧なミガキを施した精緻なつくりの土器である。8164はⅧ期～Ⅸ期壺。器高が10cmに満たない小型品である。非常に器壁が薄く、口縁部が屈曲して受口状となる。胴部には脚部が付くが、裾部を欠損す

るため形状は不明である。丁寧なつくりのため壺としたが、甕D類の形状にも類似する。8165～8168はIX期甕D類。8165は口縁部がわずかに屈曲するものの、全体が大きく外方に開く。端部を肥厚し、外傾する平坦面を作出する。8166は口縁部の屈曲が明瞭で、上段は直立したのちに外反する。打ち欠きが1箇所認められる。最大径は胴部中央よりやや上方に位置し、やや肩部が張る。8167、8168は器壁の薄い胴部に脚部が付く。付根部径が狭小となり、ハの字に開く。脚部端部には、内面に折り返しが認められる。8169はVI期～VII期高坏C類。口縁部内面に多条沈線が施文され、そこに焼成後穿孔が認められる。8170はIX期器台。浅い皿状を呈する受部から口縁部が外反し、端部は尖り気味に整形される。内外面の稜は明瞭に残る。8171はVI期～VII期手握ね土器D類。口縁部を欠損するため、形状は不明である。胴部は肩部が張り、底部は平底である。器面の一部に線刻にも見えるハゲが残り、タタキ痕も認められる。8172はIV期土製品。胎土がIV期に類似する。壺、甕のような容器類と考えられるが、底面らしき平坦面が楕円形の一部に見える。胴部は外傾して直線的に立ち上がる。8173は建築部材。全体的に腐食が著しく、下端は欠損している。断面方形を呈し、上方には深さ約4cmの段があり、端部は直線的に切断されている。

時期 古代以降の出土遺物は1点のみであるが、攪拌された埋土の状態や土坑列との関係などから、古代以降と考えられる。

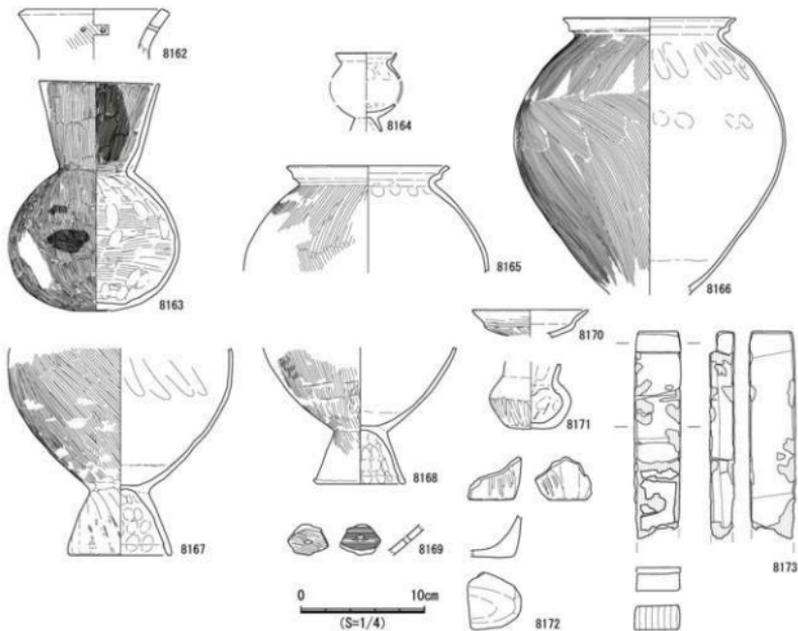


図 2368 SK06478 遺物実測図

土坑列2 (遺構：図2369・2370)

検出状況 東部東側南寄りの、10_4地点のST164と同一線上に位置する。西側は調査区域外にのび、平面形は明瞭であった。

形状 長軸長約0.3m～0.7mの、楕円形もしくは不整楕円形を呈する土坑21基から成る。検出長は約15.0mでほぼ直線的に並ぶものの、SK06767のみ列からやや離れる。土坑間の距離は約0.5mで、SK07151とSK07149の間は約1.2mと広い。土坑の深さはいずれも0.1m未満と浅く、底面は平坦なものや丸みを帯びるもの、凹凸のあるものなどがあり、一様ではない。なお、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土 単層もしくは2層に分層した。オリーブ黒色土中の鉄分の沈着が著しく、沈着部分の硬化が目立つ。また、ブロック土の混入が多い。

遺物出土状況 埋土中から土器5点が出土したものの、いずれも細片であり図示していない。

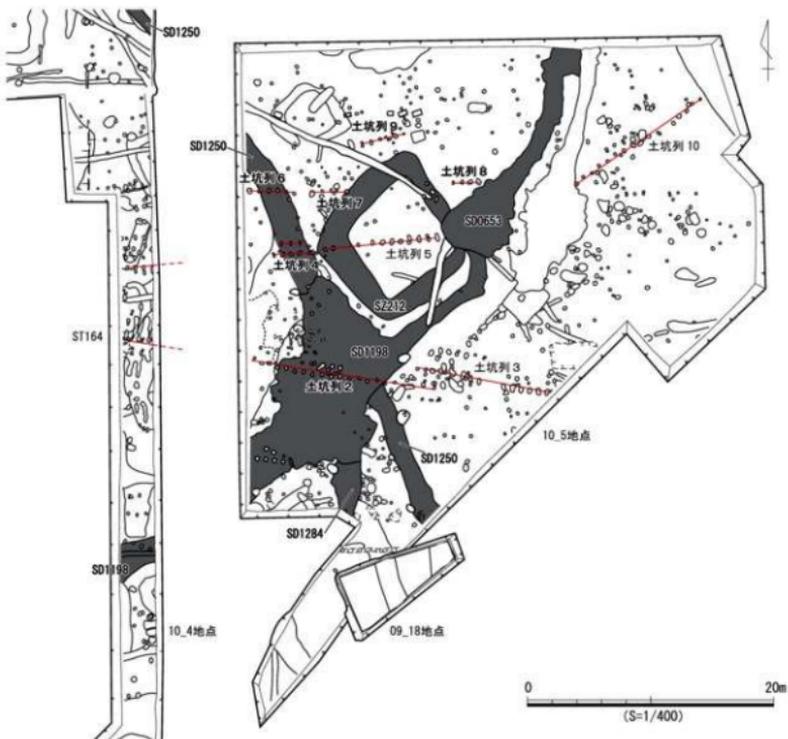


図2369 土坑列2～10位置図

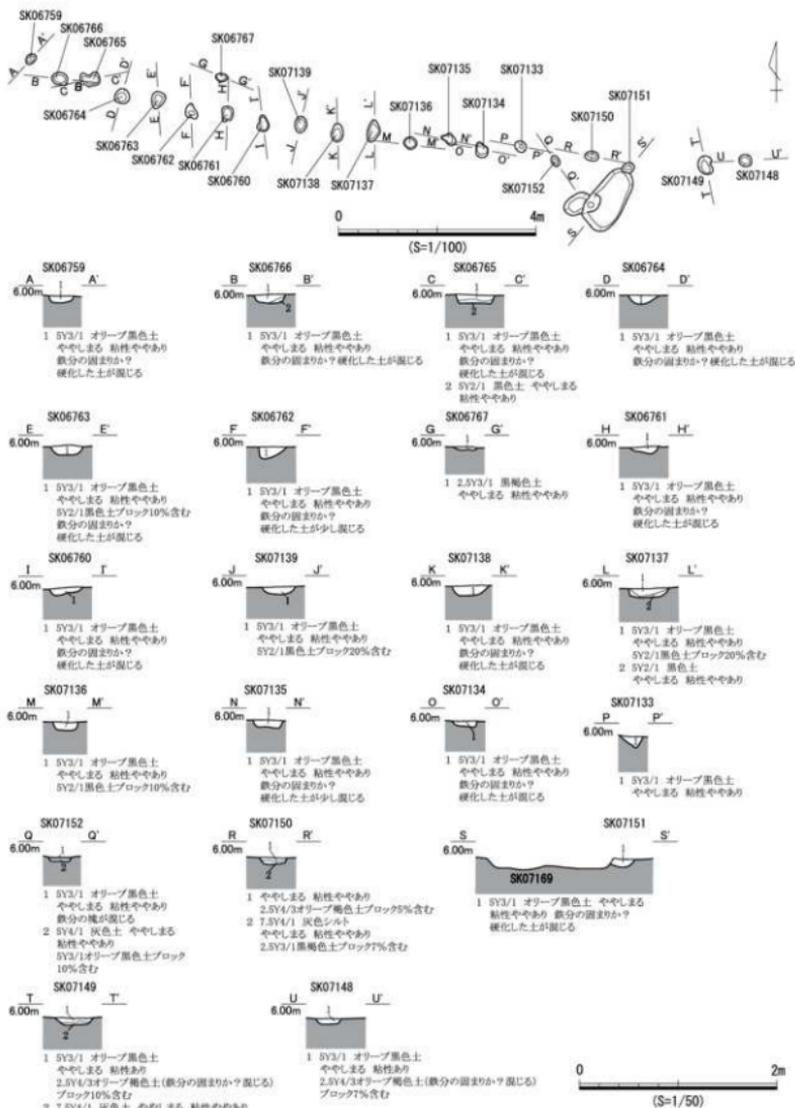


図 2370 土坑列2遺構面

土坑列3 (遺構: 図2369・2373、遺物: 図2371)

検出状況 東部東側南寄りに位置する。本遺構周辺は部分的にIV層が残存しており、本遺構はV層上面とIV層上面(もしくはIV層中)で検出した。平面形は明瞭であった。

形状 長軸長約0.5m~0.6mの、楕円形もしくは不整楕円形を呈する土坑11基から成る。検出長は約9.0mで、緩やかに南側に湾曲している。土坑間の距離は約0.4m~0.5mで、SK07179とSK07206の間は約1.8mと広い。土坑の深さは0.05m~0.15mであり、底面は凹凸のあるものが目立つ。なお、壁面の傾斜は急である。

埋土 いずれも2層に分層した。いずれもブロック土の混入が顕著であり、東側の土坑群の下層にはブロック土混じりの細砂が堆積している。

遺物出土状況 埋土中から土器9点、須恵器1点が出土した。須恵器1点はSK07181から出土した。しかし、いずれも細片である。



図2371 SK07181・SK07183 遺物実測図

出土遺物 8174は須恵器蓋。口縁端部に平坦面を有する。8175はⅦ期壺A1類。口縁部が大きく外反し、端部を下方に拡張する。摩擦が著しく、文様の有無は確認できない。

土坑列4 (遺構: 図2369・2372)

検出状況 東部東側南寄りに位置する。土坑の大半はSD1250の埋土上面で検出したが、平面形は明瞭であった。

形状 長軸長約0.2m~0.5mの不整楕円形を呈する土坑8基から成る。検出長は北側が約1.7m、南側が約3.3mであり、2列がほぼ直線的に並ぶ。土坑間の距離は約0.3m~0.6mで、北列と南列の土坑間の距離は約0.5mである。土坑の深さはいずれも0.1m未満と浅く、底面は平坦なものが多く、壁面の傾斜は急である。

埋土 いずれも単層である。北列の土坑はオリーブ黒色土中の鉄分の沈着が著しく、沈着部分の硬化が目立つ。

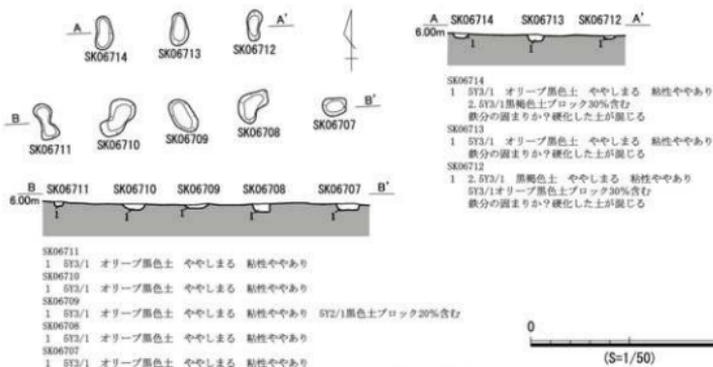
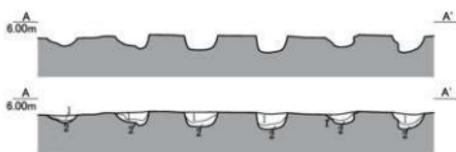
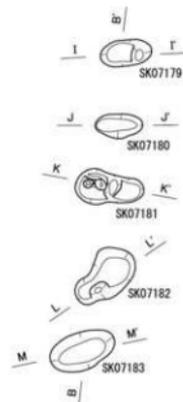
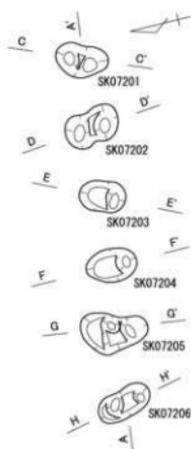
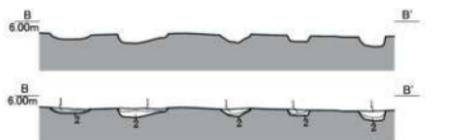


図2372 土坑列4遺構図



- SK07201
 1 5Y2/1 黒色土 ややしまる 粘性あり
 2 10Y3/1 オリーブ黒色細砂 ややしまる 粘性なし 5Y2/1黒色土ブロック30%含む
- SK07202
 1 5Y2/1 黒色土 ややしまる 粘性あり
 2 5Y2/1 黒色土 しまりなし 粘性あり 7.5Y3/1オリーブ黒色細砂ブロック15%含む
- SK07203
 1 5Y2/1 黒色土 ややしまる 粘性あり
 2 7.5Y3/1 オリーブ黒色細砂 ややしまる 粘性なし 5Y2/1黒色土ブロック7%含む
- SK07204
 1 5Y2/1 黒色土 ややしまる 粘性あり 7.5Y4/1灰色土ブロック5%含む
 2 7.5Y3/1 オリーブ黒色細砂 ややしまる 粘性なし 5Y2/1黒色土ブロック10%含む
- SK07205
 1 5Y2/1 黒色土 ややしまる 粘性あり 7.5Y4/1灰色土ブロック5%含む
 2 7.5Y3/1 オリーブ黒色細砂 ややしまる 粘性なし 5Y2/1黒色土ブロック10%含む
- SK07206
 1 5Y2/1 黒色土 ややしまる 粘性あり 7.5Y4/1灰色土ブロック5%含む
 2 7.5Y3/1 オリーブ黒色細砂 ややしまる 粘性なし 5Y2/1黒色土ブロック7%含む



- SK07179
 1 2.5Y3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性あり
 2 5Y3/1 オリーブ黒色土 しまりなし 粘性あり 7.5Y4/1灰色シルトブロック30%含む
- SK07180
 1 2.5Y3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性あり
 2 5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性あり 5Y4/1灰色シルトブロック20%含む
- SK07181
 1 2.5Y3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性あり
 2 5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性あり 5Y4/1灰色シルトブロック15%含む
- SK07182
 1 5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性あり 7.5Y4/1灰色土ブロック20%含む
 2 7.5Y4/1 灰色シルト ややしまる 粘性ややあり 5Y3/1オリーブ黒色土ブロック10%含む
- SK07183
 1 5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性あり 7.5Y4/1灰色土ブロック15%含む
 2 7.5Y4/1 灰色シルト ややしまる 粘性ややあり 5Y3/1オリーブ黒色土ブロック10%含む

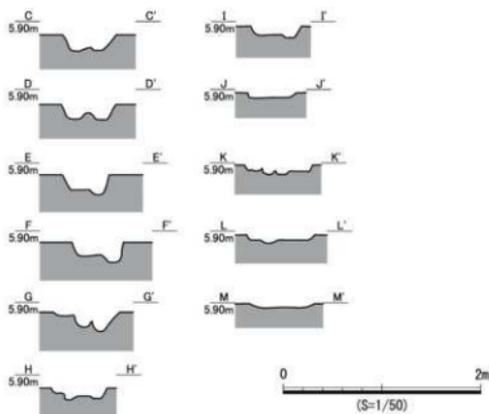


図 2373 土坑列3遺構図

遺物出土状況 埋土中から土器12点が出土したものの、いずれも細片であり図示していない。

土坑列5（遺構：図2369・2374）

検出状況 東部東側南寄りの、SZ212方台部に位置する。V層表面面等で検出し、いずれも平面形は明瞭であった。

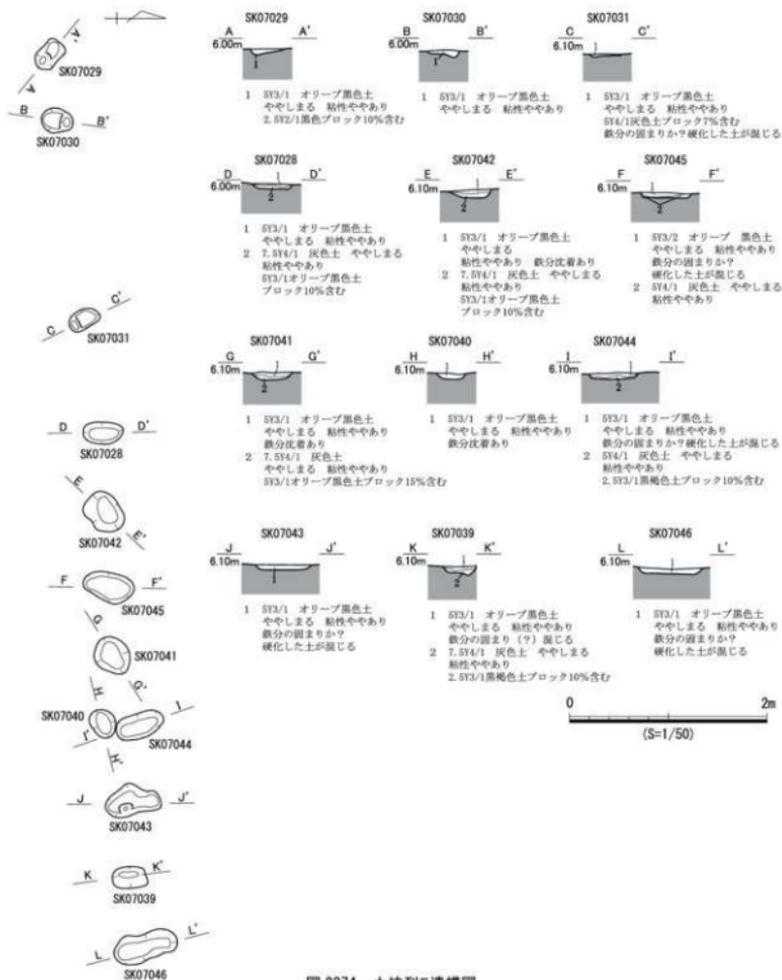


図 2374 土坑列5遺構図

形状 長軸長約0.3m～0.6mの、楕円形もしくは不整楕円形を呈する土坑12基から成る。西端の2基は平面的にやや離れるものの、主軸方位が他と同じであるため同一の土坑列と判断した。検出長は約9.5mでほぼ直線的に並び、土坑間の距離は約0.3m～0.9mで、SK07030とSK07031の間は約1.8mと広い。土坑の深さはいずれも0.1m未満と浅く、底面は平坦なものや丸みを帯びるもの、凹凸のあるものなどがあり、一様ではない。なお、壁面の傾斜はおよそ急であるが、SK07029やSK07031などは一方向の壁面傾斜が緩やかである。

埋土 単層あるいは2層であるが、埋土中の鉄分の沈着が著しく、沈着部分の硬化が目立つ。また、ブロック土を多く含む。

遺物出土状況 埋土中から土器8点が出土したものの、いずれも細片であり図示していない。

土坑列6（遺構：図2369・2375）

検出状況 東部東側南寄りに位置する。土坑の大半はSD1250の埋土上面で検出したが、平面形は明瞭であった。

形状 長軸長約0.2m～0.5mの、楕円形もしくは不整楕円形を呈する土坑5基から成る。検出長は約3.2mでほぼ直線的に並び、土坑間の距離は約0.4m～0.5mである。土坑の深さはいずれも0.1m未満と浅く、底面は平坦なものが多く、壁面の傾斜は急である。

埋土 単層あるいは2層に分層した。埋土中の鉄分の沈着による硬化や、ブロック土の混入が認められる。

遺物出土状況 埋土中から土器2点が出土したものの、いずれも細片であり図示していない。

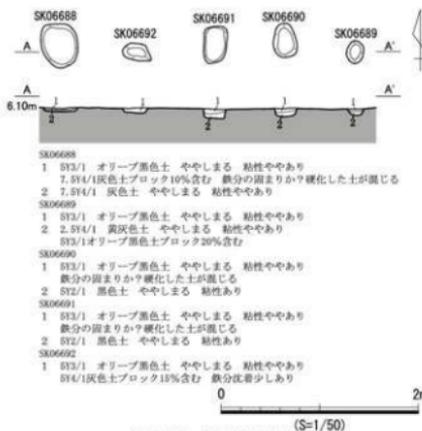


図 2375 土坑列6遺構図

土坑列7（遺構：図2369・2376）

検出状況 東部東側南寄りに位置する。V層表出面で検出し、平面形は明瞭であった。

形状 長軸長約0.2m～0.4mの、楕円形もしくは不整楕円形を呈する土坑4基から成る。検出長は約2.3mでほぼ直線的に並び、土坑間の距離は約0.2m～0.5mである。土坑の深さはいずれも0.1m未満と浅く、底面は平坦なものや丸みを帯びるものがある。なお、壁面の傾斜は比較的急であるが、SK06938のみ緩やかである。

埋土 いずれも単層である。埋土中の鉄分の沈着による硬化や、ブロック土の混入が認められる。

遺物出土状況 いずれの土坑からも遺物は出土しなかった。

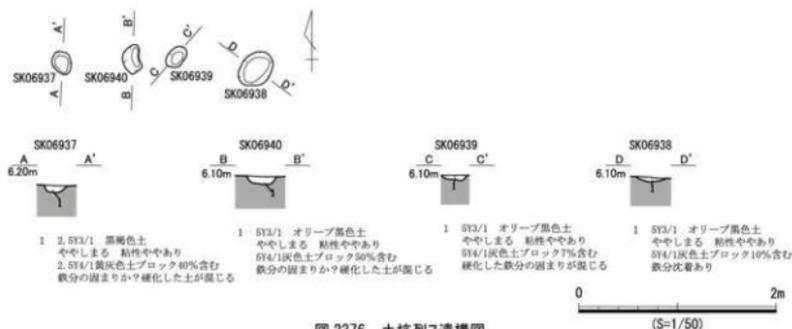


図 2376 土坑列7遺構図

土坑列 8 (遺構: 図 2369・2377)

検出状況 東部東側南寄りに位置する。V層表出面で検出し、平面形は明瞭であった。

形状 長軸長約0.2m~0.5mの、楕円形もしくは不整形を呈する土坑4基から成る。検出長は約2.3mでほぼ直線的に並び、土坑間の距離は約0.3mである。土坑の深さはいずれも0.1m以下と浅く、底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は緩やかである。

埋土 単層あるいは2層に分層した。埋土中の鉄分の沈着が目立ち、部分的に硬化が認められる。

遺物出土状況 埋土中から土器1点が出土したものの、細片であり図示していない。

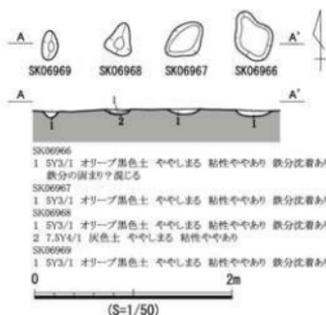


図 2377 土坑列8遺構図

土坑列 9 (遺構: 図 2369・2378)

検出状況 東部東側南寄りに位置する。V層表出面で検出し、平面形は明瞭であった。

形状 長軸長約0.1m~0.9mの、楕円形もしくは不整形楕円形を呈する土坑11基から成る。他の土坑列と比較して、各土坑の規模の差が大きい。検出長は約5.3mで、緩やかに南側に湾曲している。土坑間の距離は約0.2m~0.5mである。土坑の深さはいずれも0.1m以下と浅く、底面は平坦なものと丸みを帯びるものがある。なお、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土 単層あるいは2層に分層した。埋土中の鉄分による硬化や、ブロック土の混入が認められる。

遺物出土状況 埋土中から土器5点が出土したものの、いずれも細片であり図示していない。

土坑列 10 (遺構: 図 2369・2379)

検出状況 東部東側南寄りに位置する。V層表出面で検出し、平面形は明瞭であった。

形状 長軸長約0.2m～0.5mの、楕円形もしくは不整楕円形を呈する土坑18基から成る。検出長は約12.4mでほぼ直線的に並ぶものの、他の土坑列と違い南西から北東方向の主軸方位をもつ。土坑間の距離は約0.5mで、SK06922とSK06927の間は約1.1mと広い。土坑の深さはいずれも約0.1mもしくは0.1m未満と浅く、底面は平坦なものや丸みを帯びるもの、凹凸のあるものなどがあり、一様ではない。なお、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土 単層あるいは2層に分層した。埋土中の鉄分の沈着による硬化や、ブロック土の混入が認められる。

遺物出土状況 埋土中から土器9点が出土したものの、いずれも細片であり図示していない。

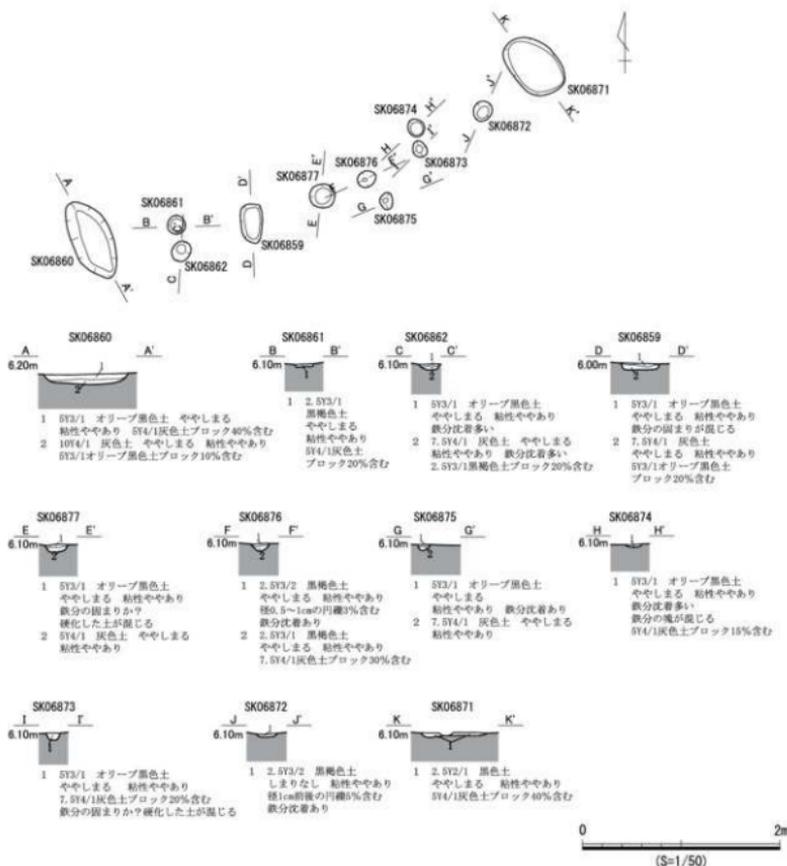


図 2378 土坑列9遺構図

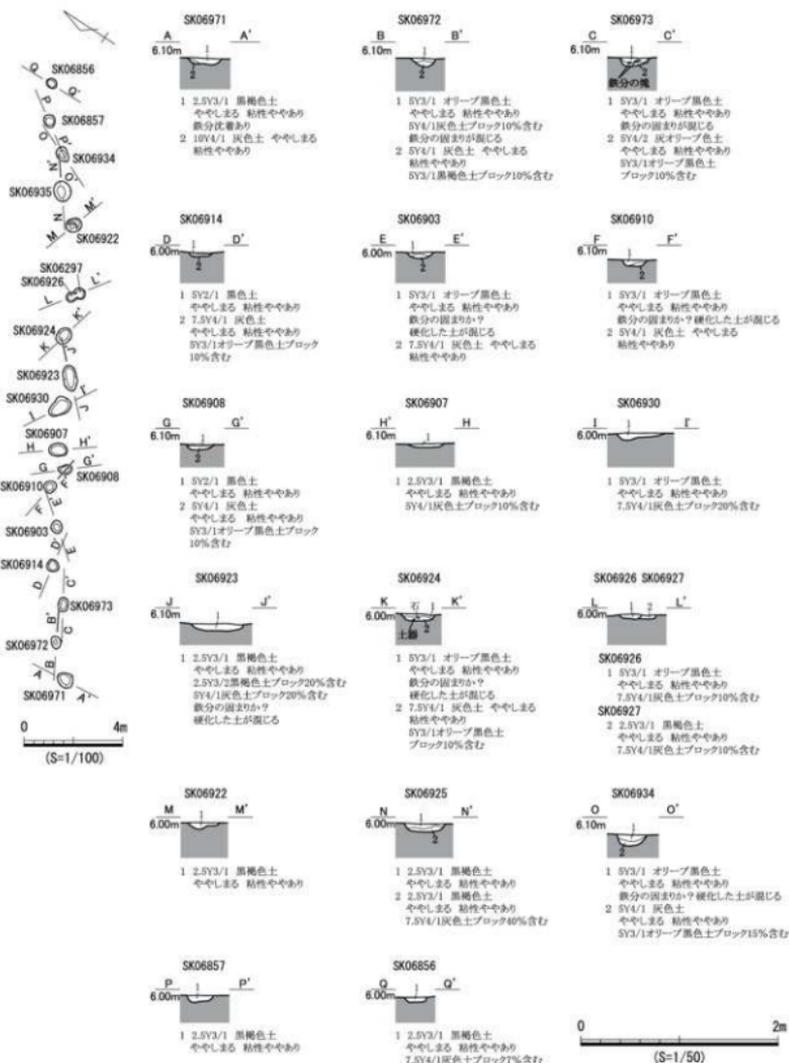


図 2379 土坑列 10 遺構図

4 耕作跡

ST164 (遺構: 図2381、遺物: 図2380)

検出状況 東部中央南寄りに位置し、東西側は調査区域外にのびる。V層上面で検出し、平面形は明瞭であり、SZ207とSZ208を切る。掘形の深い長楕円形の土坑が列状に並ぶことやブロック土の混入が目立つこと、土坑底面の凹凸が著しいことなどから、何らかの耕作跡と判断した。

形状 検出時の全体形は不整形を呈していたが、底面では南北方向に主軸をもつ長楕円形状の土坑を北側に3基、中央に3基、南側に2基、それぞれ並んで検出した。北側の土坑の底面は南北両端が楕円形状に窪み、中央の土坑は底面の凹凸が著しい。また、いずれも掘形は深く、壁面の傾斜は急である。一方、南側の土坑は底面が丸みを帯び、壁面の傾斜は緩やかである。なお、底面中央の土坑列は、10.5地点で検出した土坑列4の延長線上に位置していることから、一連の遺構である可能性が高い。

埋土 南側の土坑は単層であるが、中央から北側の土坑は3層～4層に分層した。南側の土坑を除いてブロック土の混入が顕著である。

遺物出土状況 埋土中から土器472点、須恵器3点、石器類1点が散在して出土した。

出土遺物 8176は古墳時代後期以降の

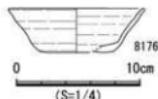


図2380 ST164 遺物実測図

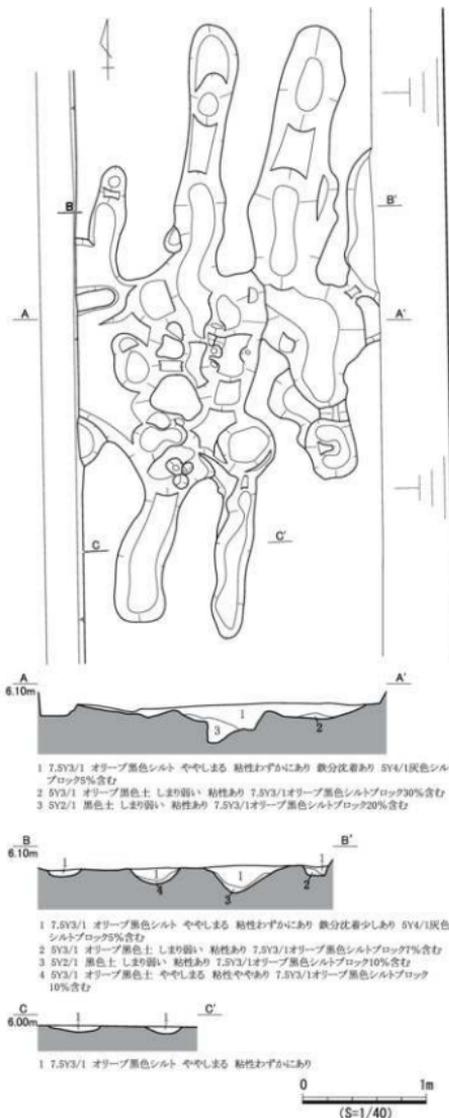


図2381 ST164 遺構図

須恵器坯身。体部がやや内反り気味に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。

時期 出土遺物の時期から、古墳時代中期以降と考えられる。

5 杭列

SS011 (遺構：図 2383、遺物：図 2382)

検出状況 東部中央の遺構密集域に位置する。本遺構を構成する小穴は4基確認でき、いずれもSZ204の方台部にある。

形状 主軸方位は真北から62°東に振っており、規模は小穴の芯々間で2.85m以上、小穴間の距離は約0.9～1.0mである。小穴は円形から楕円形を呈し、柱穴の規模の平均値は長軸長0.26m、深さ0.08mである。掘形はいずれも浅く、底面は平坦である。

埋土 いずれも土層断面で柱痕跡を確認できておらず、単層もしくは2層に分層できる。P1のみ中央やや東寄りに杭が垂直に打ち込まれていた。

遺物出土状況 柱穴から土器2点、木製品1点が出土した。

出土遺物 8177は杭である。下端は多方向から鋭角に削り出しており、上方は樹皮が部分的に残存している。

時期 出土遺物から判断できないものの、溝や自然流路以外で杭が残存している状況から古墳時代中期以降と考えられる。

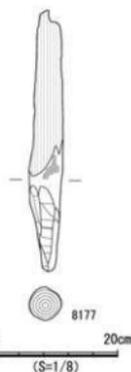


図 2382 SS011 遺物実測図

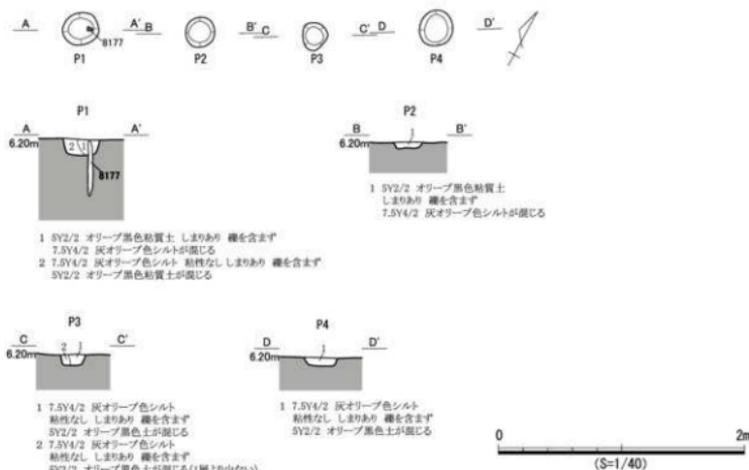


図 2383 SS011 遺構図

第5節 遺物包含層出土遺物

【土器類】 8178はⅡ期壺。貼付突帯上に刺突を施し、流水文らしき文様が認められる。8179、8180はⅣ期壺C類。8179は口縁部が直線的に外傾し、端部には平坦面を形成する。口縁部内面には、端部際にクシによる刺突文を施文し、その内側に円形刺突文を加える。幅広い口縁端部には、クシによる羽状文が施文される。8180は口縁部が大きく外反し、端部を下方に大きく拡張する。口縁部内面には羽状文を施文し、その上に瘤状突起を貼付する。端部には複数の凹線が認められる。8181～8183はⅣ期壺H類。8181は斜格子文帯を沈線で区画する。8182は胴部上半に直線文が認められる。8183は斜め方向のハケ調整の後、逆方向の沈線を加える。その両側に沈線が認められる。8184はⅤ期壺A1b類。口縁部が大きく外反し、端部に平坦面を形成する。端部には擬凹線を施すと考えられるが、磨耗が進行しているため不明瞭である。頸部直下から直線文と刺突2帯、直線文、刺突文、直線文、波状文の順に施文されるが、磨耗が著しい。胴部最大径は中央からやや上方に位置し、底部はやや突出する。8185はⅤ期壺B1類。器壁の厚い口縁部が短く外反する。8186はⅤ期～Ⅵ期壺A類。頸部直下からクシによる直線文帯を3帯配置し、その間を二枚貝による刺突文帯2帯で充填する。底部は平底で、やや突出する。8187はⅣ期壺C類。口縁部が外反して端部に平坦面を形成し、ハケ工具によって縦位のキザミを密に施す。大型品と考えられる。8188はⅤ期～Ⅵ期壺H2a類。口縁部が直線的に外傾し、端部がわずかに内湾する。胴部は球形に近い。8189はⅤ期～Ⅵ期壺K類。やや丸みを帯びる端部に径3mm程度の小孔が並ぶ。8190はⅥ期～Ⅶ期壺B2a類。口縁部が強く外反し、端部に幅広く平坦面を形成する。口縁部には焼成前に穿たれた2孔の孔が認められる。8191はⅥ期～Ⅶ期壺B2b類。頸部がわずかに直立気味となり、口縁部が頸部から外反する。端部には強い平坦面が認められる。口縁部内面には約1cm間隔で2条の沈線が縦方向に引かれる。一方の縦沈線の外側には、幅約2cmの赤彩が認められる。8192はⅥ期～Ⅶ期壺C類。口縁部がわずかに内湾し、内面には3条の線刻が認められる。8193はⅥ期～Ⅶ期壺K類。胴部最大径付近に太い貼付突帯を形成し、突帯上に沈線を1条施文する。8194はⅥ期～Ⅶ期壺蓋。天井部に摘みがつき、平面形は楕円形である。胎土や調整からⅥ期～Ⅶ期と考えられる。8195、8196はⅥ～Ⅶ期壺。いずれも線刻が認められるが、小片のため全容は不明である。8197はⅦ期壺A3類。口縁部が外反し、端部をわずかに下方に拡張する。口縁部内面には段を形成し、赤彩を施す。段より上面にはクシ状工具による文様が認められる。内側はクシを押し当てることで刺突状の列点を作り出し、外側はクシを外方に向けて引くことで沈線状の線掃を作り出す。端部外面には擬凹線が認められ、内面と同様に赤彩を施す。頸部直下には粘土を張り付けた後にナデで成形し、突帯状の凸部を作り出す。それ以下の胴部上半には直線文帯と山形文帯を交互に配置し、最下段には細かい刺突を配する。胴部にも赤彩を施して加飾する。8198はⅦ期壺A5類。口縁部が短く外反して立ち上がり、端部を上方に大きく拡張する。内面にはクシによる羽状文を施文するが、やや乱雑である。端部にはほぼ直立する平坦面があり、羽状文及び刺突文を施文する。下端には円形浮文を貼り付け、その上に竹管文を施文する。円形浮文上には赤彩が認められる。8199はⅦ期壺H2b類。口縁部が内湾して長く立ち上がり、外面に精緻な加飾を施す。端部直下から多条沈線を施文し、その間に山形文、刺突文を規則的に配置する。クシによる刺突文を中心に、クシによる山形文とヘラによる山形文を上下に対応させて配置する。8200はⅦ期壺K類。口縁部が外反し、端部で直立

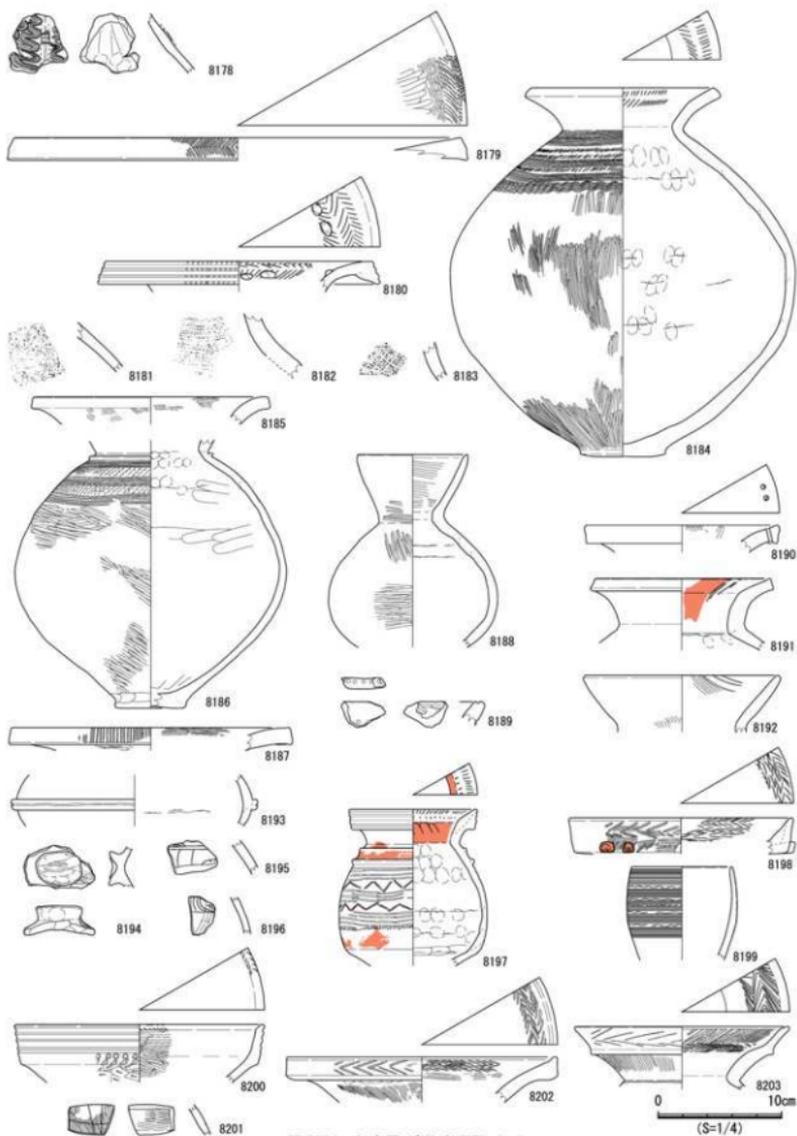


图 2384 包含層 遺物実測图 (1)

気味に立ち上がる。先端部には内傾面を形成し、面の両端に刺突を施す。端部外面には上方に太く明瞭な沈線を4条施し、下方には円形刺突文と刺突を施す。8201はⅦ期壺。縦3条、横1条の線刻が認められる。8202はⅧ期～Ⅹ期壺。口縁部が大きく外反し、端部を上方に拡張する。端部平坦面及び口縁部内面には羽状文が認められる。8203はⅧ～Ⅹ期の柳ヶ坪型壺口縁部。8204はⅩ期壺。口縁部が外反し、段を境界として端部はさらに強く外反する。外面の稜は、貼付突帯状に明瞭である。8205はⅩ期壺。口縁部が大きく開き、端部付近で屈曲する。8206はⅩ期壺。直線的に外傾する頸部と口縁部の境に暗文状の沈線を施して、二重口縁状の器形に似せている。外面には煤が付着する。8207はⅩ期小型壺。内面にタテミガキが認められる。8208はⅢ期甕。口縁部が外反し、端部に平坦面を形成する。下端にキザミが認められるが、口縁部内面から粘土がはみ出して端部の一部を覆う。8209はⅣ期甕底部。8210はⅣ期甕A類。底部から胴部にかけてハケ調整を施す。8211はⅤ期甕A2a類。口縁部が強いヨコナデとともに短く明瞭に屈曲する。内面に顕著な凹面を形成して端部が直立し、外面には刺突を加える。頸部の屈曲は弱く、胴部には直線文、波状文が認められる。8212はⅤ期～Ⅶ期甕把手。弧状を呈する。8213はⅥ期甕A2b類。口縁部がくの字に屈折し、端部はナデによって受口状に直立する。煤が付着する。胴部は丸く、肩部が強く張る。8214はⅥ期～Ⅶ期甕A3類。口縁部が短く外反し、端部付近で屈曲して直立気味となる。最大径部は胴部中央よりやや上方に位置し、やや肩部が張る。底部には脚部がつき、ハの字に開く。8215はⅥ期～Ⅶ期甕A3類。口縁端部が短く屈曲して直立し、受口状を呈する。端部を丸くおさめ、外面に刺突を加える。頸部直下に直線文、それ以下に刺突文を施す。8216、8217はⅥ期～Ⅶ期甕D類。8216は脚部がハの字に開き、端部を内面に折り返して接地面を仕上げる。8217は口縁部を欠損する。8216、8217は、胎土や器形の大きさなどから、同一個体の可能性がある。8218はⅩ期甕D類。口縁部と胴部の境に沈線を有する。8219はⅤ期鉢A2類。口縁部が屈曲して明瞭な受口状を呈し、端部には刺突を加える。頸部に直線文、胴部に微小な円形刺突文、刺突文風の様相が認められる。8220はⅤ期～Ⅵ期鉢A2類。口縁部が端部付近で屈曲し、受口状を呈する。端部にはわずかに平坦面が認められ、外面には刺突を加える。頸部以下胴部上半に限って直線文及び刺突文を施し、下半は無文となる。8221はⅥ期～Ⅶ期鉢A2類。口縁部が外反し、端部が強く屈曲して短く直立する。屈曲部内面はくの字に屈折するが、外面には粘土を貼付して直立部を形成する。胴部には直線文、下方に刺突文を施す。口縁部外面には煤が付着する。通常の鉢A類は大半の資料が口径16cm前後であるのに対して、本資料は口径約22cmに及び大型である。8222はⅥ期～Ⅶ期鉢B2類。口縁部が大きく外傾しながら直線的に開く。端部付近は内湾して直立気味となり、端部には平坦面をもつ。底部には穿孔が認められる。7223はⅦ期鉢D類。口縁部が内湾して立ち上がり、端部は尖り気味となる。内面、外面ともに丁寧にミガキ調整を施し、口縁部には片口を有する。精製品である。8224はⅤ期高坏B3a類。口縁部が坏底部から直線的に立ち上がり、強く外反する。口縁部外面にはやや雑な波状文を施す。8225はⅤ期高坏B3b類。坏底部から口縁部が強く屈曲し、端部が外反する。脚部は付根から円錐状に開き裾部は大きく外反する。透孔を3方向に配置する。8226はⅤ期高坏J類。外反する脚裾部に斜格子文が認められる。8227はⅤ期～Ⅶ期高坏I2類。口縁端部付近がわずかに外反し、端部にわずかな平坦面を形成する。端部直下には、直線文及び振幅の小さい波状文が認められる。8228はⅤ期～Ⅵ期高坏I2類。坏底部から口縁部が強く屈曲して内湾し、端部がわずかに外反する。8229はⅥ期～Ⅶ期高坏B4類。坏底部から口縁部が長く

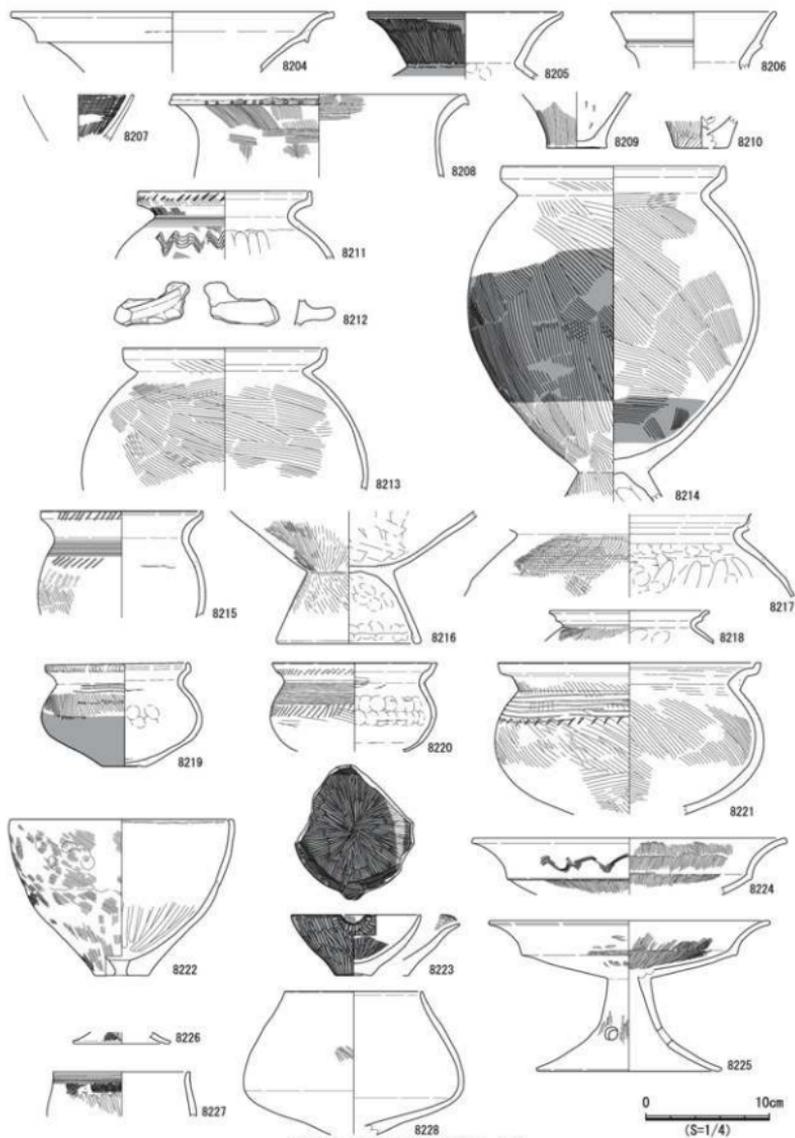


图 2385 包含層 遺物実測図 (2)

外反する。脚部は付根から円錐状に開き裾部は大きく外反する。8230はⅥ期高坏C類。脚部が円錐状に開き、2孔1対の透孔を境に下方は内湾する。8231はⅦ期高坏G3c類。やや内湾する口縁端部付近には、内外面ともに加飾が認められる。内面は多条沈線のみである。外面は端部にクシによる山形文を施文する。それ以下に多条沈線を施文し、その間にクシによる山形文が認められる。小片のため全容不明だが、精製品と考えられる。8232はⅦ期高坏D類。口縁部がわずかに内湾する。脚部は円錐状に大きく開き、透孔を3方向に配置する。8233はⅧ期高坏。坏部は浅い皿状を呈し、端部を屈曲させて水平面を形成する。脚部が付根から端部まで外反し、縦2孔1対の透孔を3方向に配置する。8234はⅦ期高坏C4d類。口縁部が直線的に外傾し、端部付近がわずかに内湾する。内面には広く多条沈線を施文し、その間に山形文、対向山形文を加える。8235はⅦ期高坏C類。脚部が内湾し、接地面を平坦に仕上げる。8236はⅦ期高坏D類。脚部が付根から円錐状に開く。透孔は2孔1対となり、2方向に配置する。8237はⅦ期高坏G3b類。坏底部には明瞭に段が残り、口縁部が内湾して立ち上がる。端部付近は内湾傾向が顕著で、端部直下には7条の多条沈線が認められる。8238はⅦ期高坏G3c類。口縁部外面及び内傾する端部に多条沈線を施文し、口縁部外面ではその間に山形文、刺突文を配する。8239はⅧ期高坏。脚部中央がやや膨らむ。8240はⅤ期器台A1b類。口縁部が外傾し、端部を下方に拡張する。脚部は直立気味だが裾部は大きく外反する。透孔を3方向に配置する。8241はⅤ期器台A1類。受部が外反し、端部を下方に拡張する。端部平坦面は強いナデによって中央が凹み、円形浮文を3個1組で貼付した痕がみられる。受部内面及び端部に赤彩を施す。8242はⅦ期～Ⅷ期器台C類。坏底部が浅い皿状を呈する。8243はⅤ期～Ⅵ期器台B1a類。受部が外方へ大きく直線的に開き、端部には顕著な平坦面をもつ。脚部は付根から柱状部が直立し、透孔を境に裾部が円錐状に開く。透孔は3方向に配置される。8244はⅤ期器台A1b類。口縁部が直線的に開き、端部付近がわずかに外反する。端部には顕著な平坦面を形成する。脚部は柱状に直立し、裾部が開く。透孔を3方向に配置する。8245はⅦ期器台B4類。口縁端部を上下に拡張し、端部を加飾する。特に下方への拡張は極端で、外面には多条沈線間にはクシ状工具による刺突文、山形文を施文する。精緻なつくりの資料といえる。8246はⅤ期～Ⅵ期器台A類。端部を上方に拡張し、端部平坦面には擬凹線が認められる。口縁部内面には円形刺突文が施文される。8247はⅧ期器台。受部底部から脚部が円錐状に開き、端部付近で外反する。透孔は3方向に向き、上下2列配置される。8248はⅥ期～Ⅶ期手捏ね土器C類。底部が平底で口縁部は短く、ほぼ直立する。8249はⅥ期～Ⅶ期手捏ね土器C類。平底の底部から口縁部が短く直立する。8250はⅥ期～Ⅶ期手捏ね土器E類。台付甕B類等を模したものと考えられる。8251はⅥ期～Ⅶ期手捏ね土器E類。台付甕を模して作ったと考えられる小型品で、外面には輪積み痕状の粘土紐が認められる。8252はⅥ～Ⅶ期の壺蓋と考えられる。天井部は丸く膨らみ、ツマミ部分は形成されない。天井部外面には、一部にジグザグ状の薄い線刻が認められる。端部はやや開くように考えられるが、全体形状は不明である。8253はⅥ期～Ⅶ期の土製品。底部は円形で中心部が窪む。底部から胴部がわずかに外傾し、直線的に長く立ち上がる。8254はⅦ期手焙り形土器。覆部の小片で斜格子文が認められる。沈線が3条認められるが、その沈線を挟んで斜格子文の単位が異なっている。8255は古代須恵器壺。胴部に波状文、直線文が認められる。8256は古代須恵器の横瓶。内面のロクロ目が顕著である。8257は古代灰釉陶器の段皿。口縁部が直線的にのびる。8258は中世羽釜。胴部に鈿を付け、その上部に屈曲が認められる。8259は中世土師器碗。底部片であり、高台が剥落

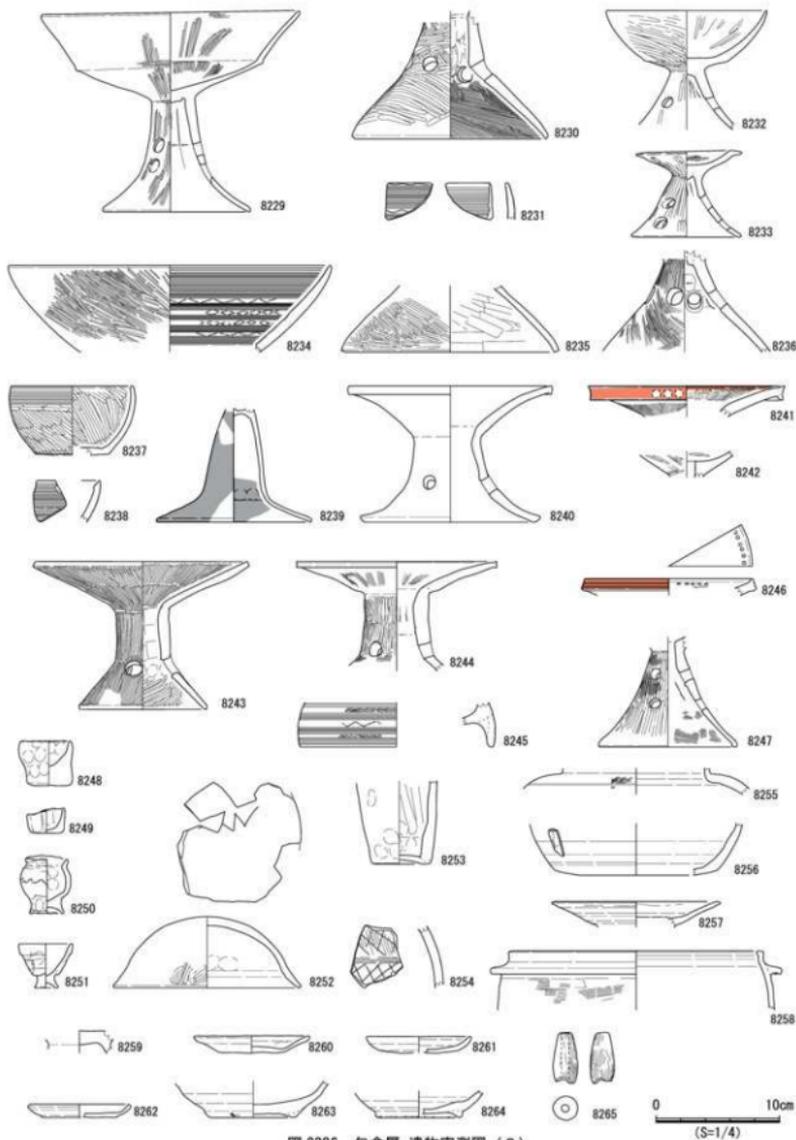


图 2386 包含層 遺物実測図 (3)

する。8260、8261は中世土師器皿。8260は胴部が内反り気味に立ち上がるが、8261は内湾する。8262は中世小皿。口縁端部に面を有する。8263、8264は中世山茶碗。8263は見込み段が認められないが、8264は明瞭な段を有する。8265は時期不明の土製品。管状土錘で、下端は折損している。

【石器類】 8266、8267は打製土鏝。8266は側辺中央部が「く」の字状に窪み、基部は浅い袢りが入り、脚部先端は丸みを帯びる。8267は鏝身が長く、有茎である。8268は石錐。錐部が細身であり、先端は鈍角を呈する。8269は刃器。成形のために周縁を打ち欠き鈍角な刃部を作出している。また、刃部には使用によるものと考えられる摩耗部分がある。8270は磨製石斧。両側縁が平行し、刃部を研磨により作出している。8271は石包丁。表面が剥落しており使用痕は確認できない。穿孔及びその痕跡が2箇所確認できる。8272～8276は叩石。8272は長楕円礫の上下端部に敲打痕が残り、表面の一部を砥面として利用している。8273は扁平な円礫の側縁と表面に敲打痕が残り、裏面は自然面を砥面として利用している。8274は垂円礫の頂部に明瞭な敲打痕が残り、裏面は平坦である。8275と8276は自然面に敲打痕が残り、8275は大きな剥離面の上から作出された細かい剥離面が観察できる。8277～8282は砥石。8277～8280は大型の垂円礫を素材とし、8277は割れた面の縁辺に敲打痕が、8278と8279は砥面の縁辺に敲打痕がそれぞれ残る。8281は断面方形の砥石であり、砥面が4面で上下は折損している。8283は有溝砥石であり、小型の楕円礫を素材とする。8284は不整形を呈し、上面と側面に剥離痕が認められる。8282は軟質な凝灰岩であり、断面方形を呈し、線状痕が明瞭に残る。8285は管玉。縦方向にほぼ半分が割れている。8287は被熱礫。垂円礫であり、その一面が真っ黒に炭化し、反対側の面が被熱し赤褐色を呈している。SD1198出土の被熱した礫に類似する。8286はヒスイ製の用途不明品。玉類の未製品か。なお、石器類のうち、8274と8276はNR015出土遺物、8273はSD0495出土遺物、8286はJP08-IVa層出土遺物である。『荒尾南遺跡B地区I』や本書西部域で掲載できなかったため、ここで報告した。

【木製品】 8288は指物箱。下端は直線的に整形されているが、他は欠損している。8289～8291は棒材。8289は断面半円形を呈し、下端は丸く整形されている。また、8290は上端が平らに、8291は上端が斜めに整形されている。8292はその他の加工材。上下に小孔が穿たれ、上端を4方向から斜めに削って尖らせ、下端は平坦である。

【金属製品】 8293は銅鐸飾耳。双頭渦文飾耳の破片で、表裏面に渦文があり、下端は欠損している。06_19地点MO18グリッドIb層から出土した。8294～8296は銅鏝。8294は中央に直径0.3cm～0.4cmの円孔が2つ穿たれている大型の無茎鏝である。鏝身側縁は弱い膨らみをもって三角形を呈し、基部は明瞭な腸袢をなす。8295と8296は当遺跡で最も多く出土している形態の銅鏝であり、鏝身側縁は8295は直線的、8296はわずかに内湾してともに長五角形状を呈する。基部はいずれも平基で、8295の基部には銚型のずれが認められる。8297は鉛玉。球形を呈し、重量9.5gである。8298～8304は銭貨。8298は開元通寶、8299は景德元寶、8300は祥符元寶、他はいずれも寛永通寶（新寛永）で、8304の背は十一波である。8305～8307は煙管。8305と8306は雁首であり、8305は脂反して屈折している。8307は吸口であり、肩と口付の境に段がある。8308と8309は釘。いずれも断面方形を呈し、上端は屈折している。8310と8311は不明金属製品。棒状であり、断面形は不整形もしくは隅丸方形を呈する。8312は鉸貝か。十字状を呈し、上下端部は三角形に突出し、右端は折損している。

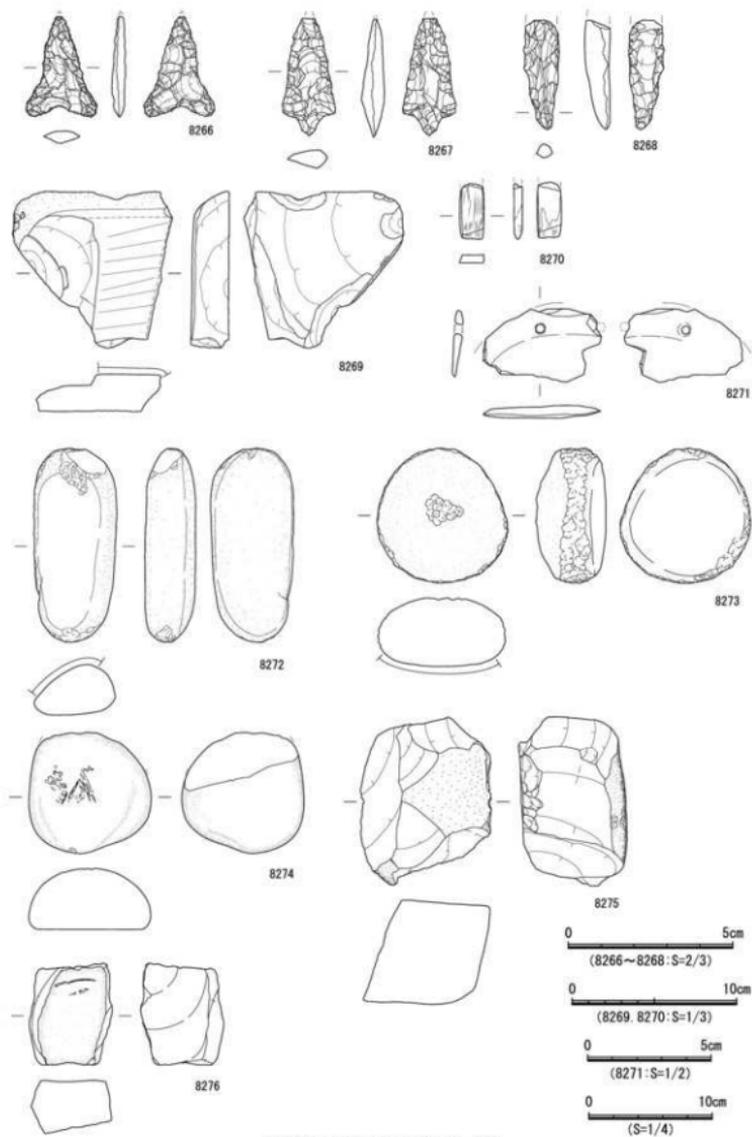


图 2387 包含層 遺物実測图 (4)

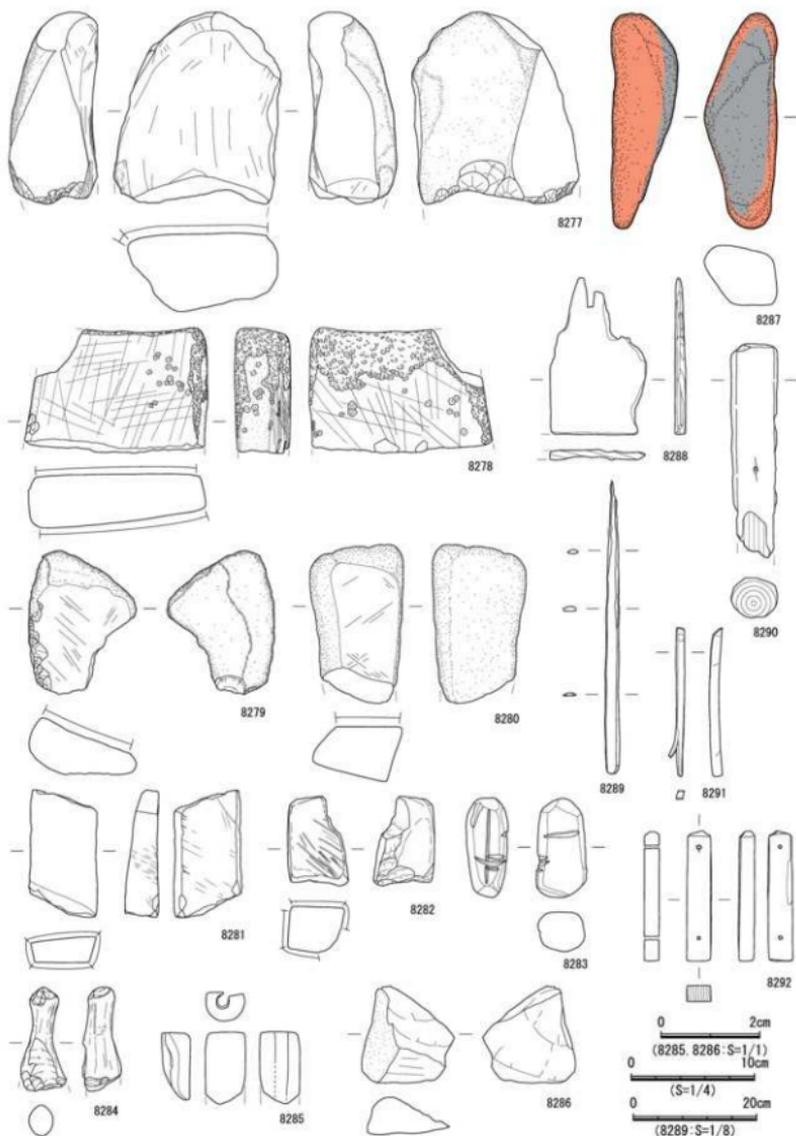


図 2388 包含層 遺物実測図 (5)

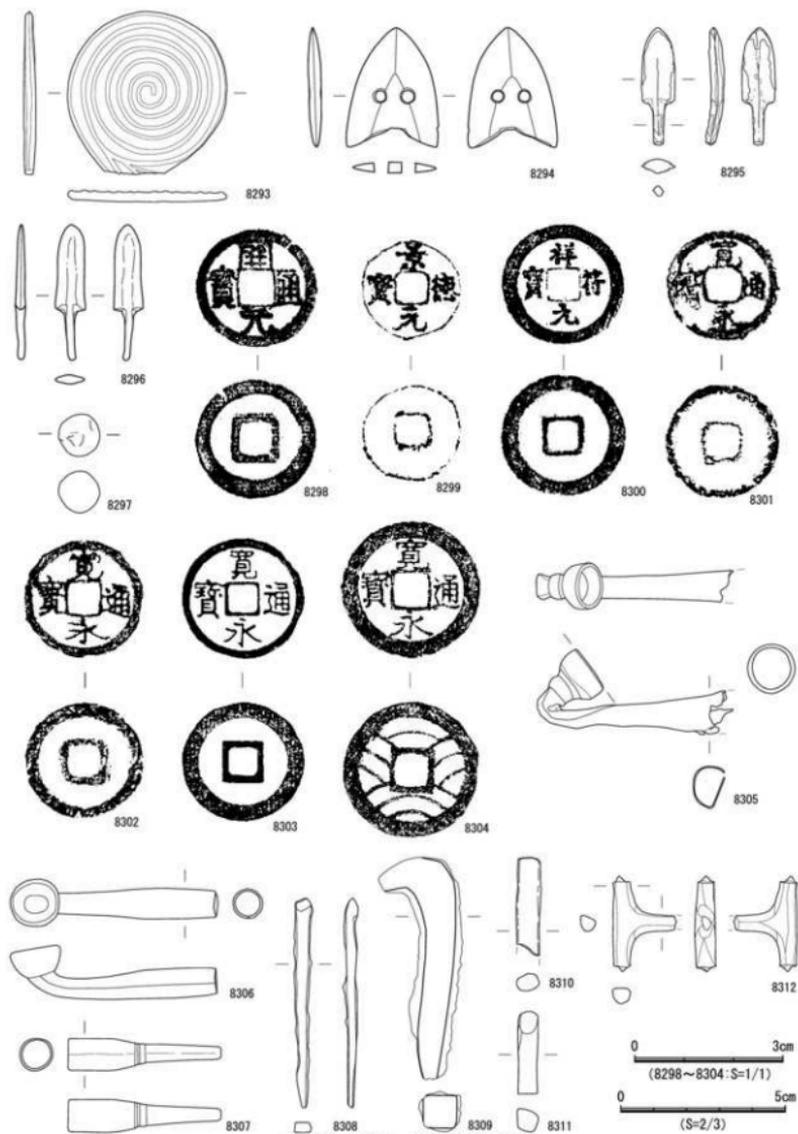


图 2389 包含層 遺物實測圖 (6)

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第131集

荒尾南遺跡B地区Ⅱ
(第6分冊)

2015年3月13日

編集・発行 岐阜県文化財保護センター
岐阜市三田洞東1-26-1
印刷 株式会社もとしんさつ